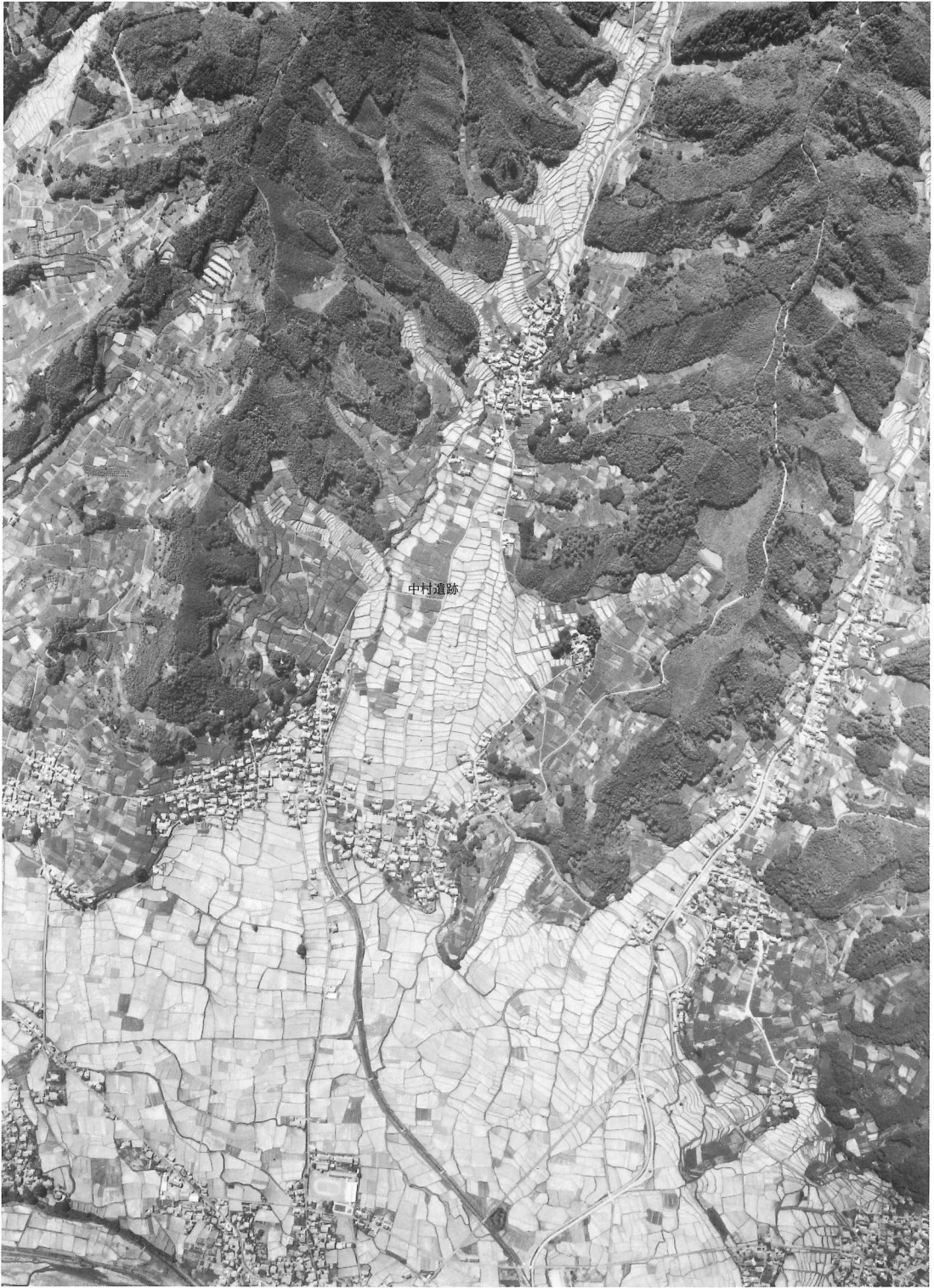


中 村

長野県佐久市根岸中村遺跡調査報告書

昭和58年3月

長野県佐久市教育委員会



中村遺跡航空写真

例 言

- 1、本書は昭和57年8月18日～9月13日にわたって発掘調査された、長野県佐久市大字根岸に所在する中村遺跡の調査報告書である。
- 2、本調査は、東信土地改良事務所の委託を受けて佐久市教育委員会が実施し、農家負担分は国庫補助事業として実施した。
- 3、本調査は、林幸彦を発掘担当者とし、佐久考古学会有志を調査員、大正大学生を調査補助員に、地元根岸、根々井、岩村田地区の方々や、岩村田高校社会班などの協力を得て実施した。
- 4、本書に挿入した遺構、遺物の実測図作成は、調査員、調査員補助全員が行った。
- 5、本書に挿入した写真は、林幸彦、島田恵子、原田政信が撮影したものを使用した。
- 6、本書の編集は、島田恵子が行ない、林幸彦が校閲、監修した。
- 7、本遺跡の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

なお、調査にあたり、長野県教育委員会文化課指導主事臼田武正先生に御指導をいただいた。また、報告書作成に際し、武藤雄六、長崎元広、小林公明、児玉卓文、佐藤信之、福島邦男の各氏には適切な御助言、御指導を賜りました。なお、東信土地改良事務所においても期間の猶予を許され、地元の方々の物心両面にわたる御援助をいただいた。ここに御芳名を記し、厚く御礼申し上げる。

凡 例

- 1、各遺構の略号は次の通りである。縄文時代住居址—J、土壙—D、溝状遺構—M。
- 2、住居址実測図の縮尺は $\frac{1}{50}$ 、炉址の実測図は $\frac{1}{20}$ に統一してある。異なるものは図に明記する。
- 3、土器の実測図は $\frac{1}{4}$ 、石器の実測図は $\frac{1}{3}$ 、石鏃等は $\frac{1}{2}$ に縮尺した。
- 4、遺構平面図におけるスリーントーンは、炉を表わす。
- 5、水系レベルの統一は原則として各遺構ごとに行った。
- 6、図版中遺物の縮尺は土器約 $\frac{1}{4}$ 、石器は石鏃等小形品を $\frac{1}{2}$ 、石斧、凹石等を $\frac{1}{3}$ とした。
- 7、図版中では土器番号を簡略した。例えば第10図1は10—1と表わす。

本文目次

例言

凡例

本文目次

挿図目次

図版目次

I 発掘調査の経緯

- 1、調査に至る動機…………… 1
- 2、調査の概要…………… 1
- 3、調査日誌…………… 3

II 遺跡の環境

- 1、中村遺跡付近の地形・地質の概要…………… 5
- 2、歴史的環境…………… 8

III 層序…………… 9

IV 遺構と遺物

1、住居址

- 1) J 1号住居址……………11
- 2) J 2号住居址……………15
- 3) J 3号住居址……………16
- 4) J 4号住居址……………19
- 5) J 5号住居址……………23
- 6) J 6号住居址……………27
- 7) J 7号住居址……………29
- 8) J 8号住居址……………33
- 9) J 9号住居址……………37
- 10) J 10号住居址……………38
- 11) J 11号住居址……………50
- 12) J 12号住居址……………53
- 13) J 13号住居址……………55

14) J 14号住居址	56
15) J 15号住居址	60
16) J 16号住居址	61
2、土壤	
1) D 1号土壤	63
2) D 2号土壤	63
3) D 3号土壤	64
4) D 4号土壤	65
5) D 5号土壤	66
3、溝状遺構	68
V 総括	74
引用参考文献	80

插图目次

第1图 中村遺跡発掘調査区域図・地形図	2
第2图 周辺遺跡分布図	6
第3图 遺跡層序模式図	9
第4图 遺跡全体図	10
第5图 J 1号住居址実測図 (1:80)	12
第6图 J 1号住居址炉実測図 (1:40)	13
第7图 J 1号住居址出土土器実測図 (1:4)	13
第8图 J 1号住居址出土土器拓影 (1:4)	14
第9图 J 1号住居址出土石器実測図 (1:3)	14
第10图 J 2号住居址実測図 (1:80)	15
第11图 J 2号住居址出土土器拓影 (1:4)	16
第12图 J 2号住居址出土土器実測図 (1:3)	16
第13图 J 3号住居址実測図 (1:80)	17
第14图 J 3号住居址炉実測図 (1:40)	17
第15图 J 3号住居址埋甕 (1:40)	17
第16图 J 3号住居址出土土器実測図 (1:4)	18

第17图	J 3号住居址出土土器拓影 (1 : 4)	19
第18图	J 3号住居址出土石器实测图 (1 : 3)	20
第19图	J 4号住居址实测图 (1 : 80)	21
第20图	J 4号住居址炉实测图 (1 : 40)	22
第21图	J 4号住居址出土土器实测图 (1 : 4)	22
第22图	J 4号住居址出土土器拓影 (1 : 4)	22
第23图	J 4号住居址出土石器实测图 (1 : 3)	23
第24图	J 5号住居址实测图 (1 : 80)	24
第25图	J 5号住居址出土土器实测图 (1 : 4)	24
第26图	J 5号住居址出土土器拓影图 (1 : 4)	25
第27图	J 5号住居址出土石器实测图No.1 (1 : 2)	25
第28图	J 5号住居址出土石器实测图No.2 (1 : 3)	26
第29图	J 6号住居址实测图 (1 : 80)	27
第30图	J 6号住居址炉实测图 (1 : 40)	27
第31图	J 6号住居址埋甕实测图 (1 : 40)	27
第32图	J 6号住居址出土土器实测图 (1 : 4)	28
第33图	J 6号住居址出土土器拓影图 (1 : 4)	29
第34图	J 6号住居址出土石器实测图 (1 : 3)	29
第35图	J 7号住居址实测图 (1 : 80)	30
第36图	J 7号住居址炉实测图 (1 : 40)	31
第37图	J 7号住居址出土土器实测图 (1 : 4)	31
第38图	J 7号住居址出土土器拓影 (1 : 4)	32
第39图	J 7号住居址出土石器实测图 (1 : 3)	33
第40图	J 8号住居址实测图 (1 : 80)	34
第41图	J 8号住居址出土土器实测图 (1 : 4)	34
第42图	J 8号住居址出土土器拓影图 (1 : 4)	35
第43图	J 8号住居址出土石器实测图 (1 : 3)	35
第44图	J 9号住居址实测图 (1 : 80)	36
第45图	J 9号住居址炉址实测图 (1 : 40)	36
第46图	J 9号住居址出土土器实测图 (1 : 4)	37
第47图	J 9号住居址出土土器拓影 (1 : 4)	37
第48图	J 9号住居址出土石器实测图 (1 : 3)	38

第49図	J 10号住居址実測図 (1 : 80)	39
第50図	J 10号住居址炉実測図 (1 : 40)	40
第51図	J 10号住居址石組施設実測図 (1 : 40)	40
第52図	J 10号住居址出土土器実測図No. 1 (1 : 4)	42
第53図	J 10号住居址出土土器実測図No. 2 (1 : 4)	43
第54図	J 10号住居址出土土器実測図及拓影 (1 : 4)	44
第55図	J 10号住居址出土石器実測図No. 1 (1 : 3)	45
第56図	J 10号住居址出土石器実測図No. 2 (1 : 3)	46
第57図	J 10号住居址出土石器実測図No. 3 (1 : 3)	47
第58図	J 10号住居址出土石器実測図No. 4 (1 : 3)	48
第59図	J 10号住居址出土石器実測図No. 5 (1 : 3)	49
第60図	J 11号住居址実測図 (1 : 80)	50
第61図	J 11号住居址炉実測図 (1 : 40)	50
第62図	J 11号住居址埋甕実測図 (1 : 40)	50
第63図	J 11号住居址屋内祭祀施設実測図 (1 : 40)	51
第64図	J 11号住居址出土土器実測図 (1 : 4)	51
第65図	J 11号住居址出土土器拓影 (1 : 4)	52
第66図	J 11号住居址出土石器実測図 (1 : 3)	52
第67図	J 12号住居址実測図 (1 : 80)	53
第68図	J 12号住居址炉実測図 (1 : 40)	54
第69図	J 12号住居址出土土器実測図 (1 : 4)	54
第70図	J 12号住居址出土土器拓影 (1 : 4)	54
第71図	J 12号住居址出土石器実測図 (1 : 3)	54
第72図	J 13号住居址実測図 (1 : 80)	55
第73図	J 13号住居址出土土器拓影 (1 : 4)	56
第74図	J 13号住居址出土石器実測図 (1 : 3)	56
第75図	J 14号住居址実測図 (1 : 80)	57
第76図	J 14号住居址炉実測図 (1 : 40)	57
第77図	J 14号住居址埋甕実測図 (1 : 40)	57
第78図	J 14号住居址出土土器実測図 (1 : 4)	58
第79図	J 14号住居址出土土器拓影 (1 : 4)	59
第80図	J 15号住居址実測図 (1 : 80)	59

第81図	J 15号住居址炉実測図 (1 : 40)	60
第82図	J 15号住居址土器実測図 (1 : 4)	60
第83図	J 15号住居址出土土器拓影 (1 : 4)	60
第84図	J 15号住居址出土石器実測図 (1 : 3)	61
第85図	J 16号住居址実測図 (1 : 80)	62
第86図	J 16号住居址炉実測図 (1 : 40)	62
第87図	J 16号住居址出土土器実測図 (1 : 4)	62
第88図	J 16号住居址出土土器拓影 (1 : 4)	62
第89図	D 1号土壙実測図 (1 : 30)	63
第90図	D 1、2、3号土壙出土石器実測図 (1 : 3)	63
第91図	D 2号土壙実測図 (1 : 30)	64
第92図	D 3号土壙実測図 (1 : 30)	64
第93図	D 4号土壙実測図 (1 : 30)	65
第94図	D 4号土壙出土土器実測図 (1 : 4)	65
第95図	D 4号土壙出土石器実測図 (1 : 3)	66
第96図	D 5号土壙実測図 (1 : 30)	66
第97図	D 5号土壙出土土器実測図及拓影 (1 : 4)	67
第98図	M 1号溝状遺構実測図 (1 : 90)	68

表 目 次

第1表	中村遺跡石器一覧表	69
第2表	中村遺跡検出住居址一覧表	75
第3表	中村遺跡検出土壙一覧表	77

図 版 目 次

図版一	1. 中村遺跡遠景 (北方より) 2. 中村遺跡遠景 (南方より) 3. 中村遺跡全景 (東方より)
図版二	1. J 1号住居址全景 (南方より) 2. J 1号住居址炉 3. J 1号住居址敷石 4. J 2号住居址全景 (南方より)
図版三	1. J 3号住居址炉 2. J 3号住居址埋甕 3. J 4・5号住居址全景 (東方より) 4. J 4号住居址遺物出土状況 5. J 4号住居址遺物出土状況
図版四	1. J 6号住居址全景 (北方より) 2. J 6号住居址埋甕 3. J 7号住居址炉 4. J 7号住居址全景 (北西より)

- 図版五 1. J 8号住居址遺物出土状況 2. J 8号住居址遺物出土状況 3. J 8号住居址全景（西方より）4. J 9・15・16号住居址全景（東方より）
- 図版六 1. J 10号住居址遺物出土状況（北西より）2. J 10号住居址炉 3. J 10号住居址 4. J 10号住居址遺物出土状況 5. J 10号住居址遺物出土状況
- 図版七 1. J 10号住居址全景（東方より）2. J 11号住居址全景（北東より）3. J 11号住居址 4. J 11号住居址埋甕
- 図版八 1. J 12・13号住居址全景 2. J 14号住居址全景（南東より）
- 図版九 1. J 14号住居址炉 2. J 14号住居址埋甕 3. J 15号住居址全景（東方より）4. D 4号土壙遺物出土状況 5. D 4号土壙
- 図版十 1. J 2号住居址出土土器 2. J 1号住居址出土土器
- 図版十一 1. J 3号住居址出土土器
- 図版十二 1. J 4号住居址出土土器 2. J 5号住居址出土土器
- 図版十三 1. J 6号住居址出土土器
- 図版十四 1. J 7号住居址出土土器
- 図版十五 1. J 8号住居址出土土器 2. J 9号住居址出土土器
- 図版十六 1. J 10号住居址出土土器
- 図版十七 1. J 10号住居址出土土器
- 図版十八 1. J 10号住居址出土土器 2. J 11号住居址出土土器
- 図版十九 1. J 11号住居址出土土器 2. J 12・13号住居址出土土器 3. J 14号住居址出土土器
- 図版二十 1. J 14号住居址出土土器 2. J 15.16号住居址出土土器 3. J 15号住居址出土土器 4. D 5号土壙出土土器
- 図版二十一 1. D 4号土壙出土土器 2. D 5号土壙出土土器 3. D 5号土壙出土土器
- 図版二十二 1. グリッド出土土器 2. 発掘調査スナップ
- 図版二十三 1. J 1・3～4・6～8・11～13.15号住居址、D 1号土壙出土石器、J 5号住居址出土石器
- 図版二十四 1. J 10号住居址出土石器 2. J 10号住居址出土石器 3. J 一1・3・4号住居址出土石器
- 図版二十五 1. J 4・5号住居址出土石器 2. J 5・6・7・8号住居址出土石器
- 図版二十六 1. J 9・10号住居址出土石器 2. J 10号住居址出土石器
- 図版二十七 1. J 10号住居址出土石器 2. J 10号住居址出土石器
- 図版二十八 1. J 11・12・13・15号住居址（M 1号溝状遺構）、D 4号住居址出土石器 2. グリッド出土石器
- 図版二十九 1. グリッド出土石器 2. グリッド出土石器
- 図版三十 1. グリッド出土石器 2. グリッド出土石器

I 発掘調査の経緯

1、調査に至る動機

中村遺跡は、佐久市大字根岸字日向に所在する。近接して石附遺跡、小金平遺跡、舞台場遺跡などがある。

本遺跡は昭和57年度佐久市北部地区圃場整備事業に伴ない、破壊を余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存を要するに至った。

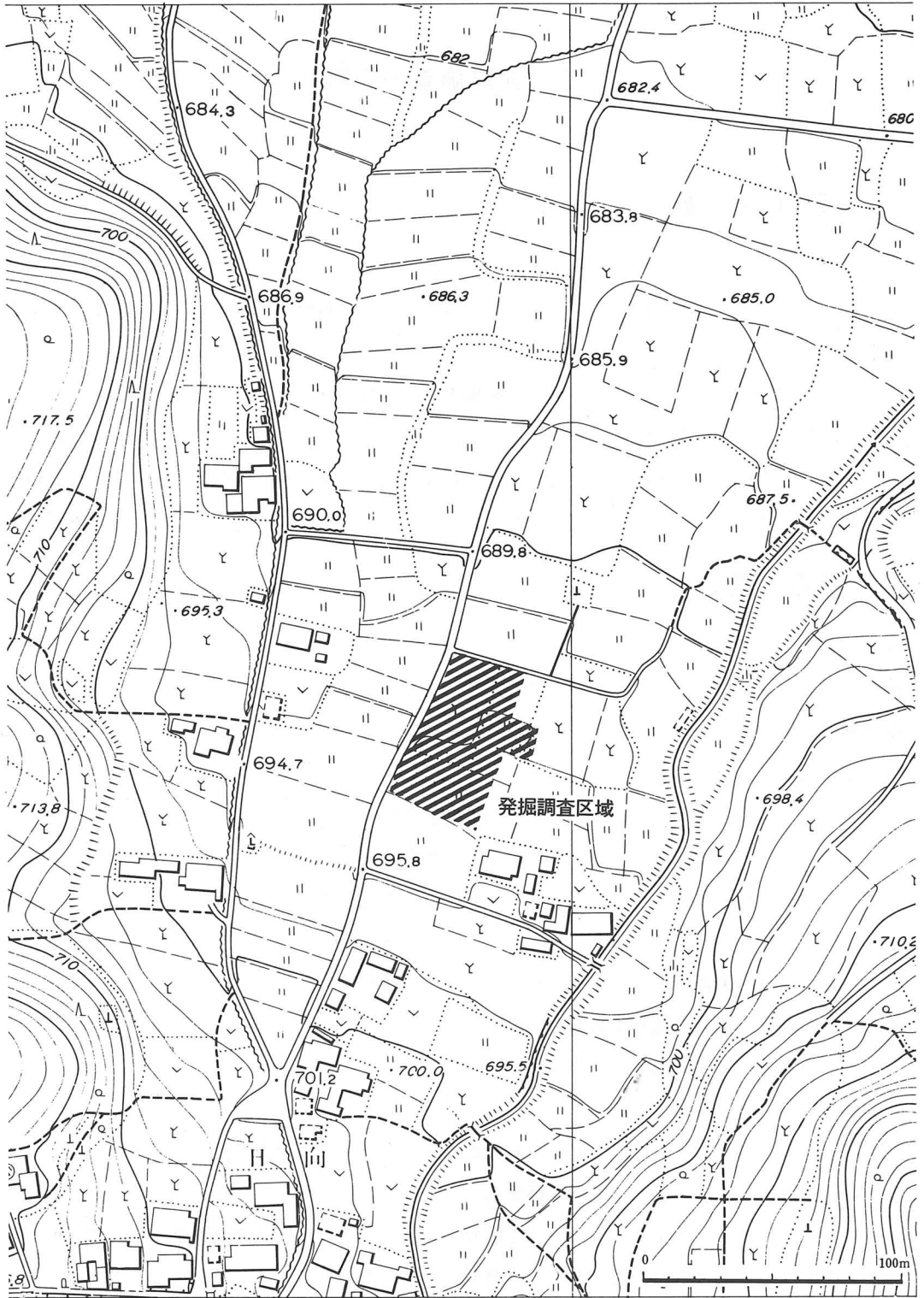
佐久市教育委員会は、発掘担当者を林幸彦とし、佐久考古学会有志、地元の方々の協力を得て8月18日より発掘調査を実施する運びとなった。 (事務局)

2、調査の概要

- 遺跡名 中村遺跡
- 所在地 長野県佐久市大字根岸字日向
- 発掘期間 昭和57年8月18日～昭和57年9月13日
- 調査に関する事務局
 - 戸塚平一郎 佐久市教育委員会教育長
 - 白田 幸作 // 教育次長
 - 土屋 四郎 // 社会教育課長
 - 井出 喜平 // 社会教育係長
 - 堀内美喜男 // 社会教育係

- 調査団の構成は下記の通りである。

団 長 戸塚平一郎
調査担当 林 幸彦 調査員 森泉定勝、井上行雄、三石延雄、大井今朝太、島田恵子、
小山岳夫、三石宗一、工藤かよ子、白倉盛男
調査補助員 原田政信、堺益子、篠原浩江、佐々木宗昭、堤隆、茂木智里
協力者 市村しづ子、佐藤栄子、工藤郷子、篠原つる子、橋詰操、牧野こと、須藤房子、
市村はるい、岩下吉代、小栗源三、大井恵美子、大井三四、依田さき子、武田
きく江、須藤久米子、細萱建一郎、小松富美男、工藤信、萩原茂雄



第1図 中村遺跡発掘調査区域図・地形図（1:2500）

3、調査日誌

- 8月18日(水) 晴れ 器材運搬及びテント設営を行なう。
- 8月19日(木) // 重機により表土の削平。プラン確認作業。
- 8月20日(金) // プラン確認作業。礫が多いことと強粘土のため作業が困難。落ち込みらしき黒色土もみられ、集中的に精査を行なうが、はっきりしたプランが確認されない。
- 8月21日(土) // 前日に同じ。
- 8月22日(日) // 休み
- 8月23日(月) // 一軒プラン確認に成功。しかし、切り合い関係は不明瞭。また、道路際のきー1・100グリッドに焼失住居らしき落込みを確認。
- 8月24日(火) // 北西久保遺跡より応援あり。三軒の切り合い箇所の確認にはいり、外郭だけ確認。暑さと作業困難な土質のため、調査員・協力者共疲労の色が濃い。
- 8月25日(水) // J13号住居址まで確認。ただし、いまだ不明瞭な箇所も多い。
- 8月26日(木) // プラン確認
- 8月27日(金) 曇り時々小雨 本日よりJ3号住居址の掘り下げにはいる。溝の掘り下げ。
- 8月28日(土) 晴れ J1号住居址の精査及び実測。J2住の精査、J3・4住の掘り下げ及び、その他の確認作業を行なう。
- 8月29日(日) 休み
- 8月30日(月) // J2、J3、J4、J5の掘り下げ。
- 8月31日(火) // J2写真・実測図作成。J3の炉セクション図作成・ピット検出床面の精査、J5・J6・J7の掘り下げ。溝の写真
- 9月1日(水) 曇後晴 J1・3の写真撮影。J4・5・6・7・8・9の掘り下げ。
- 9月2日(木) 晴れ J2・3・6の写真撮影、J5・6・7・8・9・10の掘り下げ。J3・6の実測図作成。
- 9月3日(金) 曇 J5・8の精査、J7・9・10の掘り下げ、J7の炉址セクション図作成。
- 9月4日(土) // J3の埋甕セクション図作成、J4・5のセクション図作成、J6・7・8の写真撮影、J9・10・11・12・13の掘り下げ。
- 9月5日(日) 晴れ J4・6・7・9の写真撮影・セクション図及び実測図作成。J10・11・12・13・D2・3の掘り下げ。

- 9月6日(月) 晴れ J 4・5・10・11・12・13の掘り下げ、J 7・9の実測図作成及び写真撮影。J 14の炉・ピット検出。
 - 9月7日(火) 〃 J 4・5・11・12・14の実測図作成・写真撮影。J 1・13・15の掘り下げ・セクション図作成。
 - 9月8日(水) 〃 J 1の炉切解。J 4・5・11・13・14の実測図作成・写真撮影。J 10・15の掘り下げ。
 - 9月9日(木) 〃 J 1・14の写真撮影、セクション図作成、J 15の炉切解・セクション図作成。J 4・5・13・16の実測図作成。
 - 9月10日(金) 雨 D 4実測図作成。全体図作成。
 - 9月11日(土) 晴れ 図面整理
 - 9月12日(日) 雨 休み
 - 9月13日(月) 晴れ D 4・5・特殊遺構実測図作成、J 10の仕上及び全体写真撮影
- 昭和57年11・12月 遺物洗い及び註記、復元作業、遺物実測及びトレスを行なう。また遺構図面修正・トレスを行なう。
- 昭和58年2・3月 原稿執筆及び割付けを行ない、編集作業の後、報告書刊行。

(林 幸彦)

II 遺跡の環境

1、中村遺跡附近の地形地質の概要

日本一の長流千曲川は佐久山地の甲武信ヶ岳を源流として甲州・武州・信州の広く深い山岳地帯を水源涵養地帯に持っているために水量も豊かで年間の流量の変化も少い。この安定した清流は古くから下流流域の水田用水槽に利用され佐久鯉を育てた用水であり、佐久地方だけで十ヶ所の水力発電所を持っている。そのために大正時代前期までは鮭や鱒も上ってきたという千曲川上流の現在は到る所発電所ダムにせき上められ、水は地中トンネルを流れているので清流のほとぼる風景の見られる所は誠に少い。千曲川上流の安定した清流は以前には東京都の上水道源にと目をつけられた事もあり、最近では上流本流部で大規模の多目的ダムの開発など噂されている。現在でも水の安定のため各支流上流部に災害防止・多目的ダムが数多く築かれている。梓山ダム・秋山ダム・立岩ダム・三寸木ダム・古谷ダム・雨川ダム・香坂ダム・湯川ダム・深沢ダムがそれであり、そのために佐久平の用水は安定しており、他の気象的要素その他も加わり全国的に見ても稲作多収穫をほこっている。

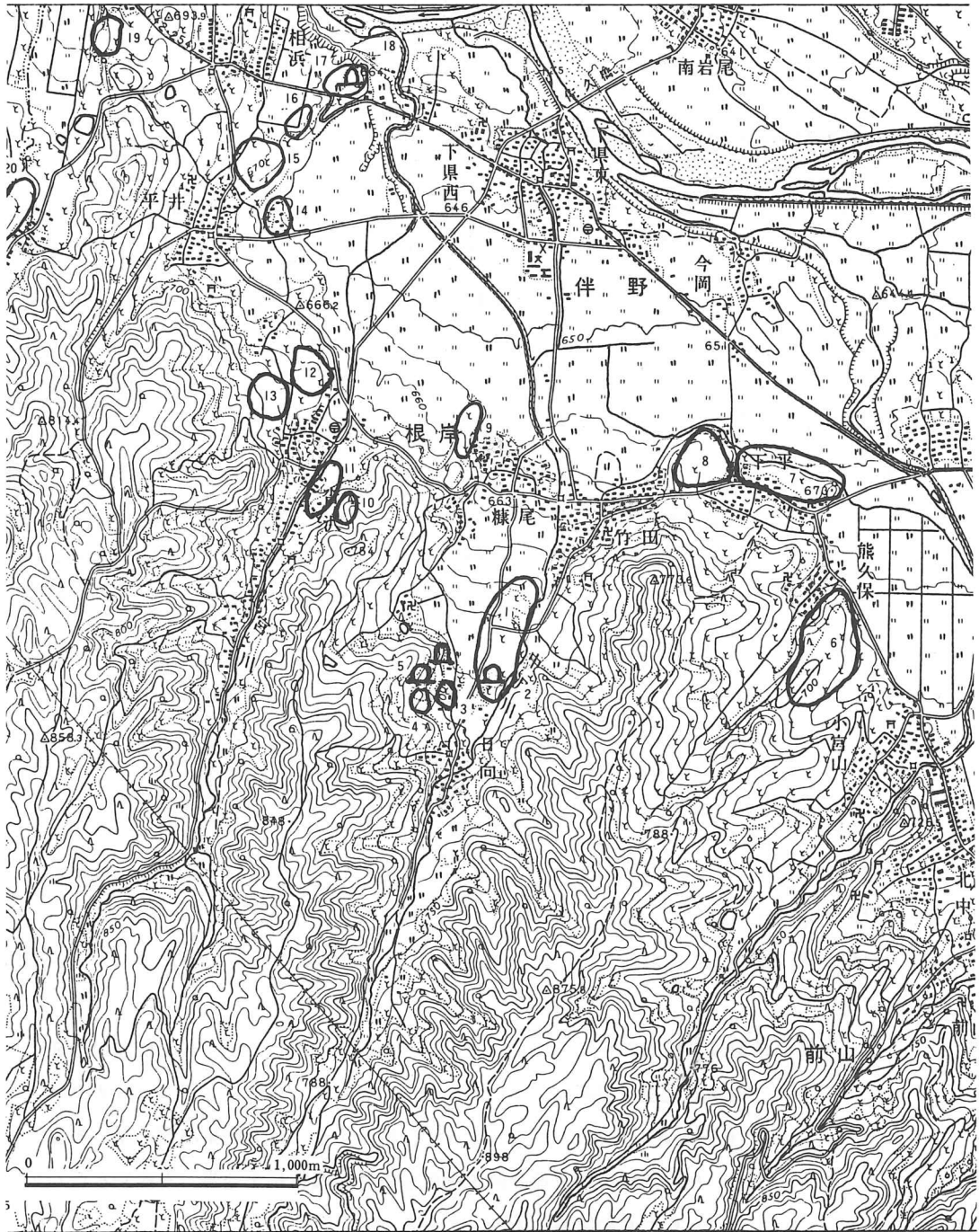
佐久平は白田町附近の標高700m 佐久市伴野で640mの間東西8km 南北14kmの菱形の高原性盆地であり中央を千曲川が多く支流を集めて南から北へ貫流している。その佐久平の中心部西端の立科火山のゆるやかな山麓傾斜面と沖積平地の交る地点 千曲川左岸の小支流中沢川の中流域佐久市日向部落と糠尾地区の間に中村遺跡がある。

地形的には立科火山北斜面標高1000m附近の一杯水近くから北に向って開く小谷から流れ出す中沢川が日向部落を流下して谷巾がようやく広がる標高692m附近の谷の中心部に位置している。

東側の尾根が虚空蔵山(773m)西側の尾根末端伊勢山であり、北に谷が開けて伴野の水田地帯である。

この附近の地質の基盤は洪積層の相浜層で凝灰質の砂岩・頁岩・礫岩の水平層が相浜の千曲川断崖に好露出があり、根岸の尾根末端部には全体的に分布が見られる。この地層からはナウマン象の歯・メタセコイヤの化石を産した事があった。この相浜層の上部には火山集塊岩が厚く重なっている。伴野の水田地帯は相浜断崖浸蝕以前の淡水湖底堆積物の微粒粘土地帯で有機物を含む黒色粘土の厚層があり、これが相浜瓦の原料ともなっている。

中村遺跡附近の表土は中沢川上流部から押し出した氾濫原の谷口扇状地堆積物で黒色粘土と立科火山系の安山岩の大小の礫を含んでいた。 (白倉盛男)



第2図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	縄	弥	古	歴	備考
1	中村	根岸字中村	谷口扇状地	○	○	○	○	本調査
2	陵古墳	〃	〃			○		大正13年の道路改修により現地に移築
3	十二下	根岸字十二下	〃	○			○	
4	十二	〃 十二	山麓				○	
5	釜塚古墳	〃	山頂				○	
6	後沢	小宮山字後沢	丘陵	○	○	○	○	
7	北裏	伴野字北裏	台地	○	○	○	○	
8	西裏	〃 字西裏	丘陵	○	○	○	○	
9	伊勢山	根岸字伊勢山	丘陵		○	○		
10	大日影 A	〃 字大日影		○	○	○	○	
11	大日影 B	〃	谷口扇状地	○				
12	坪の内	〃 字坪の内	丘陵	○	○	○	○	
13	榛名平	〃 字榛名平	〃	○				
14	中島	〃 字中島	台地	○	○	○	○	
15	小金平	〃 字小金平	台地	○	○	○	○	
16	腰巻	〃 字相浜田	〃		○	○	○	
17	唐松坂	〃 字唐松坂	〃	○	○	○	○	
18	火の雨塚古墳	〃	〃			○		
19	石附	〃 荻原	丘陵			○		
20	五本木	根岸字五本木		○	○	○		

2、遺跡の歴史的環境

野沢平を北流する千曲川に北東に方位を指す沢筋に沿って流れる中沢川・宮川は、下県西で千曲川に合流する。千曲川左岸の今岡から下県にかけて形成されている段丘より漸次西方にむけて高くなる緩斜面（谷川扇状地）がみられ、さらにこの谷口扇状地より一段高く立科山塊の東端にあたる丘陵が、幾つも北東に伸びている。

宮川に臨んだ丘陵平坦面には榛名遺跡があり神子柴遺跡出土の尖頭器に類例をみることのできる珪質頁岩製の尖頭器が、さらに、宮川をさかのぼった東立科A遺跡では縄文時代早期の押型文土器が採集されている。縄文時代の前期～後期の遺跡は、700～800mの標高を測る丘陵上や谷口扇状地上に分布している。前期は沓沢の坪ノ内・大日影遺跡で、関山式が出土している。この時期の住居址群は小宮山の後沢遺跡で6軒、根岸の小金平遺跡で1軒検出されている。中期では本遺跡の他に大日影・十二下遺跡等がある。大日影遺跡では後期堀ノ内式の注口土器や深鉢が確認されている。

弥生時代の遺跡の分布は、縄文時代よりさらに一段低い段丘上にも広がっている。中期では北裏・西裏遺跡などで栗林式の壺や甕形土器片・磨製石斧が採集されている。後期の箱清水式期になると二束餅・唐松沢・舞台場・後沢遺跡があり、舞台場遺跡で13軒、後沢遺跡で36軒の住居址群が検出されている。特に後沢遺跡では、3基の方形周溝墓も検出された。

古墳時代は弥生時代とほぼ重なるように、遺跡が分布している。調査が行なわれている舞台場遺跡で鬼高期の住居址10軒が検出されている。他に、唐松坂・坪ノ内・下県遺跡などがある。古墳はすべて円墳で、火の雨塚・墓陵・十二・釜塚・坪ノ内・滝の峰古墳などがあっていづれも径10~20mの小円墳である。いわゆる古式古墳は現在のところ確認されておらず、7世紀から8世紀前半といわれている。火の雨塚古墳は、佐久平で数少い埴輪を伴う古墳である。石附遺跡では、4基の窯址が検出されているが、1基は須恵器の窯址であったが他の3基はその構造的特徴と多量の炭の出土している点から製炭窯址とみられる。いづれも古墳時代の末期に位置付けられるものである。古代牧・須恵器生産経営とも関連してくるものと思われ注目される。

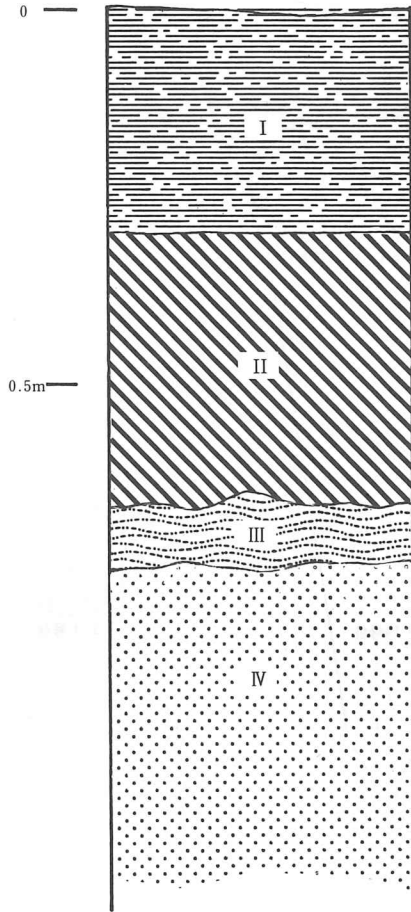
奈良時代の遺跡は、従来はほとんど周知されていなかったが、近年の大規模な開発事業に伴って行なわれる調査により、市内でも周防畑B・舞台場・小金平遺跡等で検出されている。

平安時代になると遺跡の分布は、古墳時代とほぼ重なるもののさらに拡大の傾向がうかがえ低所の段丘上や丘陵を問わずみられるようになる。舞台場遺跡では、20軒の住居址が検出され、小金平遺跡では、遺跡の一部の調査であるが1軒が確認されている。この地域で注目されるのは、下県の休石遺跡がある。昭和初年から完形の須恵器大甕が出土した遺跡として知られていたが、その性格は判明しなかった。その後、昭和43年県道の改修工事の際に大甕3個体とともに、長頸壺・小形甕がそれぞれ内部より出土した、さらに、岸野村誌刊行会による昭和53年の確認調査によって、これら一群の既出遺物は、配石址や炭火層等の存在と関連し火葬墓としての性格が強いとされた。

このように、当地域では先土器時代より濃密な遺跡の分布をみてとれるが、特に古墳時代以降の事象は、古代の牧の経営、須恵器の生産、製鉄址と製炭窯址との関連、県の所在等佐久地方の古代史解明の中で、文献史学、民族学との照合をなす上でも有効な資料であるといえることができる。

(林 幸彦)

III 層 序



第3図 層序模式図

第I層 I層は表土層でやや灰色がかった黒色土層である。層厚は20~40cmを測る耕作土である。粘質が強く、立科火山系の径3~10cmの安山岩を含んでいる。遺物は耕作の影響や風化によって著しく磨耗した状態で出土する。

第II層 II層は黒色土層で、粒子細く粘性が強い場所によっては多量の安山岩の大小礫を含んでいて非常に堅い。層厚は水田下で10~20cm、畑地で40~50cmを測る。

第III層 III層は茶褐色土層で、粘性に富み安山岩の径5~10cm大の礫を含む。

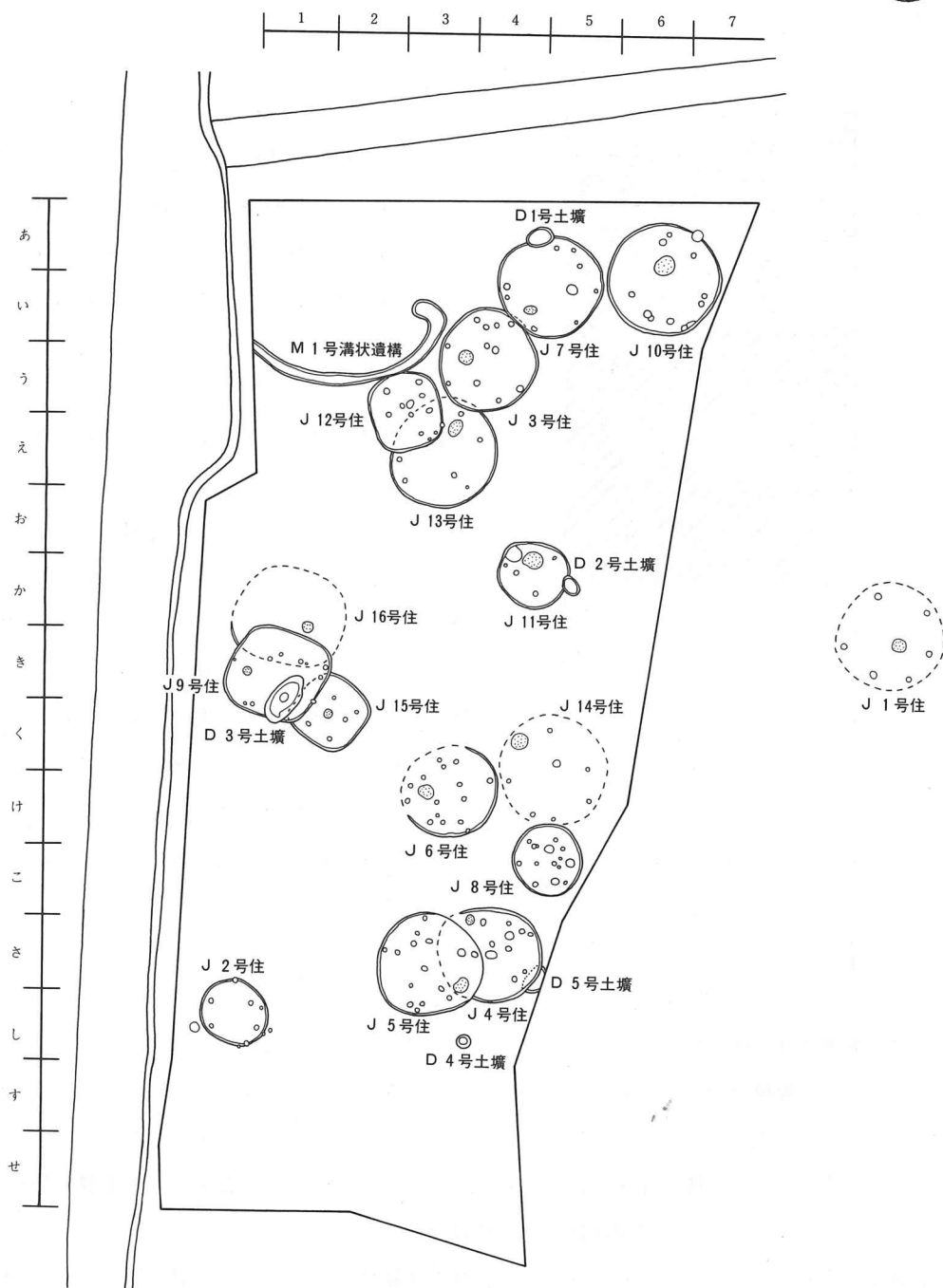
第IV層 IV層は黄褐色土層で、大小の安山岩と水性ロームとなり、粘質に富んでいる。安山岩の大きなものは1m前後のものもある。調査対象地の北側は特にこの安山岩が多く認められた。

遺跡の東側には、中沢川が北流しており、比高差は5~10mを測る。地形は、南から北へ傾斜し、西側には小規模な河川が存在していたと思われる現在水田用水が中沢川と平行して流下している。前章でも述べているように、谷口扇状地のため大小の礫が多量に各層に含まれている。

相浜・平井・沓沢から熊久保・小宮山にかけての一带は、強力な粘質をもった土壌が分布していることで著名であり、この日向地区も例外ではない。

I層は、水田の場合下部に酸化鉄を含んだ帯状の赤褐色土がみられる。II・III層は、南側の高い所では、認められず、I層直下がIV層となる。

(林 幸彦)



第4図 中村遺跡検出遺構全体図 (1:200)

IV 遺構と遺物

本遺跡から検出された遺構は、住居址16軒、土壇5基、溝状遺構1基である。これ等の遺構は谷川扇状地に立地していたため、上流からの押し出しや付近の中沢川の氾濫等により、遺構の一部を押し流し、その上に多量の土と礫がおおいかぶさっていて、プラン確認には相当な努力を要した。

遺構からは、縄文時代中期を中心として、縄文前期、後期の土器も出土している。遺物は、各住居址毎に器形、文様構成の明らかなものを主に図示した。分類は、器形、文様を対象に煩雑にならないよう基本的な面を重視して大別した。

第I群の土器——縄文時代前期繊維含有の土器

- 1類——花積下層式期の土器
- 2類——花積下層式期と並行期もしくは関山式に下る土器
- 3類——関山式期の土器
- 4類——1～3類に明確に分類し得ない縄文を主体とする土器

第II群の土器——縄文時代前期末の土器

- 1類——籠畑式期の土器

第III群の土器——縄文時代中期中葉の土器

- 1類——井戸尻式期の土器

第IV群の土器——縄文時代中期後半の土器

- 1類——曾利I式期の土器 a種曾利系、b種唐草文系
- 2類——曾利II式期の土器 a種曾利系、b種唐草分系
- 3類——曾利III式期の土器 a種曾利系、b種唐草文系
- 4類——曾利IV式期 a種曾利系、b種唐草文系
- 5類——曾利V式期の土器 a種曾利系、b種唐草文系

第V群の土器——縄文時代後期の土器

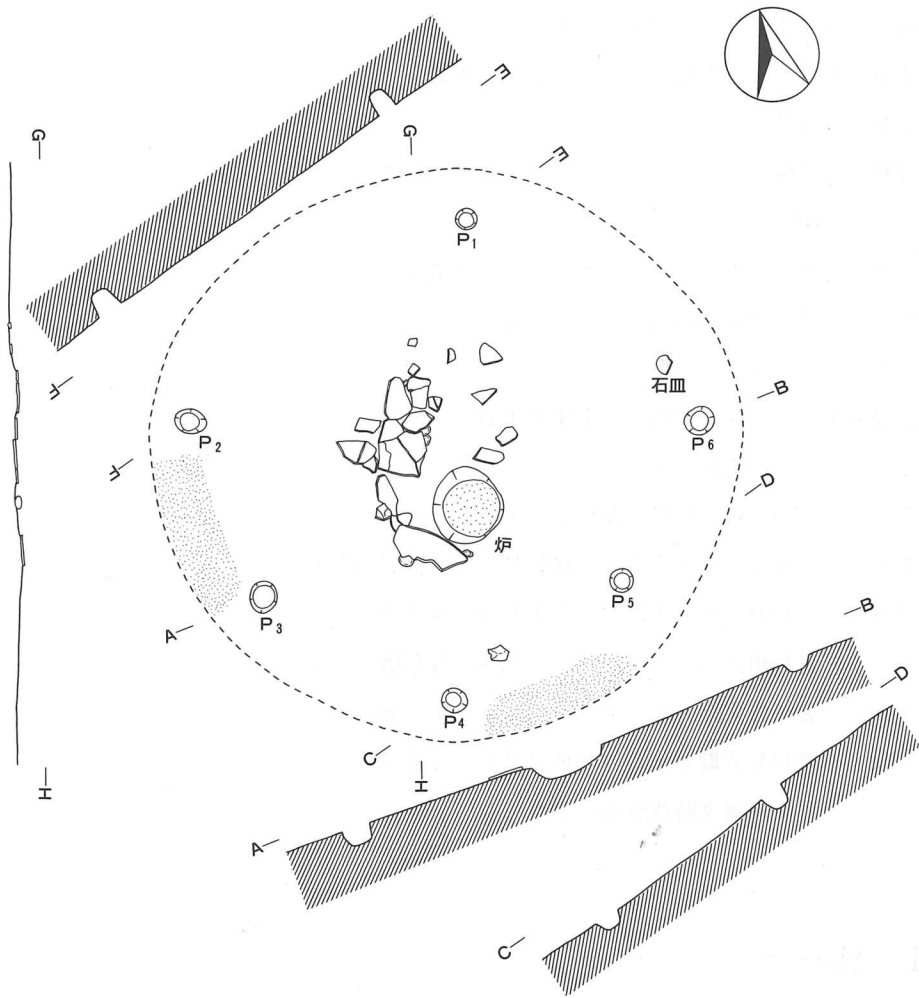
1 住居址

1) J1号住居址(第5～10図)

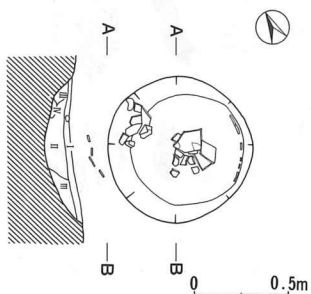
本住居址は、調査区中央の最東端か・きー9・10グリッド内にて検出された。検出の動機は、

本遺構の上部に、付近の水田や畑から耕作に邪魔になる礫を一括して集め、巾2m、高さ1.5mの規模で積み上げ、それは古墳をも想定させられる状態となっていた。当地方ではこれを『ヤックラ』と称している。古墳の上部にこのような礫を積みあげている例もあることから、念のためにこの礫を丁寧に取り除く作業を開始した。案の上、礫を積みあげたヤックラではあったが、礫を取り除いた地表面には輝石安山岩が配された敷石住居址が露出していた。

平面プランは、ピットの配列から復元すると、東西6.2m、南北6mを測る正円形を呈するであろうと想定される。床面は、すでに露出していたことから軟弱ではあったが、住居址中央から炉周辺にかけて敷石が配され、最大のもので70×30cmを測る鉄平石が敷かれていた。また、西壁～南



第5図 J1号住居址実測図 (1:80)



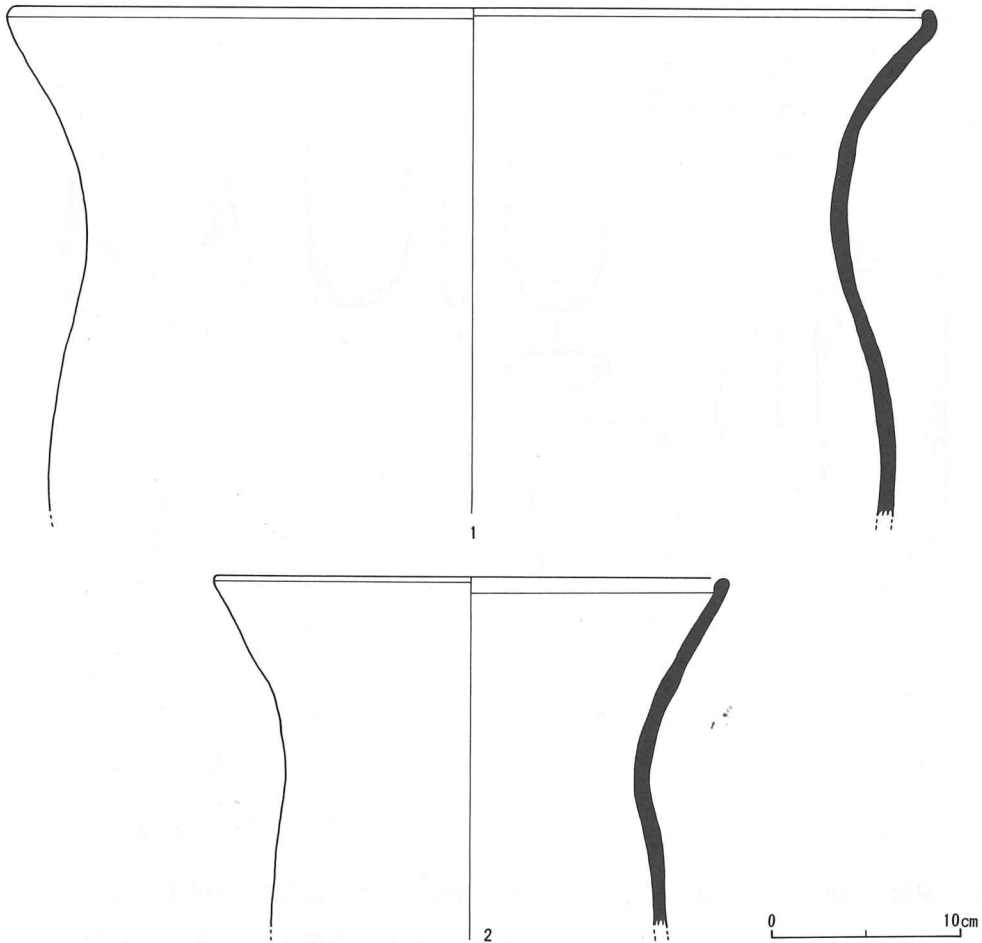
- I 褐色土
- II 黒褐色土、混炭化粒、焼土
- III 茶褐色土、混焼土
- IV 黒色土、炭化ブロック層

第6図 J1号住居址炉実測図(1:40)

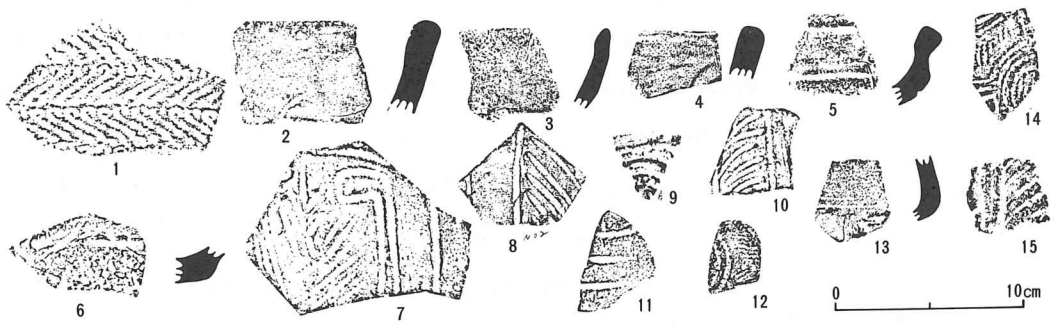
壁際の床面には焼土が散布していた。ピットは、6個発見されたがほぼ規則的な配列を示しており、P₁とP₂、P₁とP₆の間にもう2個の配列が考えられるが、床面の攪乱がひどく発見不可能であった。規模は22~30×23~32cm、深さ13~26cmを測る小型のピットである。

炉は、第7図に図示した底部を欠く2個体の無文土器が埋設された埋甕炉である。焼土はII層中に多量に混入しており、IV層は炭化材の同化したブロック層であった。80×60cm、深さ18cmを計測し多用された感を呈する。

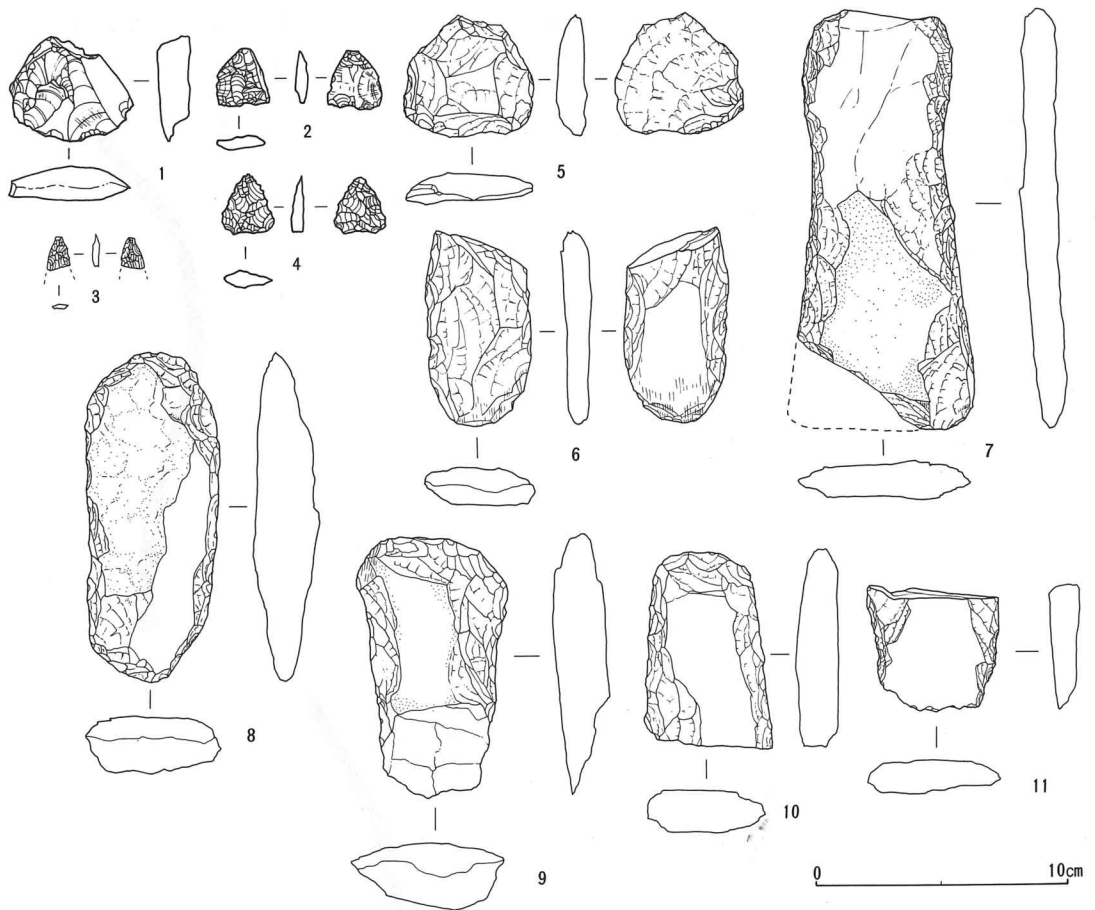
すでに床面に達していた関係上、遺物の出土は炉内の無文深鉢2個体と床面に散在していた破片のみと少ない。炉内埋設土器は、器肉がうすく胴下部~底部を欠く。口径48cmを測る大深鉢と口径27cmを測る



第7図 J1号住居址出土土器実測図(1:4)



第8図 J1号住居址出土土器拓影(1:4)



第9図 J1号住居址出土石器実測図(1~4は1:2・5~11は1:3)

中型の深鉢とがあり、大深鉢が炉内にすっぽりと埋設されていたものとおもわれる。両方とも3cm~7cm大の破片となって折り重なる状態で出土したが、中型深鉢片は炉断面図に図示したように炉上部中央から出土しており、埋設されていたものではなく、炉内においてなんらかの機能を

果していたものであろう。器形は、頸部がくびれ口縁部が外反して開く。最大径は口縁部にある。かなり長時間熱をうけていたものとおもわれるが、篋状工具によって磨かれた器膚がところどころに残在しており、焼成も固くしっかりしている。色調は黄褐色を呈する。

床直上から出土した土器片を第8図の拓影に示してあるが、無文口縁部の2~5を除いた他は7~15まで第IV群b種に属する篋描沈線による綾杉文とその変形文とで構成されている。1は第I群3類に属するループ文の関山式土器である。6は編布状の圧痕をもつ底部片である。

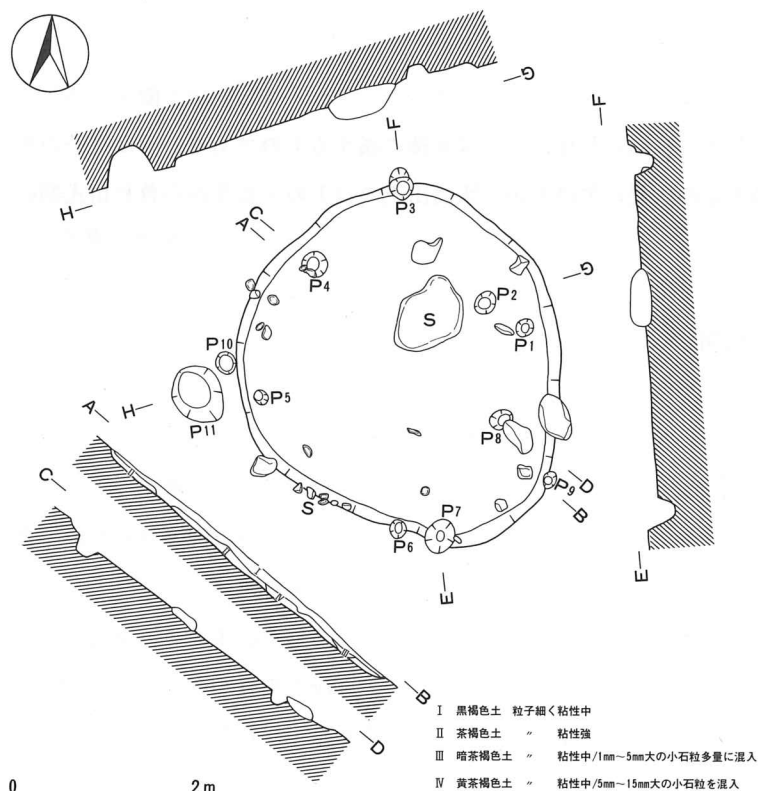
石器は、石鏃4、ピエス・エスキュー1、打石斧7、石皿片が出土した。6は、特に使用痕が顕著である。いずれもヤックラ下部からの出土であり、本址に伴なうものは少ないものと考えられる。本住居址の時期は、炉埋設無文粗製土器のみでは、時期決定をする所見に欠けるが、J14号住居址との構造上、その他の類似点から、曽利V式期と判断される。(島田 恵子)

2) J2号住居址(第10~12図)

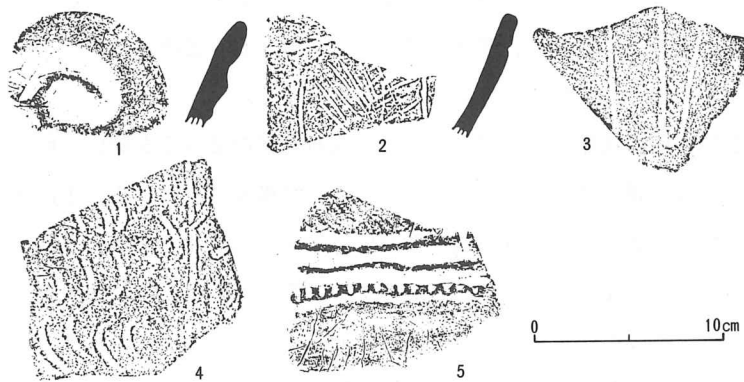
J2号住居址は、調査区南西端のさ・しー0・1グリッド内より検出された。本遺跡の立地は谷川扇状地のため上方から土石流の押し出しにより土とおびただしい数の礫が遺構内に流れこん

でおり、遺構検出には非常に困難をきたした。また、本住居址は遺構内に70×75cmを測る大きな石が床面内にしっかり埋っており、遺構に共なる礫なのか、当初その判断に迷った。しかし、J3号、J4号と各住居址の掘り下げを行なってゆく過程で、ようやくこれ等のおびただしい礫は前述した要因によって遺構内に流れこんでいることが判明した。

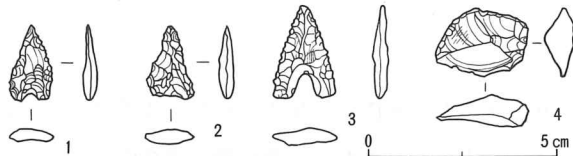
平面プランは、東西3.35m南北3.7mを測り、南東コーナーがやや張り出した不整な円形を呈する。壁は、西壁が明確に掘り込まれ、壁



第10図 J2号住居址実測図(1:80)



第11図 J 2号住居址出土土器拓影(1:4)



第12図 J 2号住居址出土石器実測図(1:2)

高は10cmを計測するが、東南北壁は3~10mを測り、軟弱で不明確な面があり押し出しにより流出したものと考えられる。

覆土は褐色土を基調とした4層によって形成されている。

ピットは、P₂が23×23-14cm、P₄が27×27-15

cmを測り、良好な状態で検出された。その他は、壁際や壁中、壁外に発見されており柱穴といえない規模のものや本住居址に伴なうのか疑問のものが多い。

炉およびその他の施設はみられず、本

住居址は、洪水により破壊されようやくその姿をとどめたにすぎない。

遺物は、前述の状況から数点の土器片と石鏃3、ピエス・エスキュー1と極めて微少である。第11図の拓影1・2・4は、第IV群3類のb種に、3はa種に属するものであり、5は唯一の浅鉢片である。破片のみで時期決定の所見に欠けるが、床面出土の以上の土器片から曽利III式期に属する住居址と判断した。(島田 恵子)

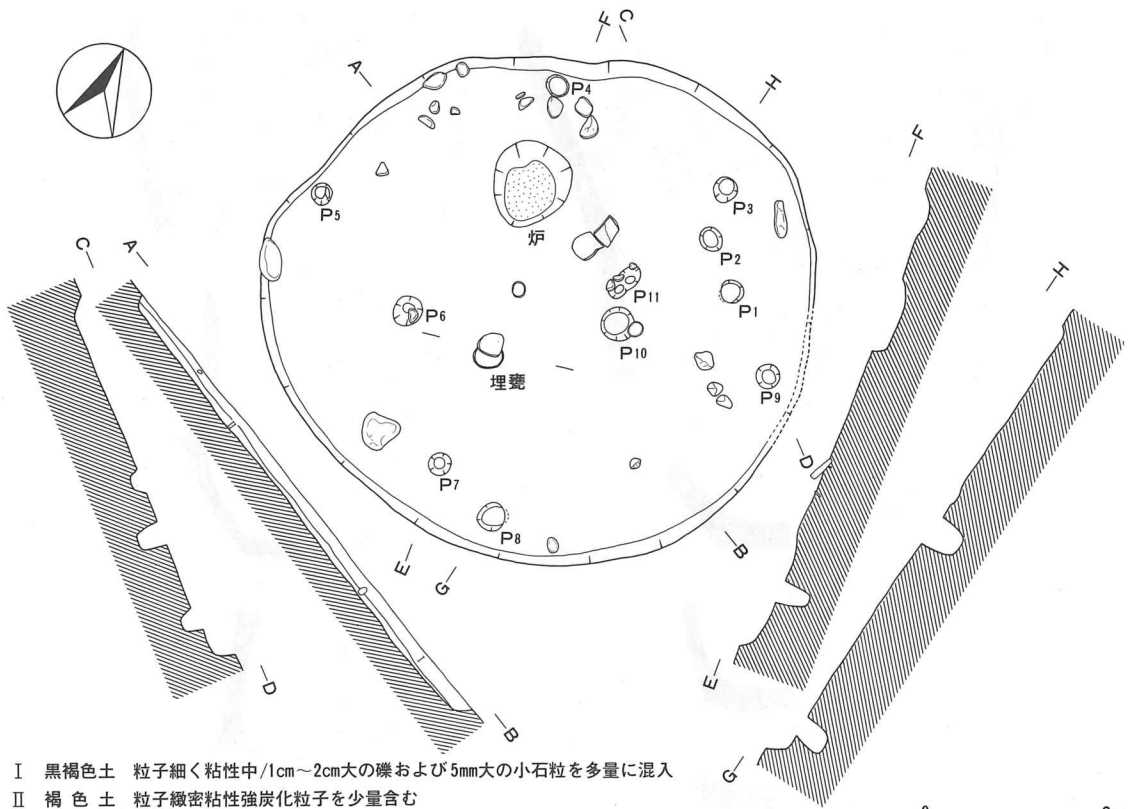
3) J 3号住居址(第13~18図)

J 3号住居址は、J 7号、J 12号住居址と隣接した、い・うー3・4グリッドより検出された。おびただしい数の礫におおわれており検出には非常に苦しめられた。

平面プランは、東西5.9m、南北5.4mを測り、東西に長い不整円形を呈する。壁高は、12~22cmを測り、緩傾斜のため傾斜に沿って東壁のみ12cmを測る。壁の掘り下げ時に観察されたが、きめの細かい砂が部分的にみられた。これは押し出し等による水の流れた痕跡であろう。

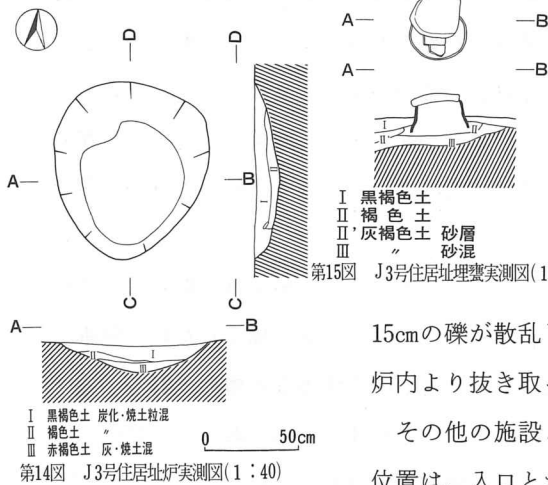
覆土は2層から成り、特に北側には2cm大の小礫が多量に混入していた。床面は、南側と北側に分断したかのように北側にのみ床面内にくい込むように、10~30cm大の礫がぎっしりと散乱しており床面の破壊は著しい。反面南側は粘質土の固まったなめらかな床が存在していた。当時の生活面はこのように良好な状態であったとおもわれる。

ピットは、11個で、この内支柱穴はP₃、P₄、P₅、P₈、P₉であると考えられる。P₆、P₁₀



- I 黒褐色土 粒子細く粘性中/1cm~2cm大の礫および5mm大の小石粒を多量に混入
- II 褐色土 粒子緻密粘性強炭化粒子を少量含む

第13図 J3号住居址実測図(1:80)

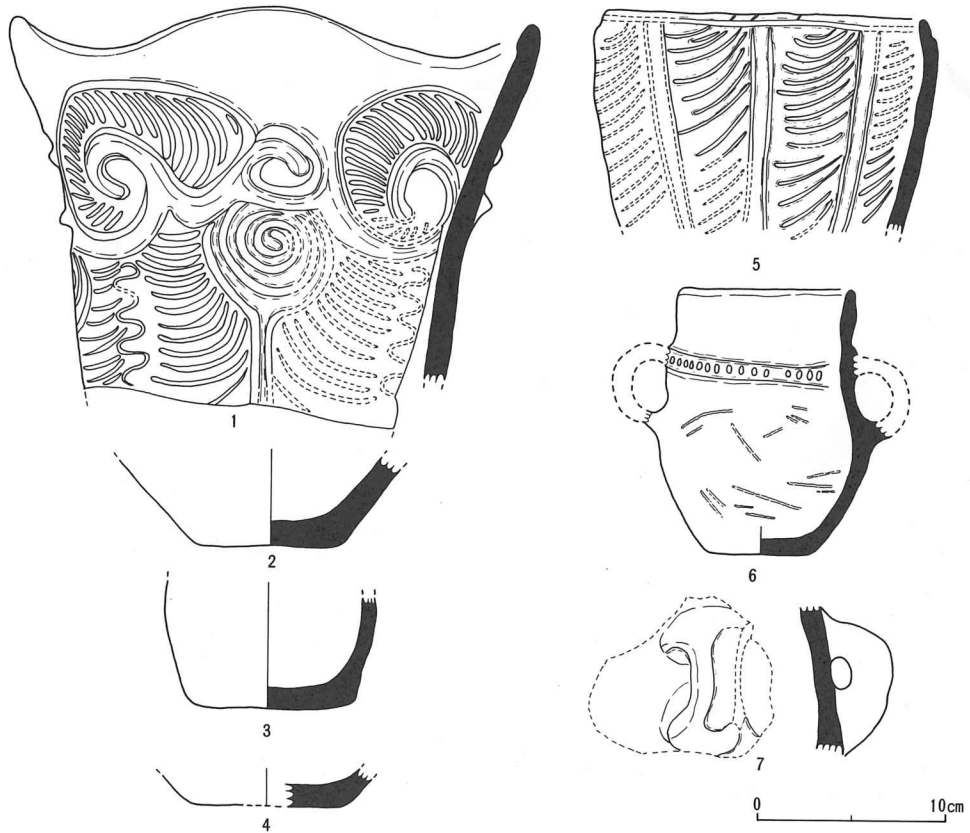


第15図 J3号住居址埋葬実測図(1:40)

は、埋葬をはさんでおり、P₆は30×30—37cm、P₁₀は35×35—31cmを測り、支柱穴より一周り大きく間仕切りの要素もうかがえるが、床面の状態から一度の建て直しが想定される。

炉は、中央よりやや北側に位置し、80×95—15cmを測る方形竪穴炉である。焼土は炉底面にうすく堆積していた。炉上部には35×15cm、28×15cmの礫が散乱していた。扁平だが厚味のある輝石安山岩である。炉内より抜き取って上面に捨てたものか判然としない。

その他の施設として、石蓋を伴った埋葬が存在していた。埋設位置は、入口とおもわれる南壁より2m離れたやや中央に近い床面を15cm程掘りこんで正位の状態では埋められていた。土器は胴下部から底部を欠いており、石蓋は床面より10cm程浮いた状態であった。

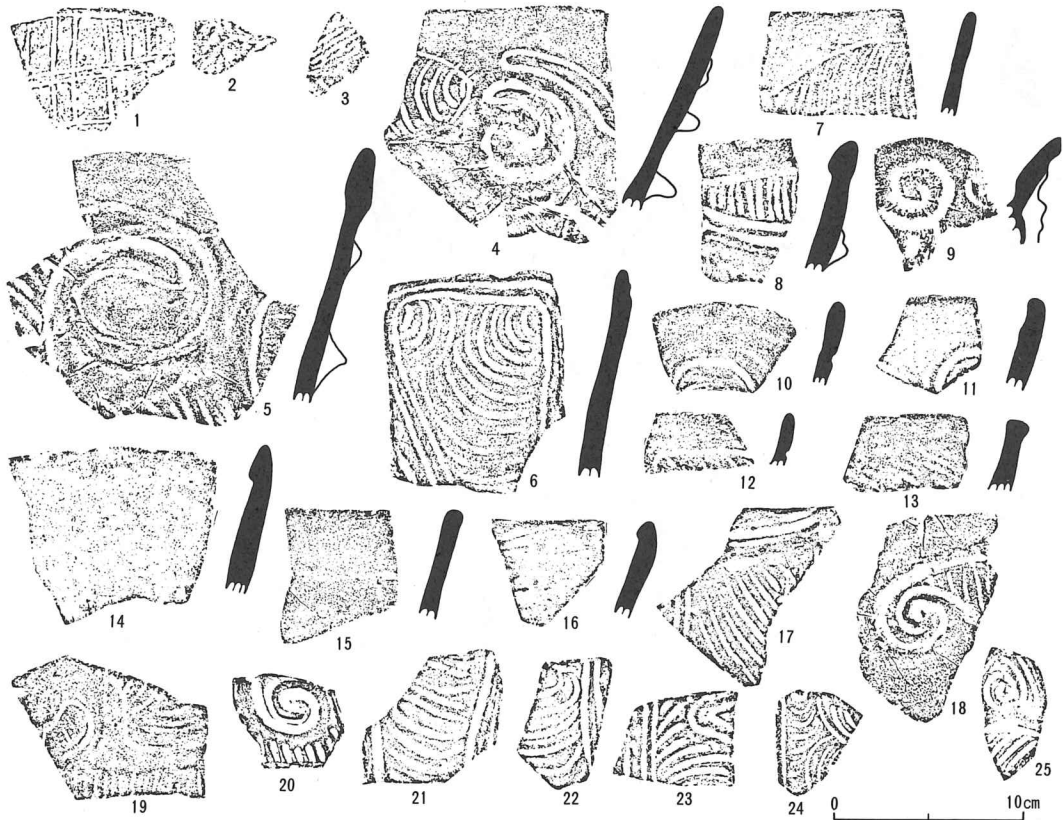


第16図 J3号住居址出土土器実測図(1:4)

遺物は、第16図1の埋甕、6の両耳広口壺、深鉢底部片、把手等の出土があった。本址の遺物は、住居址の内側床面上より最も多く出土した。埋甕は、石蓋とセットになった状態で出土し、小型樽形土器は炉際からの出土である。本遺跡の土器は、周辺から産出する強粘土を胎土としていたため、焼成は比較的固く氾濫原であるという悪条件にもかかわらず、摩滅にとどまり遺存していたのであるが、5の小型樽形土器は他の土器と比べて焼成は一段と固く、極めて良好な遺存状態であった。

本址の土器は、第IV群3類のbに属し、1・5は唐草文系土器の特徴を最も強く取り入れている。隆線と沈線の渦巻文、地文として篋描き斜線文、縦線文、さらに胴部に描かれた蛇行懸垂文の蛇行の強さは曾利系というより唐草文系の影響が強い。口縁が内湾する5の樽形土器も小型ではあるが、唐草文系の器形そのものである。第16図の拓影に示した4~25の土器片も同類に区分される。6の両耳広口壺は、耳の部分に欠失、地文に磨消縄文が施されているが摩滅が著しい。該期に判出される土器である。

拓影1は、半割竹管による平行沈線が施され、縦線は2本組みとなる繊維含有の前期の土器片



第17図 J 3号住居址出土土器拓影（1：4）

であるが類例がない新タイプの土器片である。2・3はやはり繊維含有の前期の土器片で第I群の3類関山式期のループ文に分類される。

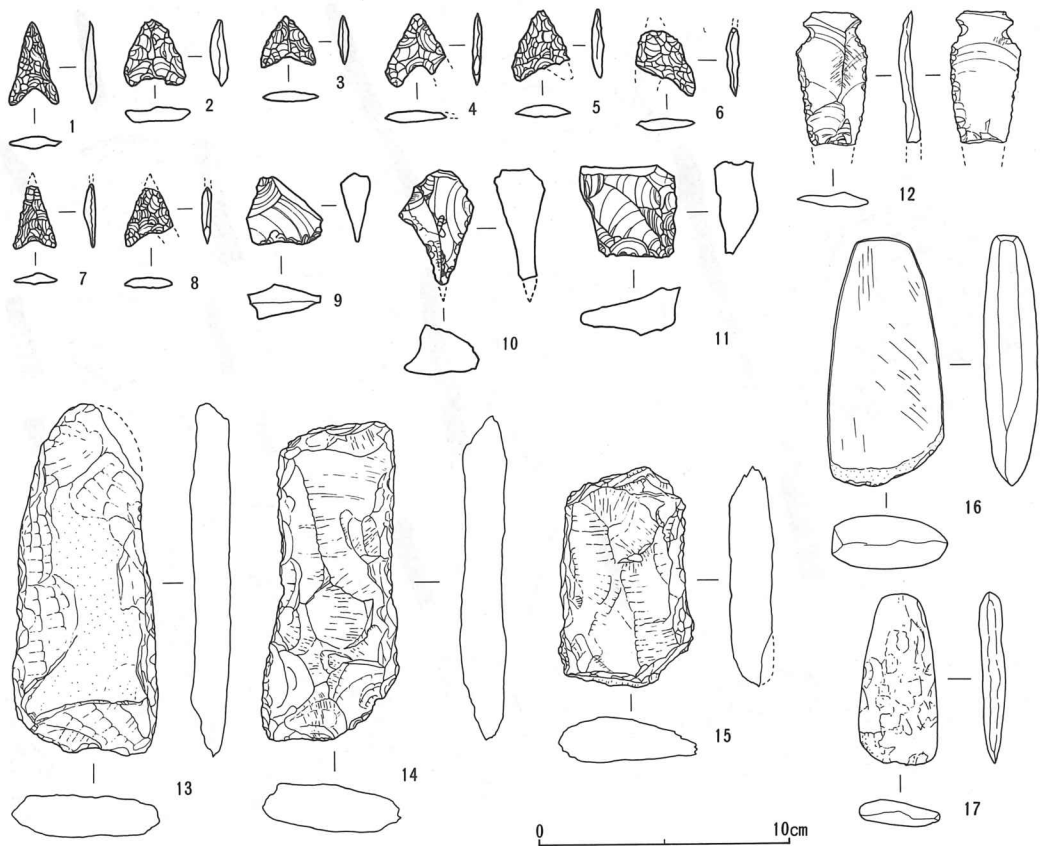
石器は、石鏃8、ピエス・エスキーユ1、石錐の加工過程に入るもの1、縦形石匙1、打製石斧3、磨製石斧2点の出土があった。16の磨石斧は壁際からの出土であった。これは壁際の住居の柵にかけておいたからであると考えられる。

本址の時期は、出土した土器から唐草文系の影響を受けた曾利Ⅲ式期に比定されると考えられる。
 (森泉定勝、島田恵子)

4) J 4号住居址 (第19図～23図)

本住居址は、こ・さ・しー2・3・4グリッド内にて検出された。J 5号住居址の西側の一部を切って構築されている。

平面プランは、東西5.65m、南北5.4mを測りほぼ円形を呈する。壁高は10cmを測り軟弱な立ち上がりを示していた。覆土は2層によって形成され、I層は小石粒の混入が少量みられたが、全



第18図 J3号住居址出土石器実測図 (1~11は1:2・12~17は1:3)

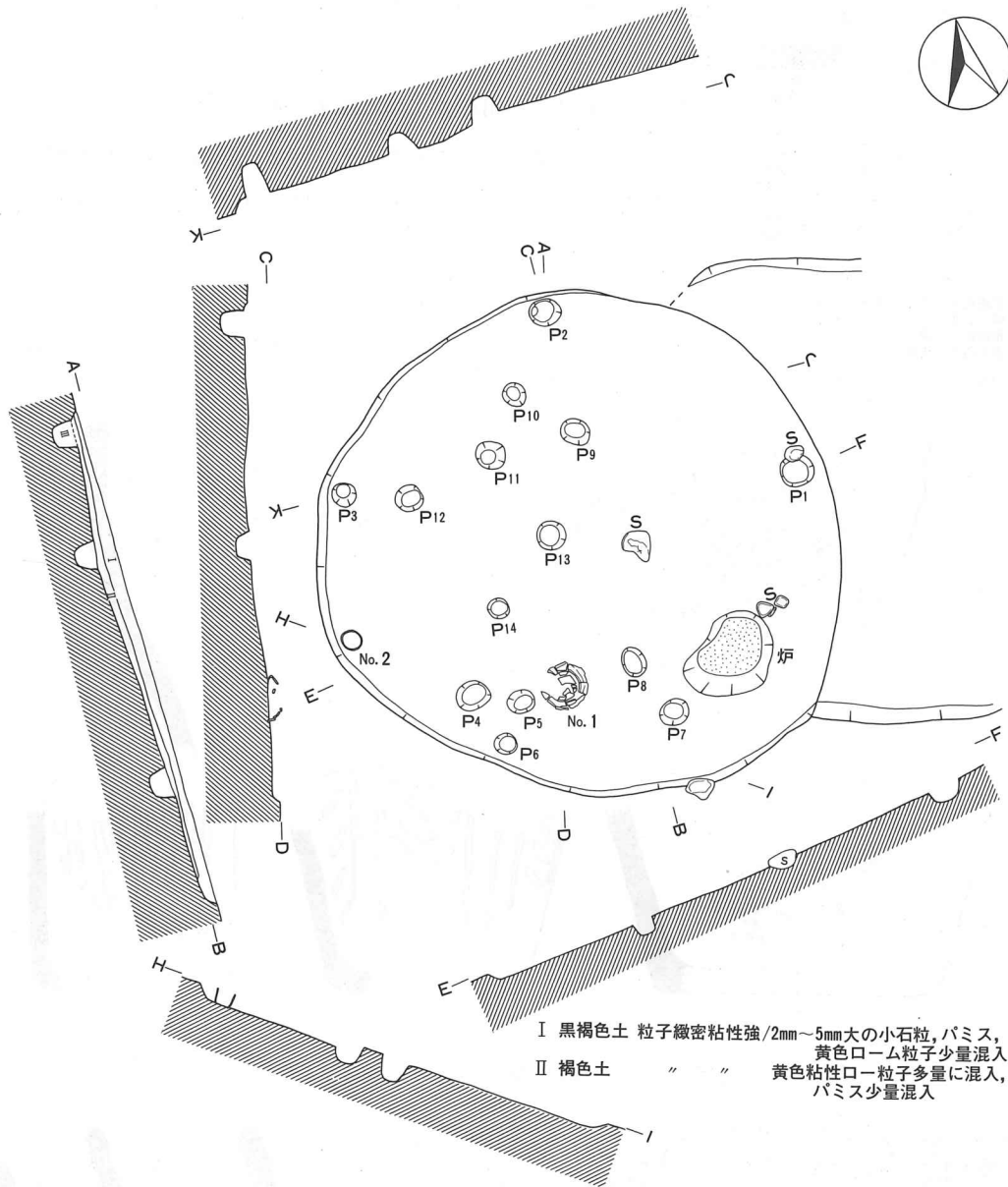
体に覆土は浅く、遺構外に礫の散布が目立ったが、床面上には他の住居址に比べ大きな礫は少なかった。全体に床面は軟弱で凸凹気味であった。

ピットは14個あり、そのうちP₁ P₂ P₃ P₄ P₇ P₁₃が支柱穴で、補助柱穴は、P₆ P₈ P₁₂と推定されるが、J5号住居址と重複した部分に柱穴の空白があるため、建て直しの関係が判然としない。少なくとも1度は建て直しを行なっているものと考えられる。ピットの平均的な規模は、30×30cmで深さは20cmを測る。

炉は、不整な方形竪穴炉で、95×90cm、深さ20cmを測り、東南コーナーに近い位置に配されていた。この部分は、J5号住居址と重複していたが、焼土がレベル的に高い位置に散布しており、住居址の新旧関係を見分けるためには好都合であった。炉内には、焼土および炭化材がブロック状に溜っていた。多用されていた感を呈する。

本址の遺物は少なく、胴部や口縁を欠失する4個体の図示にとどまった。

第20図1・2、4は地文に縄文を用いている。1は、口径45cmを測る大型深鉢で伏せた状態で床上から出土した。底部を欠くことから何等かの意味、用途がこめられているものと考えられる。

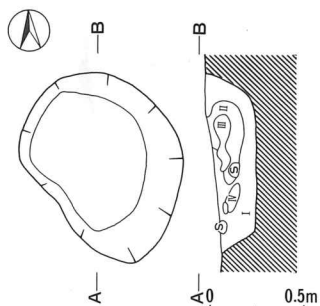


第19図 J4号住居址実測図 (1:80)

この土器は、器形、文様共に加曾利E系の影響が強い深鉢である。

3は、棒状懸垂文、篋描き綾杉文を用いた唐草文系の影響の濃い深鉢であり、本址の土器は曾利系と唐草文系、さらに加曾利E系との関わりを提示しているといえよう。4は撚糸文を地文とした筒形の深鉢である。

第21図の拓影9~15も同様である。1・2は、第I群3類に属する多段のループ文関山式期の



- I 黒褐色土 炭化、焼土粒少量混
- II 褐色土 炭化、焼土粒多量混
- III 赤褐色土 焼土
- IV 漆黒色土 炭化粒子

第20図 J4号住居址炉実測図(1:40)

土器片である。3は、円く刺突された類例のみられない繊維含有の土器片である。

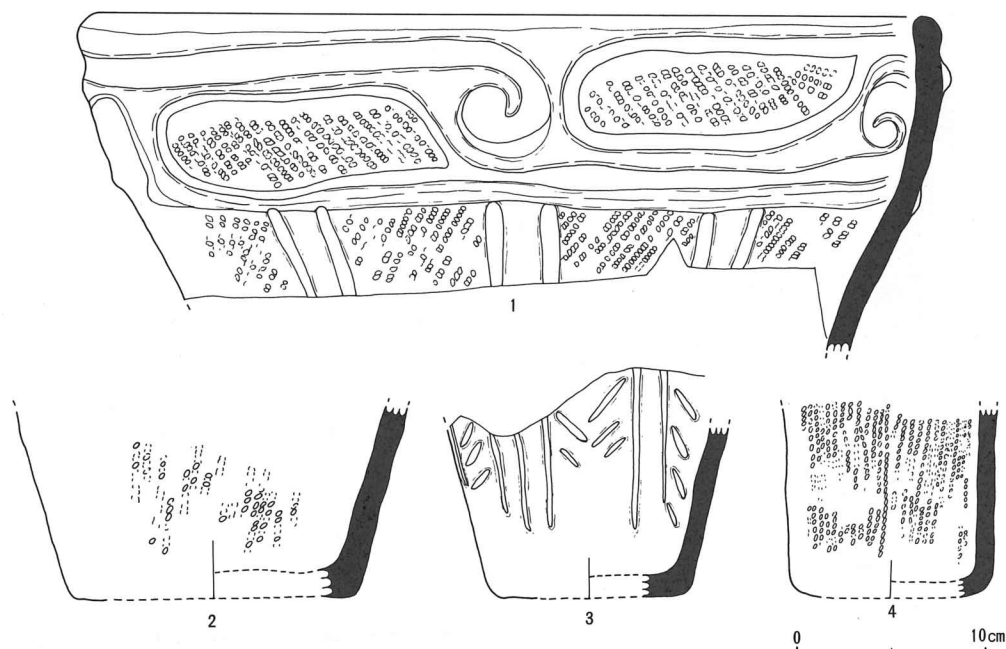
4・5・16は、第Ⅲ群の1類に属するものであろう。

石器は、石鏃3、ピエス・エスキーユ2、打石斧2、横刃型石器2、磨製石斧1、磨石1が出土した。磨石は図示できなかったが、その他に2点の出土があった。

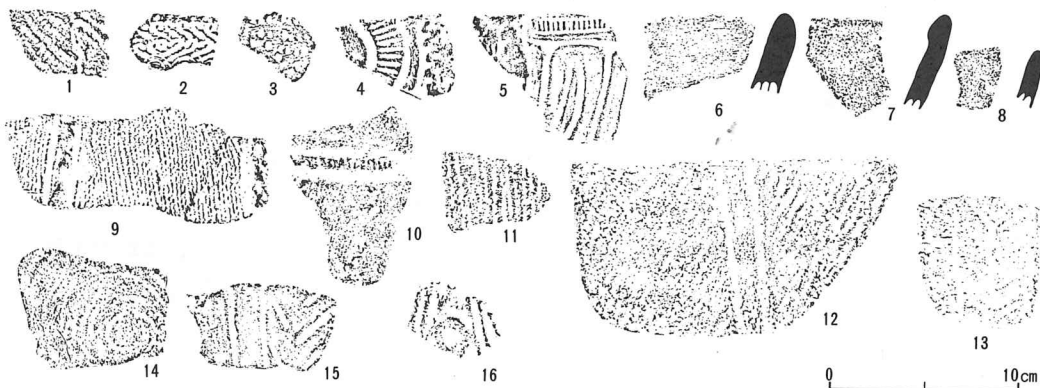
磨製石斧は、敲打痕の痕跡が顕著である。

本住居址の時期は、図示した土器から曾利Ⅳ式期であると判断される。

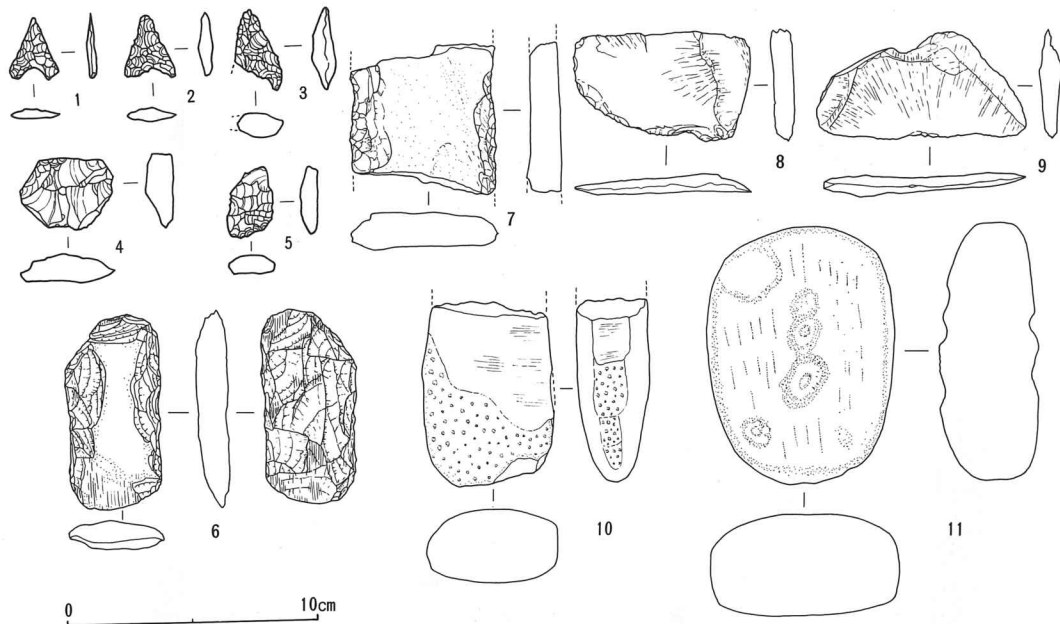
(島田 恵子)



第21図 J4号住居址出土土器実測図(1:4)



第22図 J4号住居址出土土器拓影(1:4)



第23図 J4号住居址出土石器実測図(1~5は1:2, 6~11は1:3)

5) J5号住居址(第24~28図)

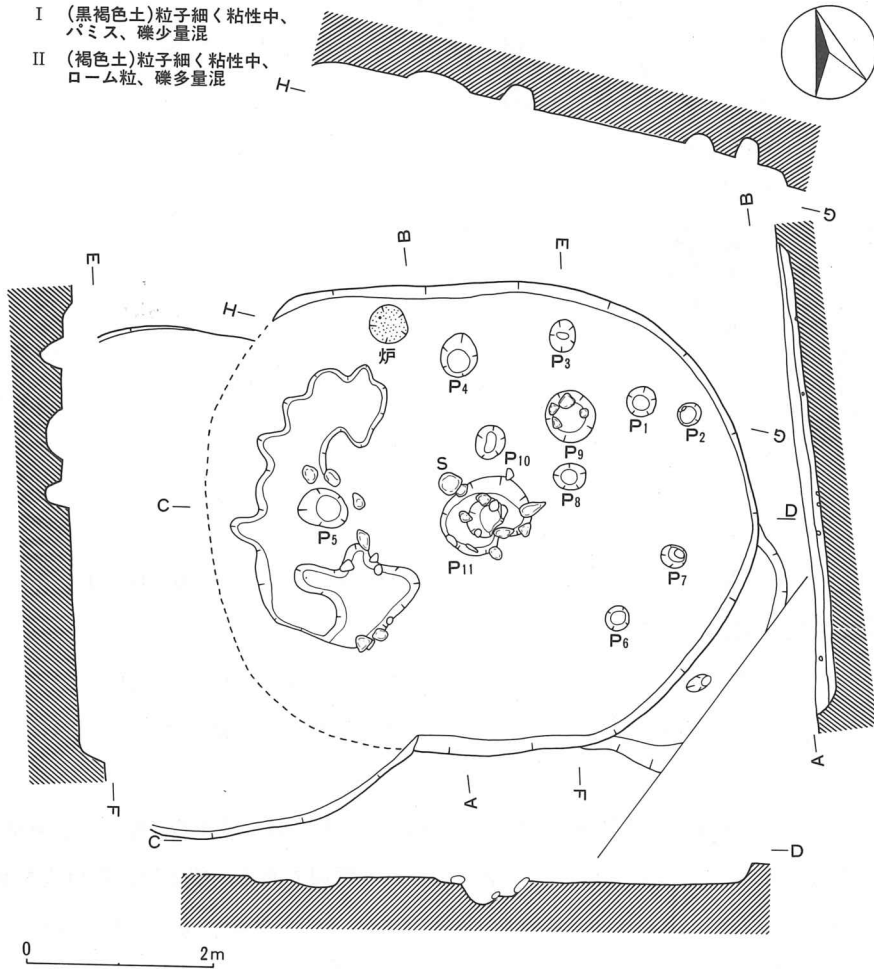
本址は、調査区の東端、3・4—こ・さ・しグリッド内より検出された。東南壁コーナーに存在するD5号土壌を切って構築し、さらに、西壁から2m30cm入った範囲はJ4号住居址に切られている。

平面プランは、東西570cm、南北500cmを測り、東西に長い楕円形を呈する。壁高は、東壁15cm、南壁25cm、北壁9cmを測り、傾斜に沿って北壁が削られて軟弱である。覆土は、褐色土を基調とし、2mm~5mm大の小石粒子、パミス、黄色ローム粒子を混入した2層によって形成されている。床面は小礫が浮き出たやや凸凹気味で、重複部分の西側は10cm沈んだ窪みが生じている。

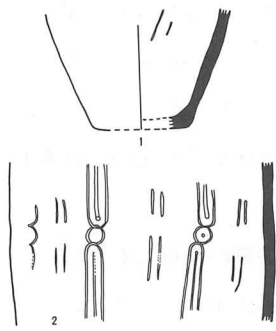
ピットは、P₁~P₁₀が検出された。主柱穴は、P₁、P₃~P₇の6本と考えるが、南壁際から西壁コーナーにかけて空白部分がある。P₈~P₁₀までのピットは、立替あるいはD5号土壌にかかわるものか判然としない。また、住居址中央に95×85cm、深さ17cmのピットが存在しており、その覆土中には焼土、炭化物等の混入が皆無であったことから、旧炉であるとも考えられる。また、北西コーナー寄りには、40cm×40cmの範囲に焼土が厚く堆積している地床炉的なものが存在していた。しかし、その範囲は非常に狭い。

遺物は、D5号土壌と重複していたIV区の覆土~床面下にかけて、前期の繊維含有土器片が大量に出土したが、I区~III区までは篋描沈線を主体とした一連のものが出土している。また、第2群1類の土器片も出土している。第25図1は、底部片であるが僅かに篋描沈線が認められる。

- I (黒褐色土)粒子細く粘性中、
パミス、礫少量混
- II (褐色土)粒子細く粘性中、
ローム粒、礫多量混



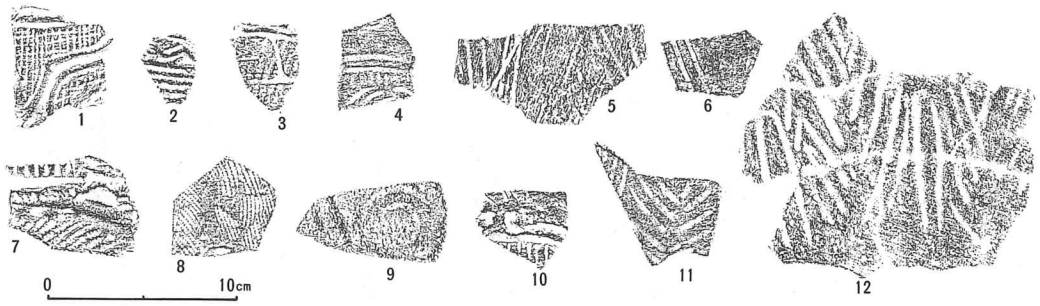
第24図 J5号住居址実測図 (1:80)



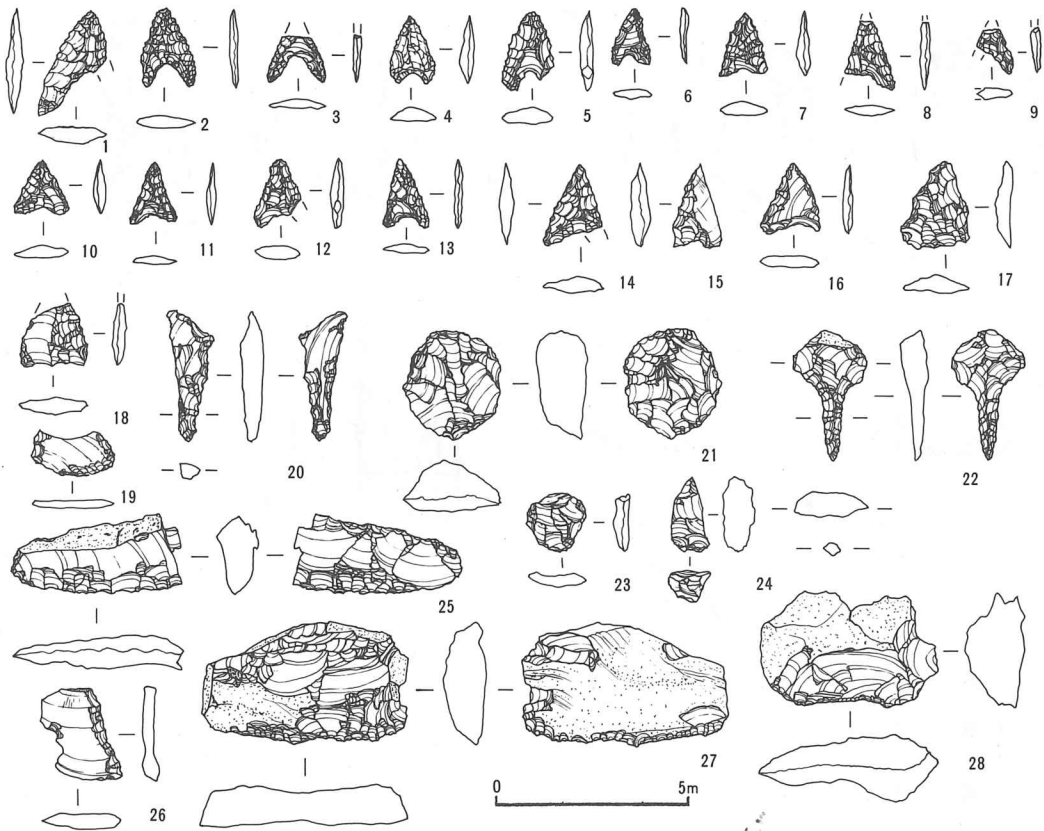
第25図 J5号住居址出土
土器実測図(1:4)

2の胴部片はあまり例のみられない土器である。器肉が薄く7mmを測る。石英、長石粒が浮き出ている器膚を荒くしている。赤褐色を呈し焼成は固い。篋描沈線を主体とした文様構成で、1.5cmの円形文を中心にその上下を細いU字および逆U字文を施し、U字の中には懸垂文がその両側面には長く尾を引く雨垂れ状の垂文が配されている。覆土中からの出土であり一考を要する土器である。

石器は、石鏃、石錘、横刃型石器、磨石、打製石斧等多数出土した。石鏃は無茎鏃のみで凹基無茎鏃が主である。平基無茎鏃(17、



第26図 J5号住居址出土土器拓影 (1:4)



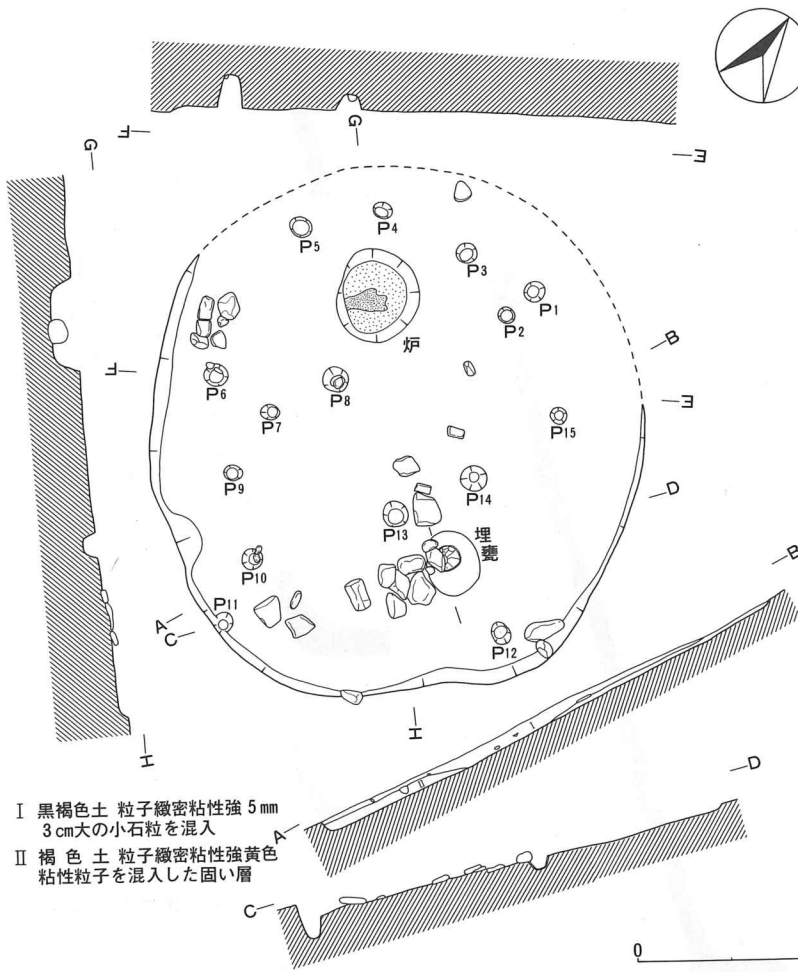
第27図 J5号住居址出土石器実測図No.1 (1:2)

18) も 2 点みられる。D 5 号土壌に関連した石器類もこの中に含まれている可能性も強い。

本住居址は、切り合いが重なりあまり良い遺存状態ではなかった。時期については、明確な位置付けをする所見に欠けるが、J. 4 号住居址との重複関係、その他拓影に図示した土器片等から曾利Ⅲ式期の住居址であると判断される。(井上行雄・島田恵子)



第28图 J5号住居址出土石器实测图No.2 (1:3)



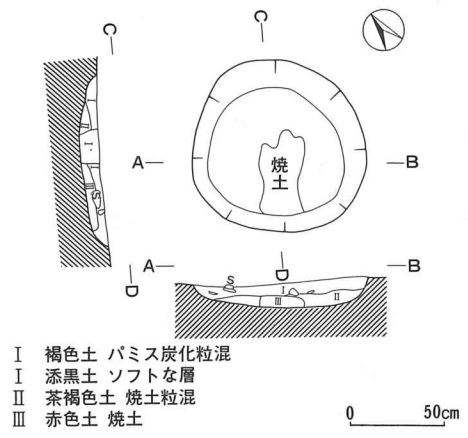
第29図 J6号住居址実測図(1:80)

6) J6号住居址
(第29~34図)

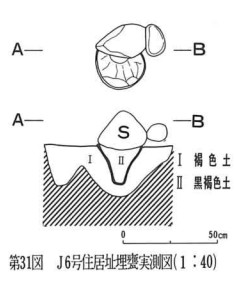
J6号住居址は、
J14号住居址と隣接
した、く・けー3・
4グリッド内より検
出された。

平面プランは、北
西壁が耕作で破壊さ
れ残存してはいな
かったが明確に判明
したプランの輪郭か
ら推して、東西5.25
m南北5.55mを測り
正円形を呈する。

壁高は4~10cmを
測る軟弱なもので、
遺存度は極めて悪
かった。こうした点
から覆土も浅く、比
較的良好な西側を選
んで断面図をとった。



第30図 J6号住居址炉実測図(1:40)



第31図 J6号住居址埋甕実測図(1:40)

褐色土を基調とした粘性の強
い2層によって形成されてい
る。

床面は、小礫が点在した凸
凹の床で、埋甕の周辺および
西壁際に敷石状に安山岩が配
されていた。本遺跡で検出さ

れた敷石住居は、平尾山産の通称鉄平石(輝石安山
岩)が用いられているが、J6号住居址に限り比較
的平な川原石を選別して並べてある。厚さは10cm程



第32図 J6号住居址出土土器実測図(1:4)

であるが、平であることと、意図的な配列が感じられることから、敷石の可能性が充分考えられる。

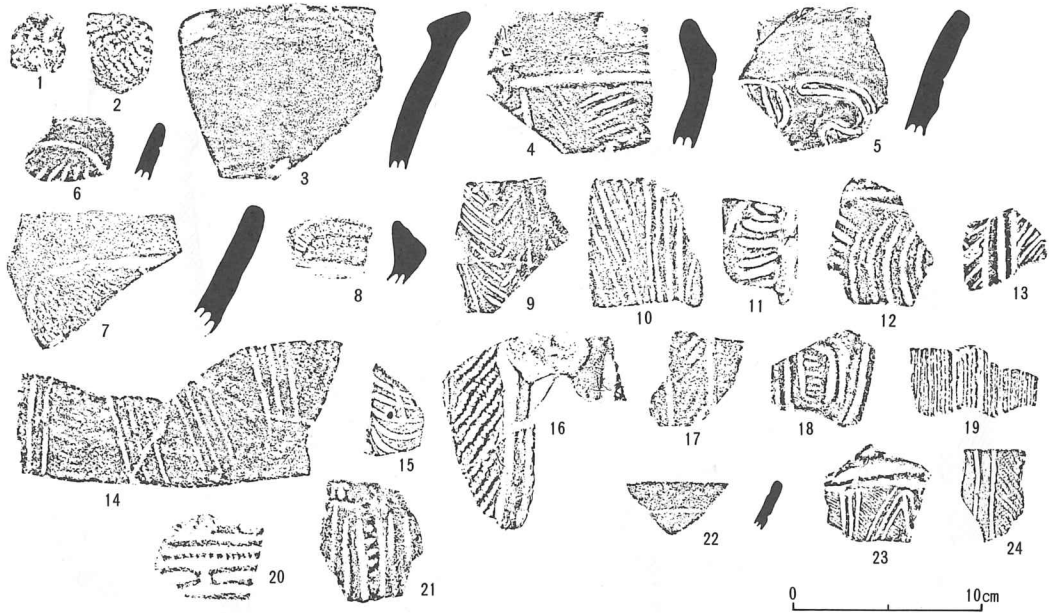
ピットは、13個検出された。いずれも20~30cmを測る小規模な柱穴ではあるが、比較的しっかりと掘り込まれている。本遺跡の住居址構造の特徴から、壁際に立地するP₁~P₆、P₉~P₁₂、P₁₅が支柱穴および補助穴となろう。P₇、P₈、P₁₃、P₁₄の存在から、一回の建て直しが考えられる。

炉は、中央の北寄りに位置し、88×100

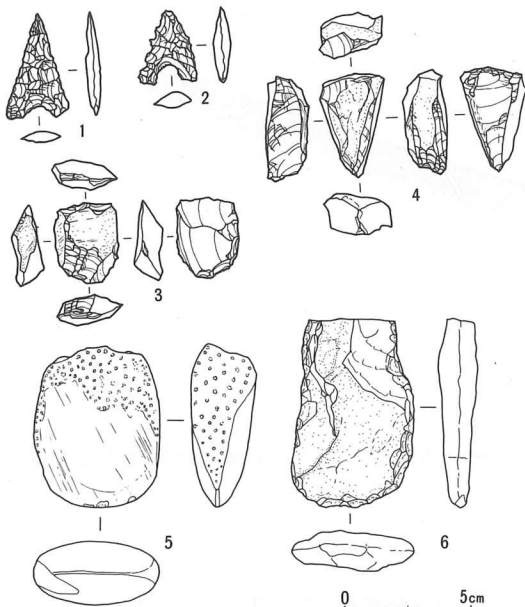
cmを測る円形の堅穴炉である。焼土がブロック状に10cmの厚さで堆積していて、多用された様相を呈している。

また、出入口部から120cm入った位置に埋甕が正位の状態で埋設されていた。甕の口縁部半分を三角形の安山岩が覆っていて、埋甕に蓋をしたかのような状態である。しかし、石の形状と床面にとび出していることから、意図的なものであるか判然としない。そして、周囲には扁平な安山岩がピタリと密着した状態で敷石状に配されている。

遺物は少なく、埋甕以外は小破片である。第32図1は、唐草文系土器深鉢の口縁部である。2は埋甕で、逆U字文、わらび手文、地文に磨消縄文が施され加曾利Eの影響の強い、第IV群4類の時期に比定されるものである。同じくこの類には拓影3~7、9~19が入る。拓影1は、第I群1類に、2は3類に属する。20・21は第III群の2類に大別される。さらに、22~24は第V群に



第33図 J6号住居址出土土器拓影(1:4)



第34図 J6号住居址出土石器実測図(1~4は1:2, 5~6は1:3)

比定されよう。

石器は、石鏃2、ピース・エスキュー2、敲打痕も認められる磨製石斧1、打製石斧1が出土した。

本址は、北壁がすでに削りとられ床面に達していたことから、さまざまな時期の土器が混在している。しかし、本址の属する時期は、埋甕から曾利IV式期と判断した。(島田 恵子)

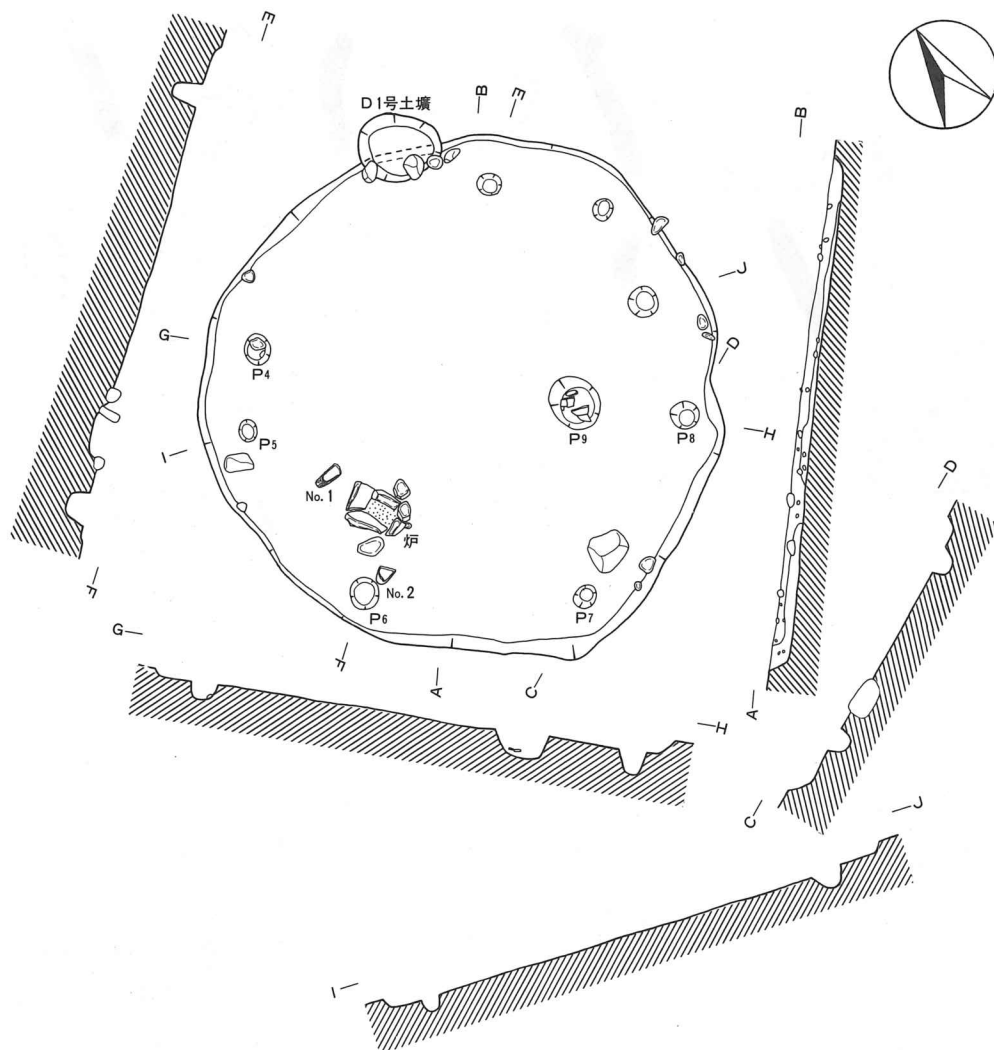
7) J7号住居址(第35~39図)

本住居址は、あ・いー4・5グリッドに検出された。

平面プランは、東西6m、南北5.7mを計測するやや不整形な円形を呈する。東側はJ10号住居址に近接し、西南側の一部は、J3号住居址

に壁の一部を切られ、又北側にはD1号土壌が壁の一部を切って存在した。

覆土は、遺跡全体が強粘土地帯であり、又遺跡の東側を流れる中沢川のかっての氾濫原でもあ



I 黒色土 粒子緻密粘性強バミス, 5mm大の小石粒子少量混入
 II 黒褐色土 粒子緻密粘性強バミス, 黄色ローム粒子混入

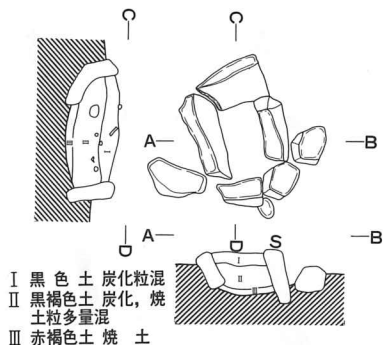
0 2m

第35図 J7号住居址実測図(1:80)

り、したがって覆土内には礫が多量に流入していた。礫は東南側に多く、北側には黒褐色土の堆積が認められた。

壁高は、確認面より9~16cmを計測した。

柱穴は、計9個検出され、P₁~P₃は径32×31cm、深さ16cmを測り、共に北側の壁近くにやや不
 等間隔に検出され、P₄、P₅は、径30×21cm、深さ15cm~20cmを測り西南側の壁近くに検出され
 た。P₆は、径30×36cm、深さ24cmを測り、炉の西南側に検出された。P₇は、径24×27cm、深さ17
 cmを測り東南側に、P₈は、径30×33cm、深さ16cmを測り、共に壁近くに検出された。P₉は、P₈



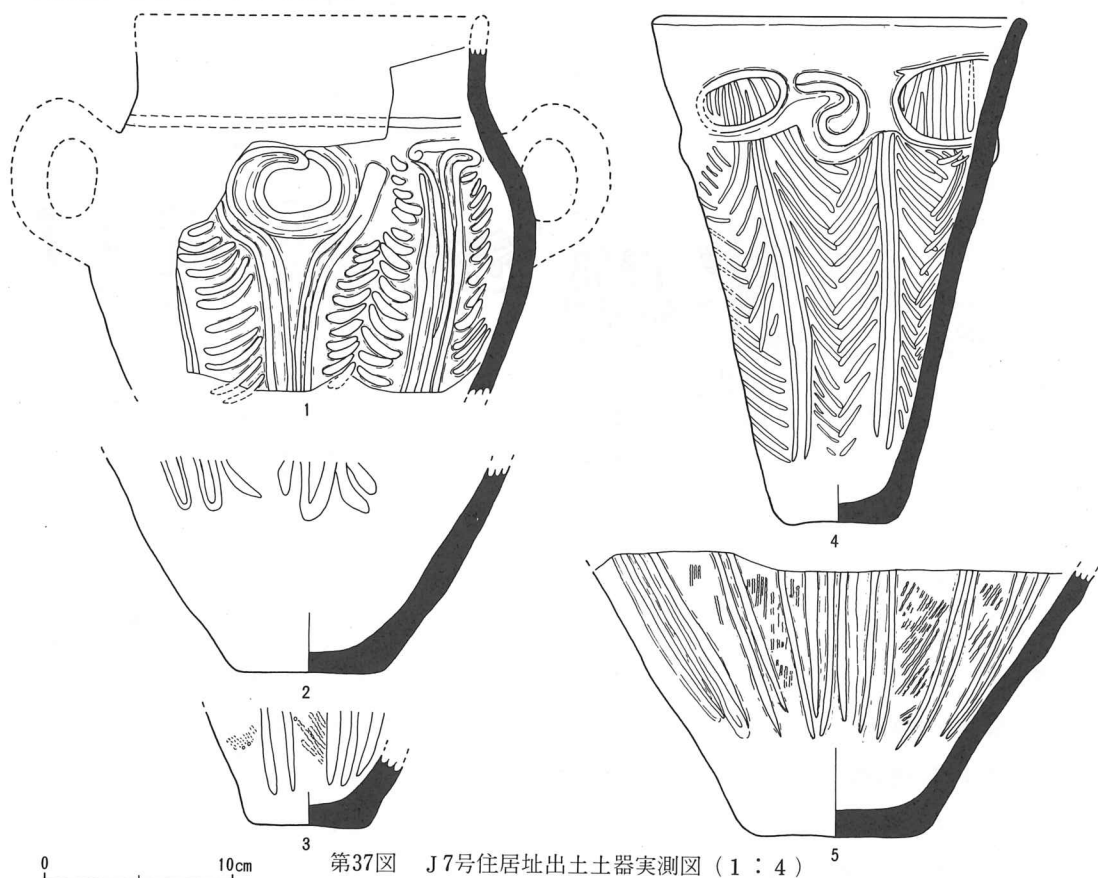
第36図 J7号住居址炉実測図(1:40)

の内側約75cmに検出され、63×51cm、深さ16cmを計測した。

炉は、住居址西南側の壁より約90cm内側に検出された当初は覆土中に石組が検出され、掘下げると床面上に石囲いがとび出した状態の炉となった。炉は、石組の上面で30×24cmを計測する長方形を呈し、板状の自然石(輝石安山岩)を使用している。炉内の覆土は3層に分かれ、第I層は黒色を呈し、粘性強く、パミス、炭化粒子が多量に混入していた。II層は、炭化材、焼土粒子の混入が認められ、III層には焼土の堆積があった。炉の底部は、焼けてたたきのよ

うに固く、底面より打製石斧が出土した。

本址出土の遺物は、主に炉付近に集中して出土した。その他破片は覆土中より出土したものである。No.1は、北側の覆土上部から押しつぶされた状態で出土した両耳広口壺である。篋描き沈線による渦巻文、懸垂文が施され、本遺跡唯一のハの字文が描かれた曾利V式期の土器であり、本遺構に伴わないものである。

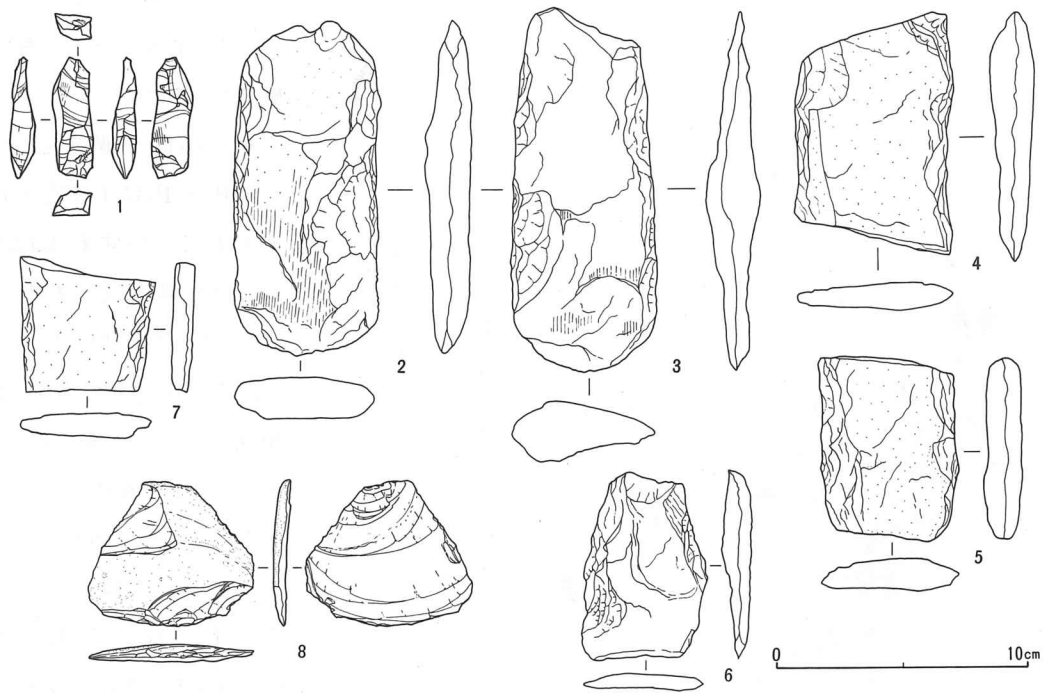


第37図 J7号住居址出土土器実測図(1:4)



第38図 J7号住居址出土土器拓影（1：4）

2、3は深鉢の胴下部～底部片である。該期に入ると底径が小さくなりだし、頸部のくびれが弱くなるが、これもやはり底径が小さい。棒状懸垂文とU字状懸垂文が施され、3は磨消縄文が付されている。4は、炉の西側より出土した深鉢である。小さい底径で口縁にかけて開く器形である。頸部を大柄渦巻文と方形区画文で飾り、胴部は棒状懸垂文と綾杉文が配されている。本遺跡出土の土器の色調はそのほとんどが茶褐色～褐色を呈しているが、4は、赤褐色を呈し、焼成は固い。5は、大型のキャリパー型深鉢胴下部～底部片である。逆U字文とわらび手文と細い磨消縄文が付されている。多条の縄文によるものであろう。同じものが拓影10、17～19、26、32に



第39図 J 7号住居址出土石器実測図（1は1：2、2～8は1：3）

も使われている。26は、綾杉状に多条の縄文を転がしている。17は唯一の浅鉢である。その他、1～40まで篋描き綾杉文、棒状懸垂文、方形区画文、渦巻隆線および沈線文の唐草文系土器片で、第IV群4類に属する。41は第V群の土器片である。また、第34図の3、5は加曾利Eの影響が強い土器で、2、4の唐草文系土器と混在する注目すべき点が見出されている。

石器は、ピエス・エスキュー1、打製石斧6、横刃型石器1の出土があった。横刃型石器は鋭利な刃をもつ優品である。本住居址の石器、土器等の遺物は主に炉周辺から出土した。

本住居址は、曾利IV式期に比定されよう。

（三石 延雄）

8) J 8号住居址（第40～43図）

本住居址は、調査区東端のJ 5号住居址、J 14号住居址の中間に位置する、け・こー4・5グリッド内にて検出された。

平面プランは、4 mの正円形を呈する小型の住居址である。壁高は、他の住居址に比べて比較的高く、東西壁20cm、北壁18cm、南壁22cmを測る。

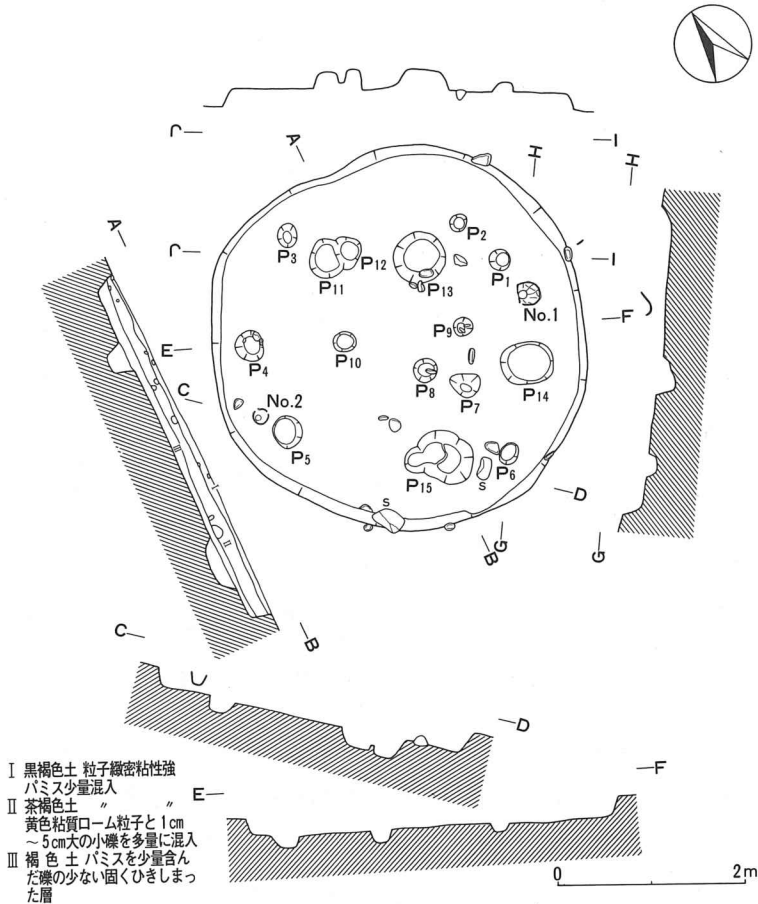
覆土は、3層から成り特にII層には1 cm～5 cm大の小礫が多量に混入していた。良好な遺存状態であったため、他の住居址のように大きな礫の流れ込みはみられなかったが、床面は、平坦で

はあるがII層中に混入していた小石粒が浮き出た荒い感じを呈していた。

ピットは、14個発見された。P₁～P₆は支柱穴とおもわれる。いずれも12cm～17cmを測る浅いものでP₁～P₃、P₆は20×20cm、P₄、P₅は30×30cmを測る規模となる。内側にはP₇～P₁₀、P₁₂が存在し、いずれも浅く軟弱であり、柱穴となりうるか判然としない。P₁₁、P₁₃、P₁₄は、55×50cm、深さ12～25cmを測り、規模から土壇であると考えられる。

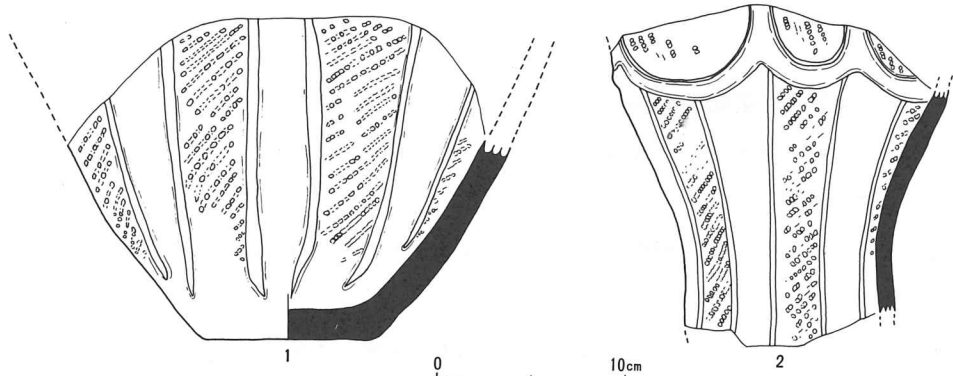
炉およびその他の施設は存在しなかった。

遺物は、図示した第38図の1、2の他は、拓影の破

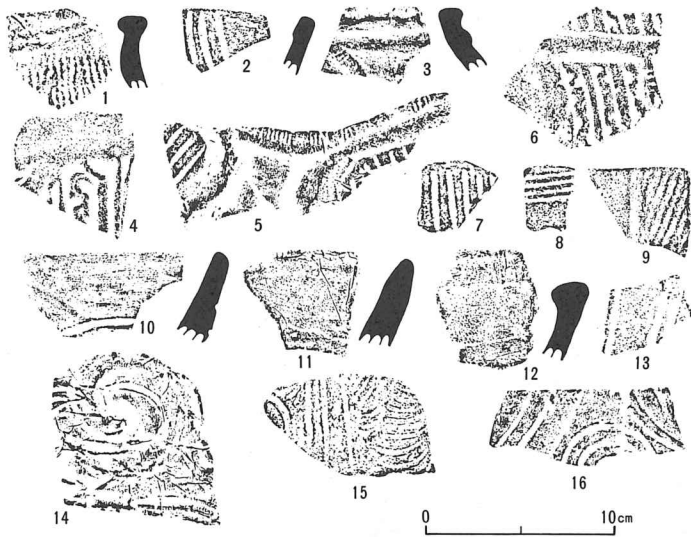


第40図 J 8号住居址実測図 (1:80)

片のみであった。1は、東壁より40cm内側から正位の状態出土した。床面より10cm程度浮上していた。底径が小さく、文様構成は逆U字文、磨消縄文が施されているやや大形の深鉢である。



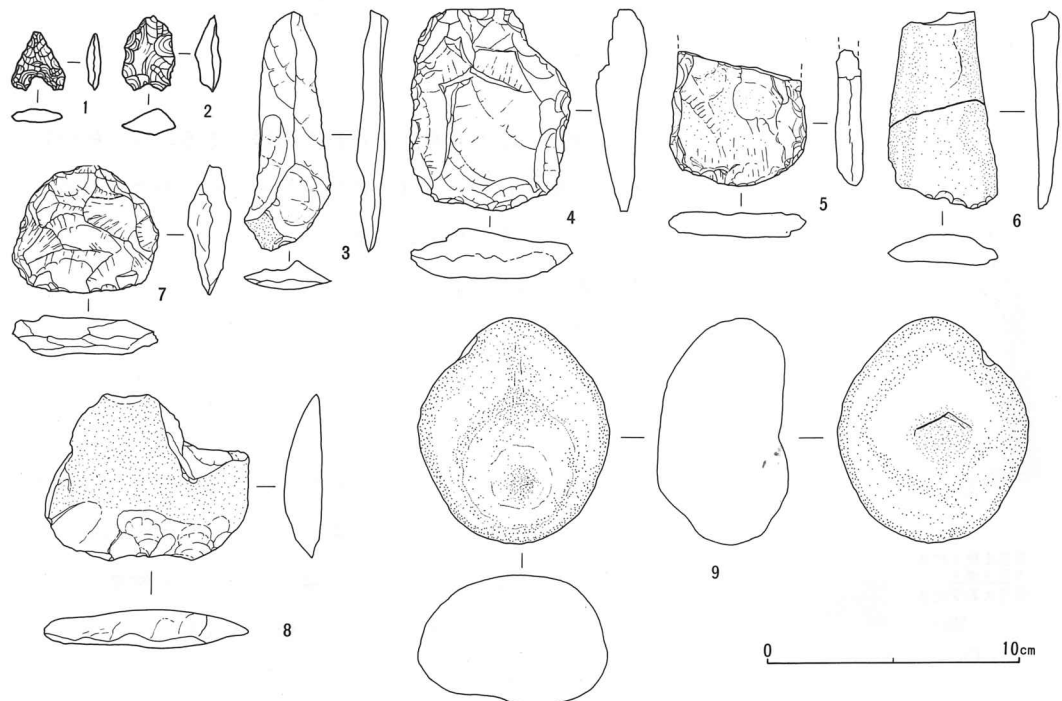
第41図 J 8号住居址出土土器実測図 (1:4)



第42図 J 8号住居址出土土器拓影(1:4)

線の渦巻文、篋描き綾杉、縦線文等による唐草文系の土器片で第IV群4類に属する。

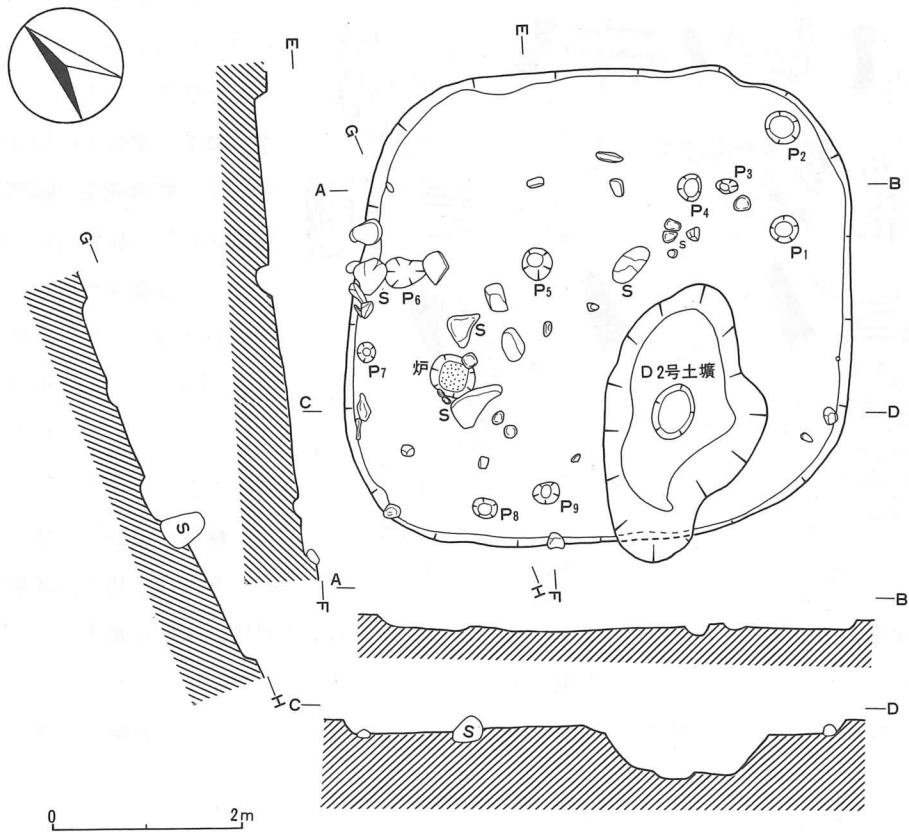
石器は、9点の出土があった。黒曜石製の石鏃1点、2は、石鏃に似た形を呈しているが、未だ未完成のものである。左側辺は剝離調整がなされているが、右側は厚く剝離が足りない。3は



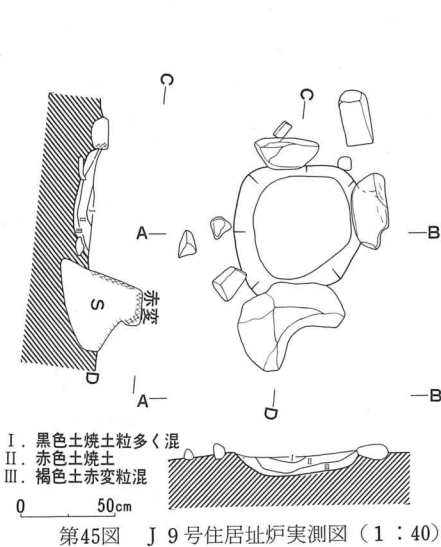
第43図 J 8号住居址出土石器実測図(1~2は1:2、3~9は1:3)

2は、西壁際より30cm内側に、やはり立ち上った状態で出土した。口縁と底部を欠失するキャリパー型深鉢で、連弧文の頸部横帯文、懸垂文、磨消縄文の胴部文様帯で構成された、加曾利Eの影響が最も強い文様構成である。

拓影に図示した土器群は、加曾利E系的な土器片は見当たらない。1~5は、第III群1類に属する土器片である。その他、10~12は無文口縁部片で器肉が厚く焼成は固い。9・13~16は、隆帯および沈



第44図 J 9号住居址実測図 (1 : 80)



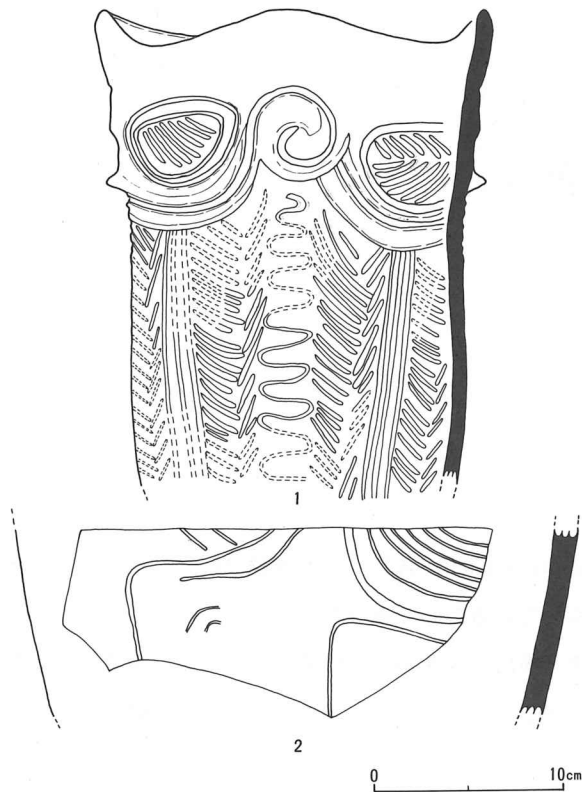
- I. 黒色土焼土粒多く混
- II. 赤色土焼土
- III. 褐色土赤変粒混

第45図 J 9号住居址炉実測図 (1 : 40)

側縁に使用痕が認められる刃器である。4は柄の短い打製石斧で、5は、基端を欠失した打製石斧である。6は、下端に微量の剝離調整がなされたフレイク状の石器である。7は、円形に近い形状を呈した石器で、下端に鋭利な刃部をつくり出している。8は簡単な調整がなされた横刃型石器である。9は、わずかな凹みが認められる小さな凹石である。

本遺構から出土した石器は、自然面を利用した簡単な加工のものが多くみられる。そして、炉の施設がないことも一般的な生活の場でないことを物語っているといえよう。本住居址は、曾利IV式期に比定されると考えられる。

(島田 恵子)



第46図 J9号住居址出土土器実測図(1:4)

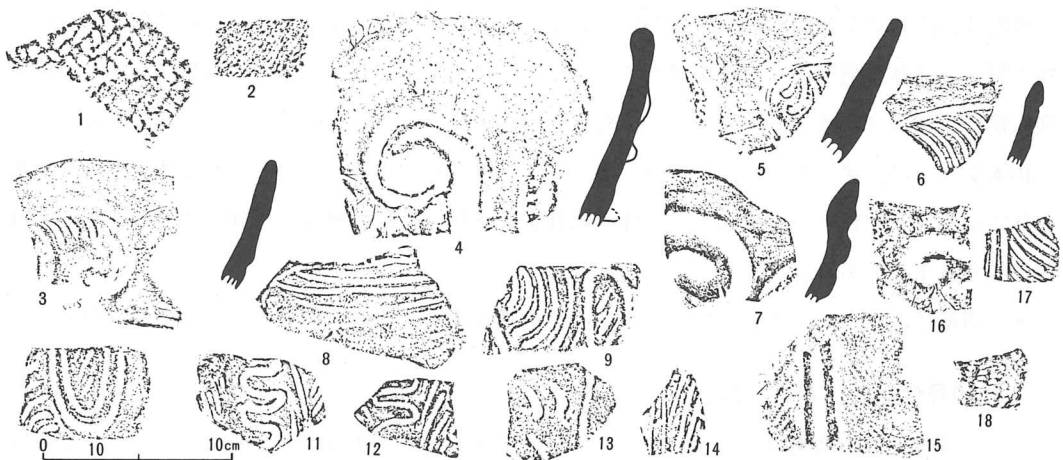
前述した如く、礫が集中的に散乱しており、それらを取り除いた時点において、住居の半分以上はすでに床面に達しており、覆土は惨たんたる状態でセクションも不可能であった。したがっ

9) J9号住居址(第44~48図)

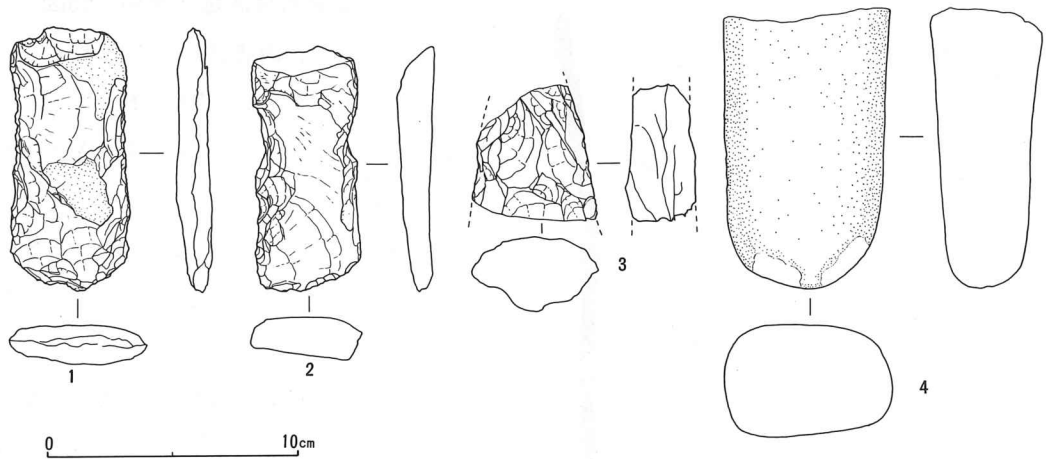
本址は、調査区中央の西端き・く-0・1グリッド内にて検出された。J15号、J16号住居址、D2号土壌と複雑に切り合っている。この地点は、押し出しによりおびただしい数の30~50cm大の礫が集中的に散乱しており、作業進行に障害となった。そのためプラン確認時には、約300個の礫を取り除かなければならなかったため破壊も著しく、ようやく住居の形をとどめていたといえるものであった。

平面プランは、東西5.3m、南北5mを測る隅丸方形を呈する。南壁を切って3.0m×1.7m、深さ60cmを測る大きな土壌が住居内に構築されている。

壁は、地形的に傾斜しているため、南壁が11cmと浅い。他は19cmを測る。



第47図 J9号住居址出土土器拓影(1:4)



第48図 J 9号住居址出土石器実測図（1：3）

て床面は北に傾斜していることと、重複の関係から凸凹が著しく、土壌脇の南壁添いの床面が粘土層でなめらかに固まってきれいな床面をみせているのみであった。

ピットは、9個発見されたが傾斜面の北側は検出できなかったため空白がある。規模も20～30cmと小さい。深さは、P₉が20cm、P₅が16cmで割合としっかり掘り込まれているが、他のピットは10cm足らずで軟弱気味である。

炉は、西寄りで中央よりやや南寄りの位置にあり、48×44cmの方形石囲炉である。南側に56×30cm、高さ40cmの大きな自然石をしっかりと床面に埋め込んでいる。礫は、赤く変色していて焼土の堆積も多く多用されたものとおもわれる。また、炉上部の覆土および周辺の床面は、炭化粒子、焼土粒子が散布しており住居廃絶後の所産と考えられる。

遺物は、流れこんだ礫の間や床面から少量出土した。第43図の1は、わずかに頸部のくびれが残る胴長の深鉢で胴下部～底部を欠失する。口縁部が無文帯で頸部区画文と渦巻文が配され、地文に篋描き綾杉文、棒状懸垂文、中央に蛇行懸垂文が配されている唐草文系の土器である。

拓本1、2は、第I群3類に属する土器であり、1は異状斜縄文が、2は0段多条の縄文が配されている。3～18は、篋描隆線と沈線の渦巻文、綾杉文、蛇行懸垂文で構成された。第IV群3類に属する土器である。

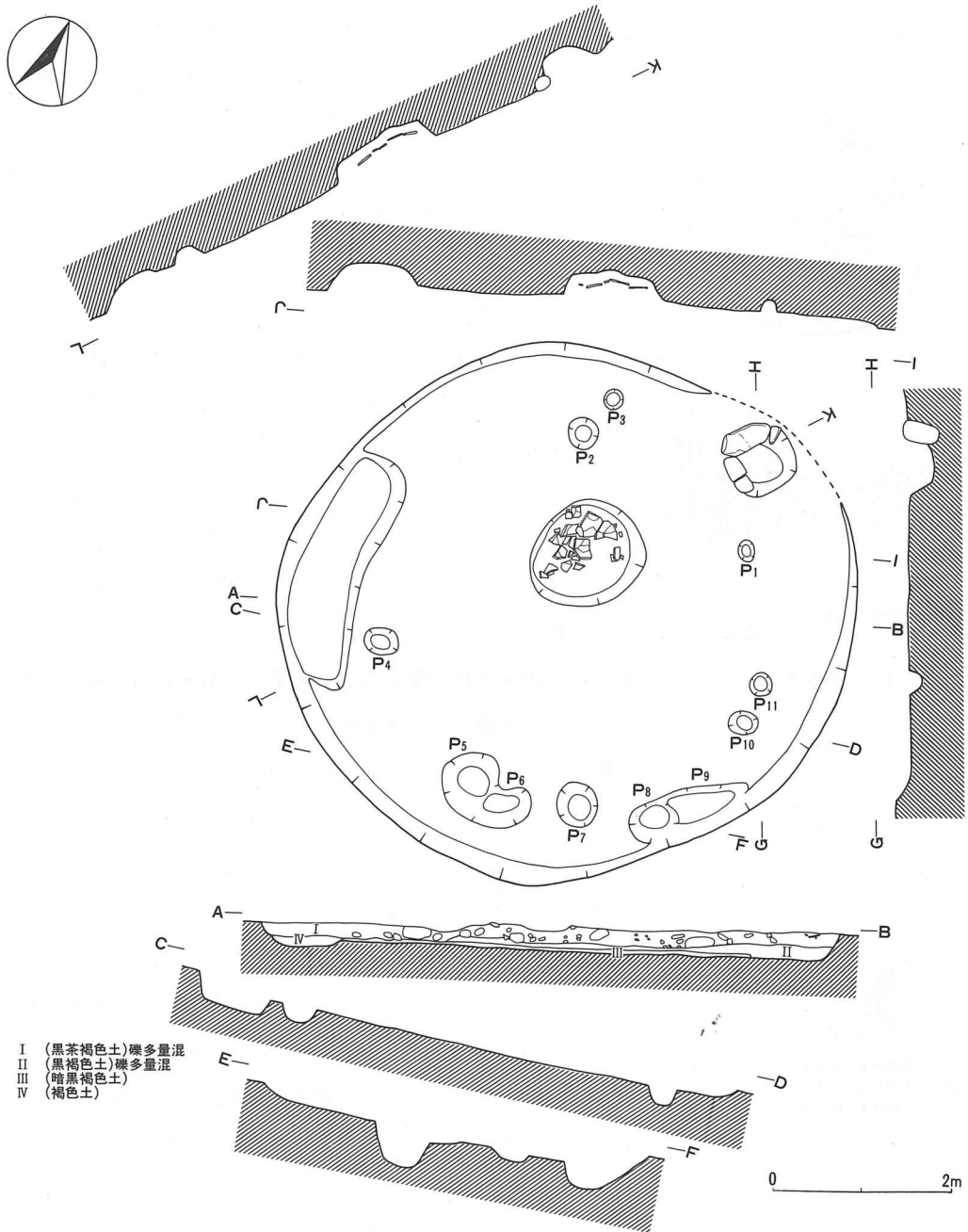
本住居址は、以上の土器から曾利Ⅲ式期に比定されよう。

（島田 恵子）

10) J 10号住居址（第49～59図）

本址は調査区域内北東隅、グリッド、あ・いー5・6・7内より検出される。プランは北東6m08cm×東西6m50cmを測りほぼ円形を呈する。壁高は検出面下西壁27cm、東壁30cm、南壁18cmを測る緩らかな立ち上がりを持つが、北壁はテストピット開閉時に削除されほとんど残っていない

いが残存した床面からその規模を把握する事が出来た。床面は、炉を中心に南側に約3 m80cm×4 m15cmの範囲に黄褐色ローム約5 cmの厚さで貼り締めた堅緻な箇所と、堅際附近の踏み締めのやや軟らかい箇所とに別れる。柱穴はP₁～P₁₁まで検出され、主柱穴はP₂ P₄ P₅ P₆ P₈ P₁₀ P₁₁と



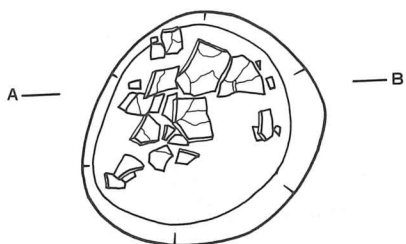
第49図 J10号住居址実測図 (1:80)

考えられる。

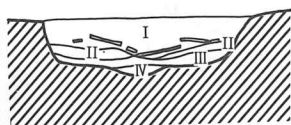
(cm)

pitNo. 規模	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
長軸×短軸	20×20	35×34	22×23	30×40	55×70	47×50	49×45	47×50	52×90	28×32	25×25
深さ	14	45	17	18	42	40	11	25	14	16	14

炉は中央やや西北寄りに位置する1m30cm×1m20cm、深さ30cmで鍋底形の掘り方を有する円形で(第54図23)の無文浅鉢が碎かれ敷かれた状態で炉内より検出された土器敷炉である。



A— B



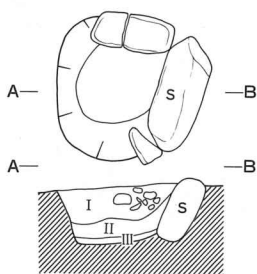
- I (黒褐色土)
- II (褐色土)
- III (茶褐色土) 焼土、炭化粒混
- IV (赤色土) 焼土

0 1m

第50図 J10号住居址炉実測図(1:40)

西南隅には壁に付く(2m60cm×93cm深さ20cm)の楕円舟底形の土壇が検出されるが遺物の出土は無かった。また北壁には河原石(石英はん岩・安山岩)を使用した石組が確認されるが、テストピットを開ける過程で深く削除した部分に当る。残存箇所は(45cm×20cm・厚さ15cm・62cm×26cm・厚さ40cm)の長方形の石が2ヶL型に配置され方形(60cm×60cm・深さ27cm)の掘り方を備えている。層位はI・II・III層に別れIII層の茶褐色土層には焼土の混入が観察されたが残存形態、床面状況から炉址とは考えられず、北壁に構築された石組施設として扱ってもよいと思われる。

出土遺物は覆土内より多量の土器・石器が検出され図示出来得るものは全て登載した。



- I (茶褐色土) 礫多量混
- II (黒褐色土) 粘性強
- III (茶褐色土) 焼土混

0 50cm

第51図 J10号住居址石組施設実測図(1:40)

縄文前期に比定される土器(第54図24・25・27・28)24は胎付により肥厚する隆起帯を持ちやや外反する口縁を呈する。胎土は細く短い繊維を多量に含み、黒曜石粉・白石粒・雲母・細砂粒を含み、地文にLR縄文を施文する(花積下層期に比定)。27は上げ底状の底部で縄文が底部まで巡るが剥落が激しく原体は分らない。胎土は太く短い繊維・黒曜石粉・白石粒・細砂粒を含む。25口縁が外反する胎土は細く長い繊維・白石粒・黒雲母・細砂粒を含む。地文はLR縄文を施文する。28はRL・LRループ縄文を地文とし細く長い繊維・白石粒・長石を含む。

(関山期に比定)

縄文中期中葉に比定される土器(第53図16、第54図3・29~38)

第53図16は突起部、29、30は篋状工具により三角刻文的施文をおこなう。32はハ状に、33・35・

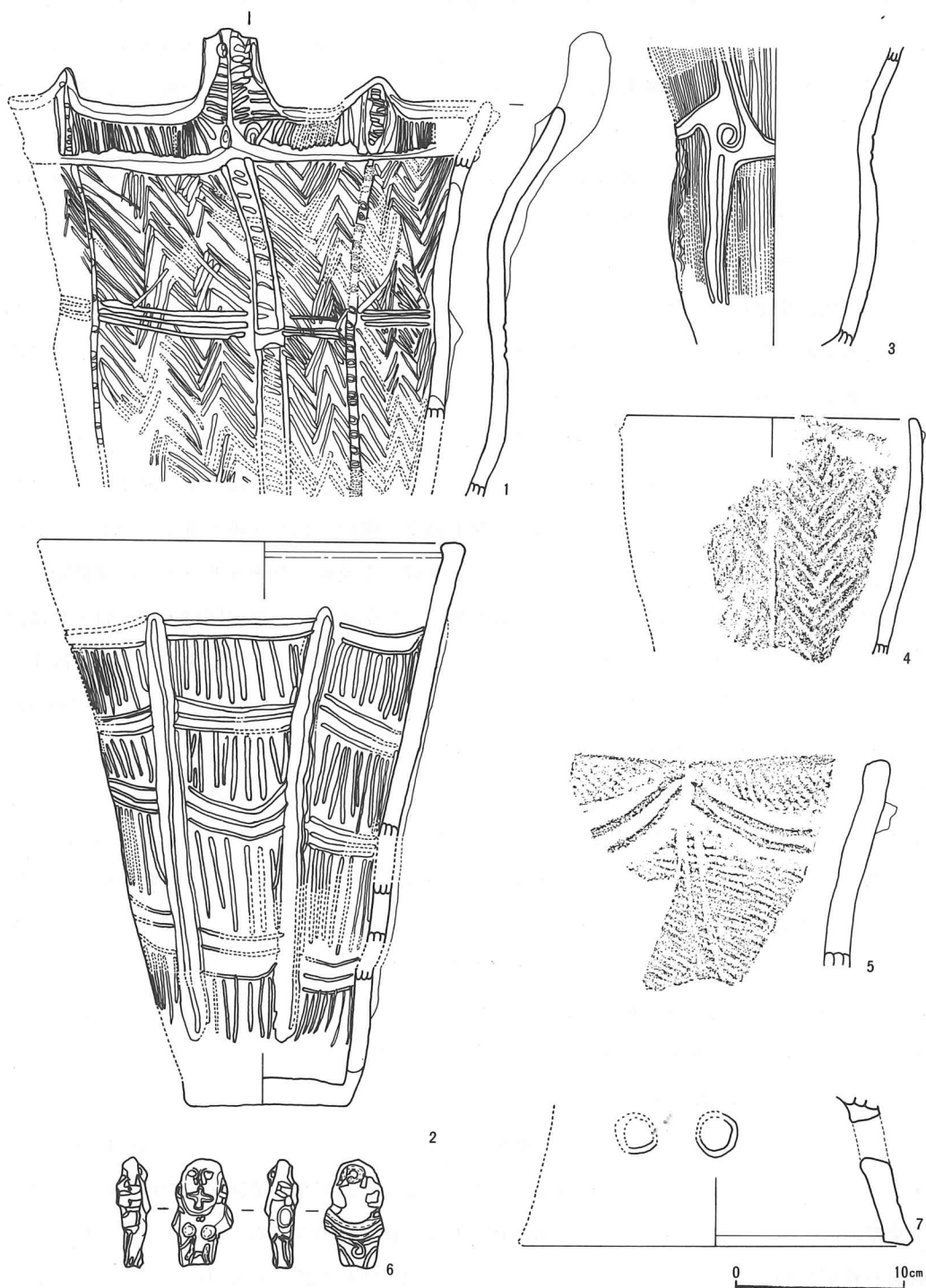
37・38は半載竹管による瓜形文を施する。31は渦巻状の貼付をひねり上げ、34は沈線で三角形を描き、36は三又文を施す口縁部である。39は沈線に細い刻目を掻く。第54図60口縁部であるが、口唇部が欠損する。楕円状の隆帯内に斜に沈線を施す。
(井戸尻期に比定)

以上の土器は覆土上層が検出中に出土したもので、流入によるものと考えられる。

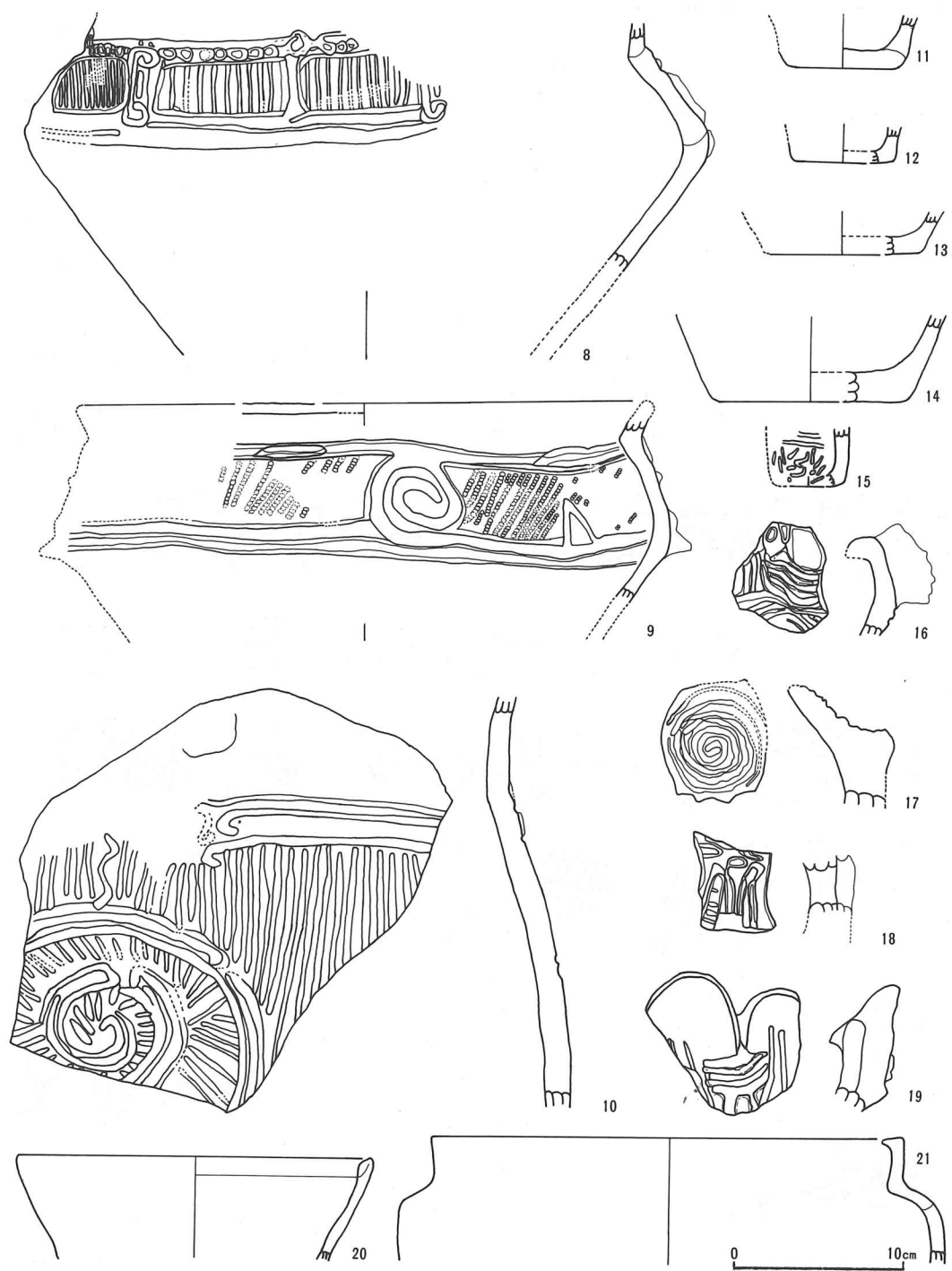
中期後葉に比定される土器(第52図1～7、第53図8～15・17～21・第54図22・23・40～59・61・62)

第52図1・2は床面より若干浮き重なった状態で検出された。1は口縁に大突起1小突起2を1単位に2組を持ち、小波状口縁を呈する深鉢で口径28cmを計る。篋状工具により口縁を縦位に胴部を綾杉状に沈線を施し貼付の懸垂で大きく4区画する。黝黄褐色で焼成は普通。2は口径23cm、直径95cm器高33cmの深鉢である。器形は底部から口縁に向かってゆっくり開き、口唇部で内曲し平縁である。口頸部は無文帯で、貼付懸垂が7本垂下し区画する。区画内は篋工具により2条、3条の沈線を横位に区画し縦位沈線で充填する。黝茶褐色で焼成は堅緻である。3は櫛状工具により縦位に沈線を施し蛇行懸垂を描く。4は口径16.5cmの小径の深鉢で綾杉文を施す。5は口縁に粘土紐横帯区をしRL縄文を施こす。胴部はRL縄文を横位に施し沈線を垂下させる。8は横帯区画文を頸部に施こす浅鉢。9は横帯区画文にLR縄文を充填したキャリパー型の深鉢頸部である。10、第54図49・50・62は唐草文風の沈線を施こした胴部破片。第54図41・43・44・46は篋状工具で口縁部を刺突する。45・48は櫛歯工具で口縁に沈線を施こす。42は隆帯に刻目を施す。47は沈線の後に貼付の懸垂を垂下させる。51は口縁無文帯で波状の粘土紐を施こす深鉢。26・46・55はLR縄文53・54・56・58はRL縄文を地文とする。67は横帯区画内にRL縄文を施文する深鉢の口縁。61は横帯区画文内に沈線を施こす口縁である。23は炉址に敷かれていた、口径36cm、直径10cm、器高19.5cmを計る無文浅鉢である。黝黄褐色で焼成は良い。第53図11～14は底部、20、21、第54図22は無文の深鉢。第53図17・19は突起、18は把手である。第52図7は器台形土器の脚部である。器台部は輪積部から剥れる。脚には2孔1組の穿孔がなされ2対に巡る。色調は茶褐色で焼成は良い。第53図15はミニチュア土器である、第52図6は土偶である。両腕と腰から下が欠損する。口は十字形にあげ、双つの乳房と出臍状の突起がある。後頭部と背部には沈線による渦巻文が描かれる。黄褐色で焼成は堅緻であり、板状に近い形態である。第54図52口縁に沈線を巡らせ、小さな瘤状の突起を有す。

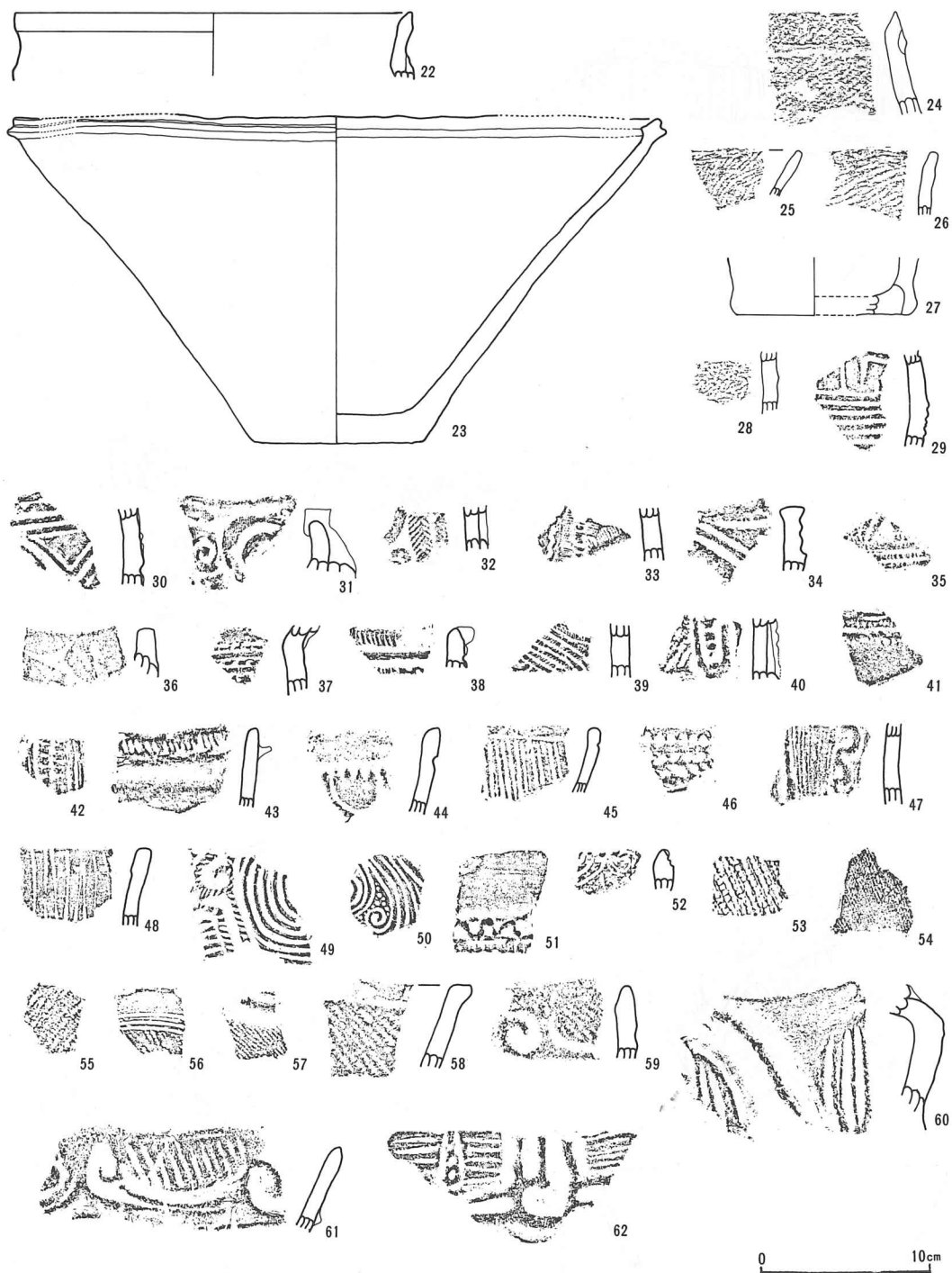
石器は総数61点と多い。打製石斧33点、磨製石斧3点、磨石6点、凹石2点、石鏃10点、ピース・エスキーユ3点、加工痕の有る石器4点が出土する。第55図1・第56図13の打製石斧はPit 7東壁際に並ぶように置かれ、第57図36はPit 5の縁で検出される。特筆すべきは打製石斧と磨製石斧を合わせて36点出土した事であろう。この内には長さ27.5cm幅11cmと大形のものが含まれる。この様な石器相は該期を反映したのかもしれない。詳しい計測値は一覧表に示す。上記により、本址は曾利II期に比定する。
(原田 政信)



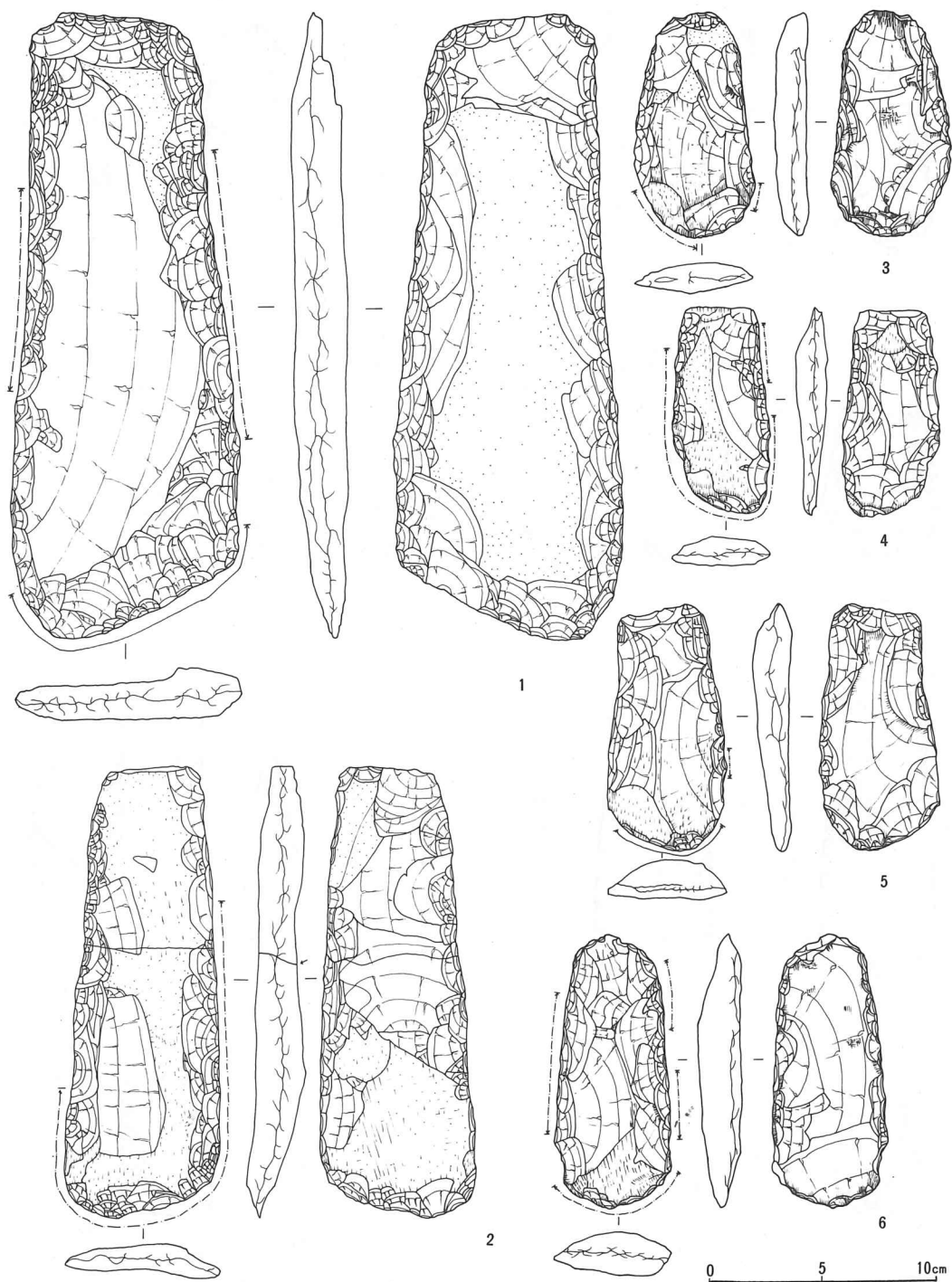
第52图 J 10号住居址出土土器实测图 (1:4)



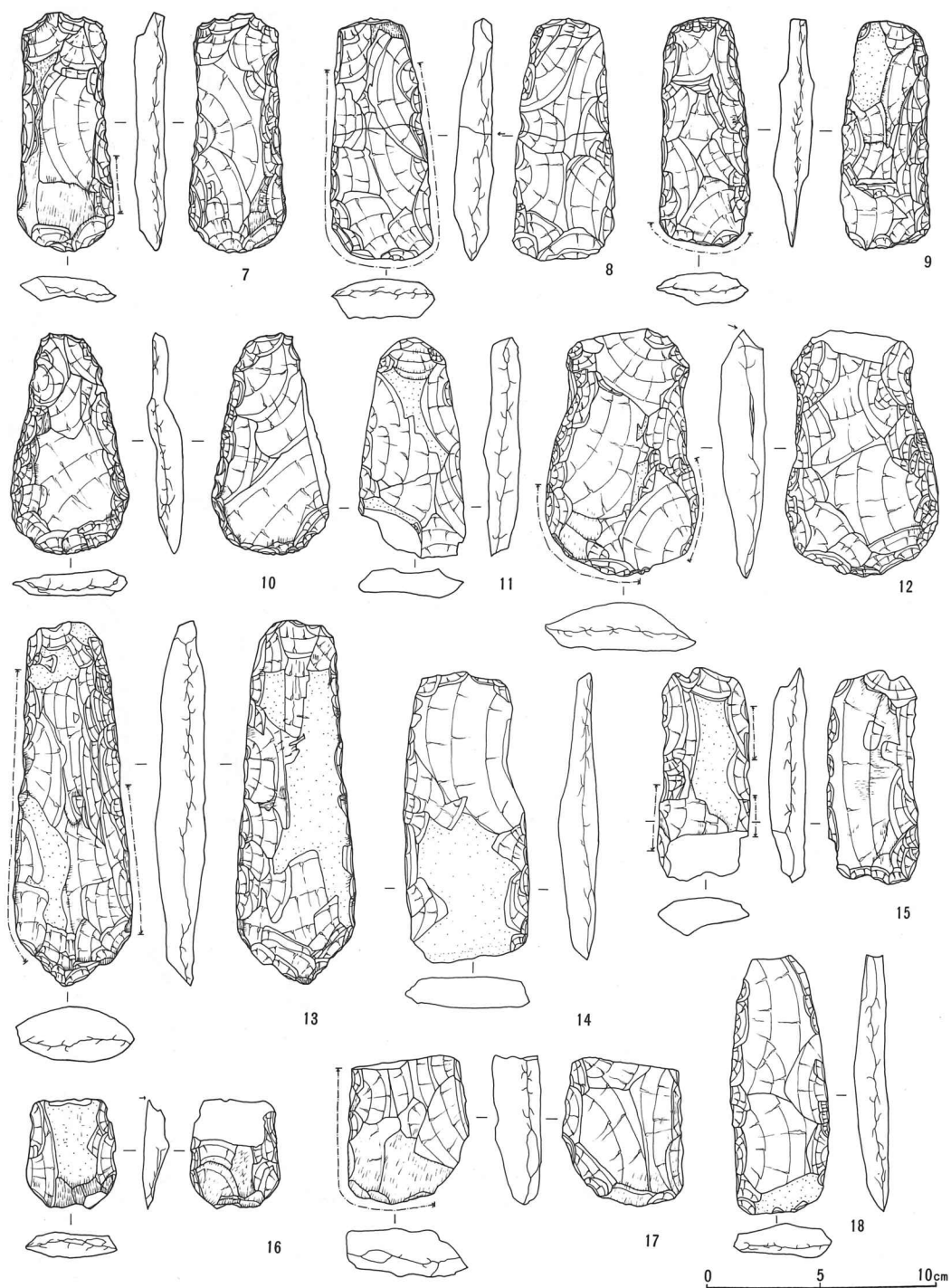
第53图 J10号住居址出土土器实测图 (1:4)



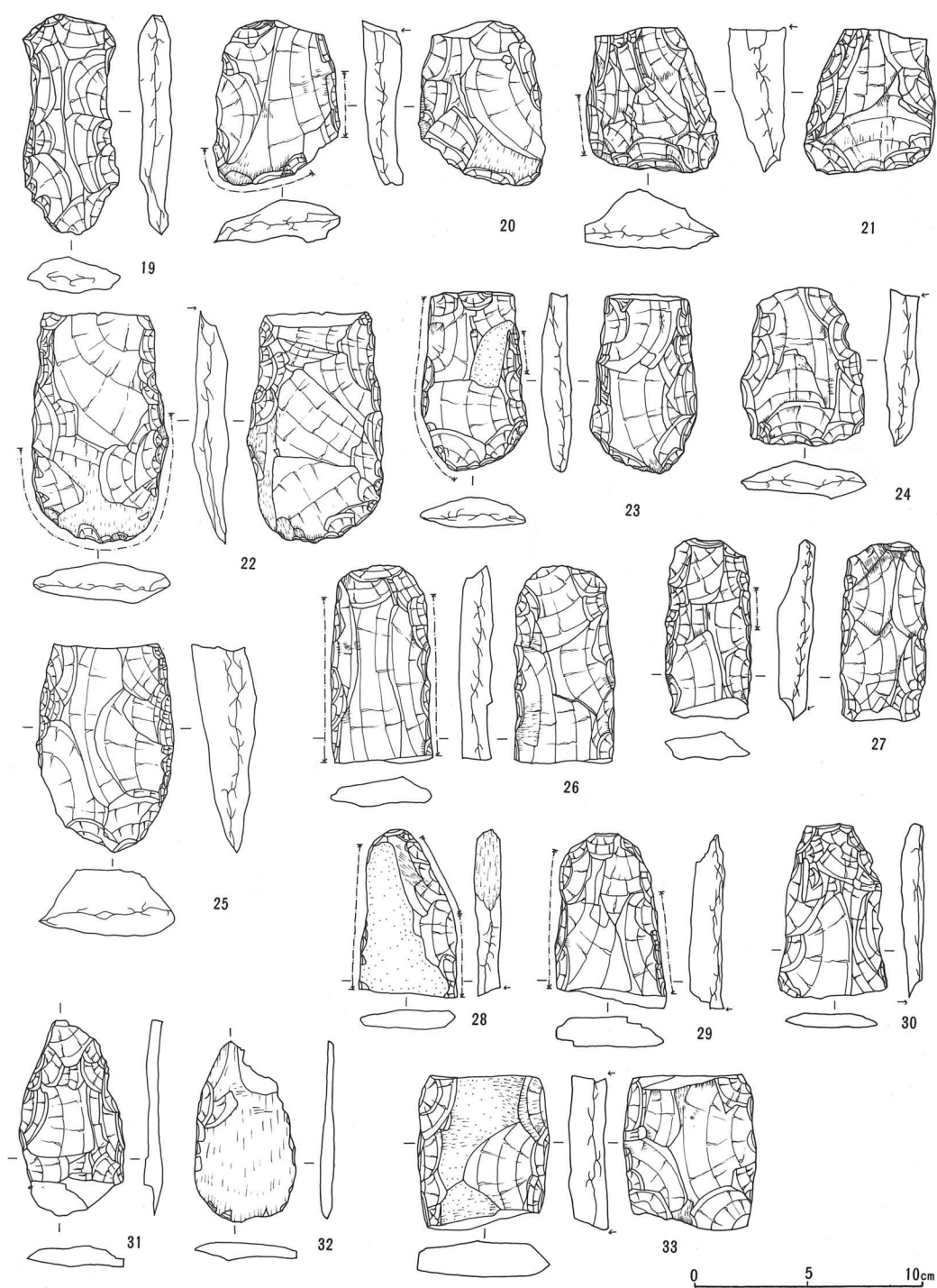
第54图 J10号住居址出土土器实测图及拓影 (1:4)



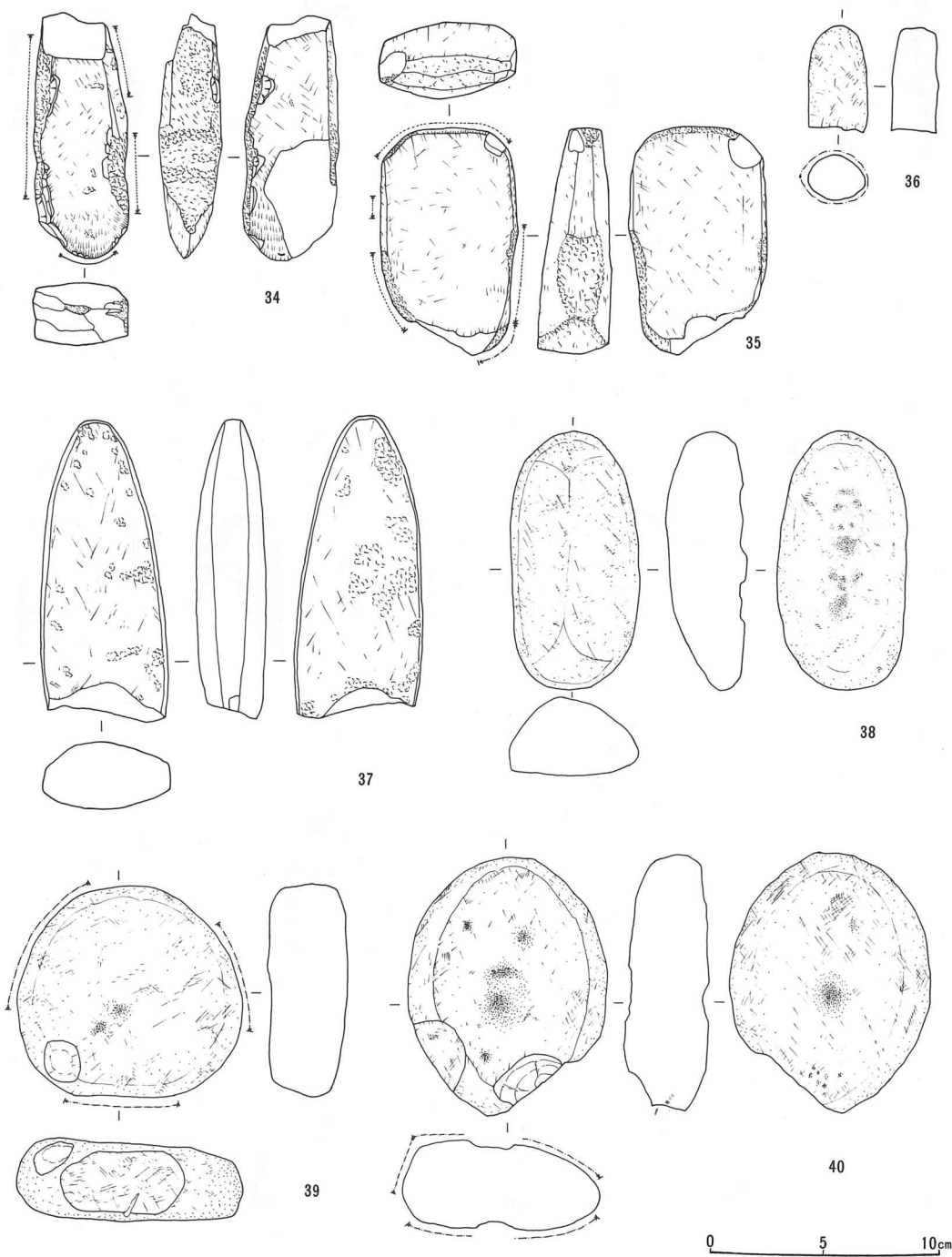
第55图 J 10号住居址出土石器实测图 (1:3)



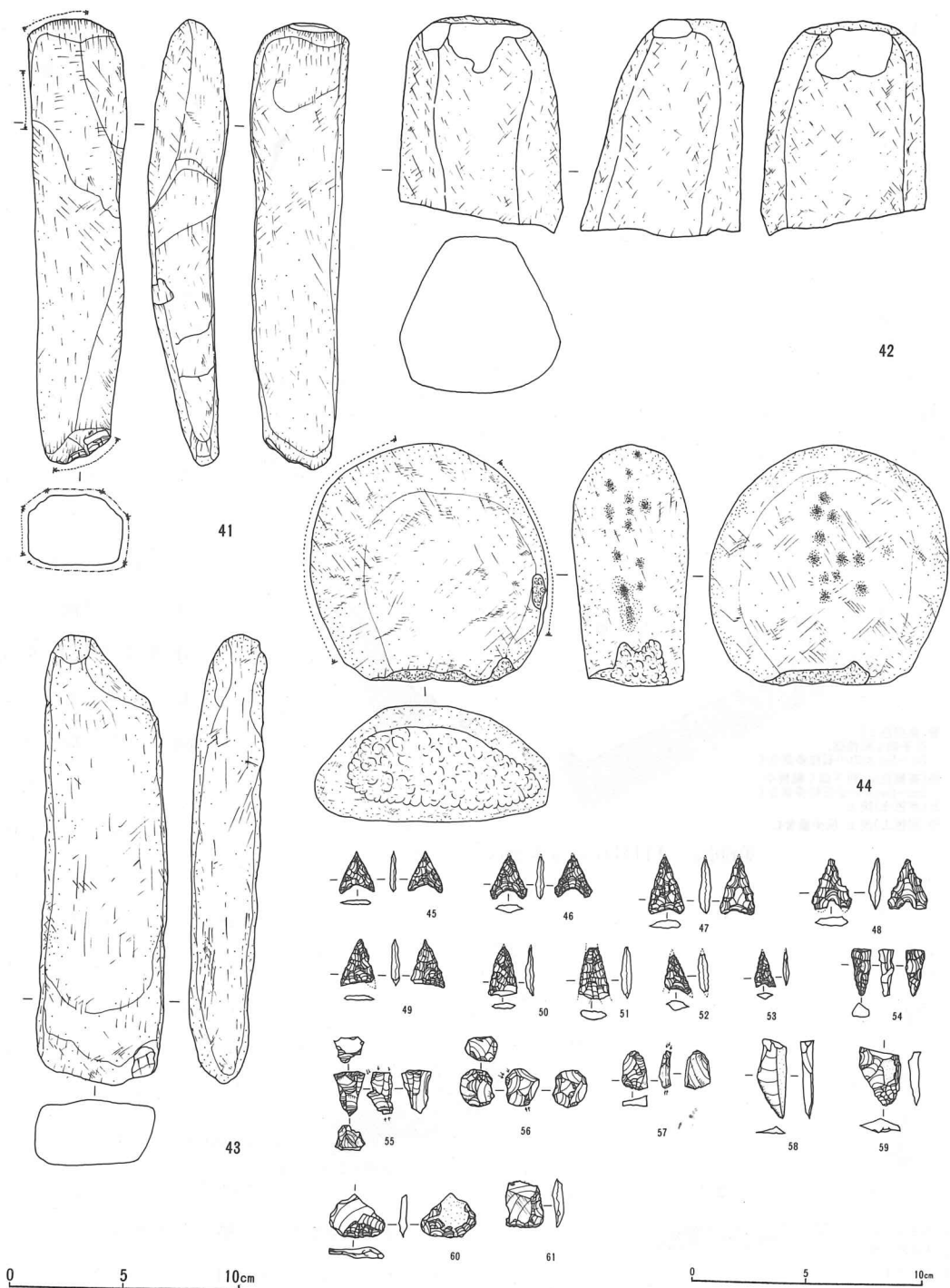
第56图 J 10号住居址出土石器实测图 (1:3)



第57图 J10号住居址出土石器实测图 (1:3)



第58图 J 10号住居址出土石器实测图 (1:3)



第59图 J10号住居址出土石器实测图 (41~43は1:3、45~61は1:2)

11) J11号住居址 (第60~66図)

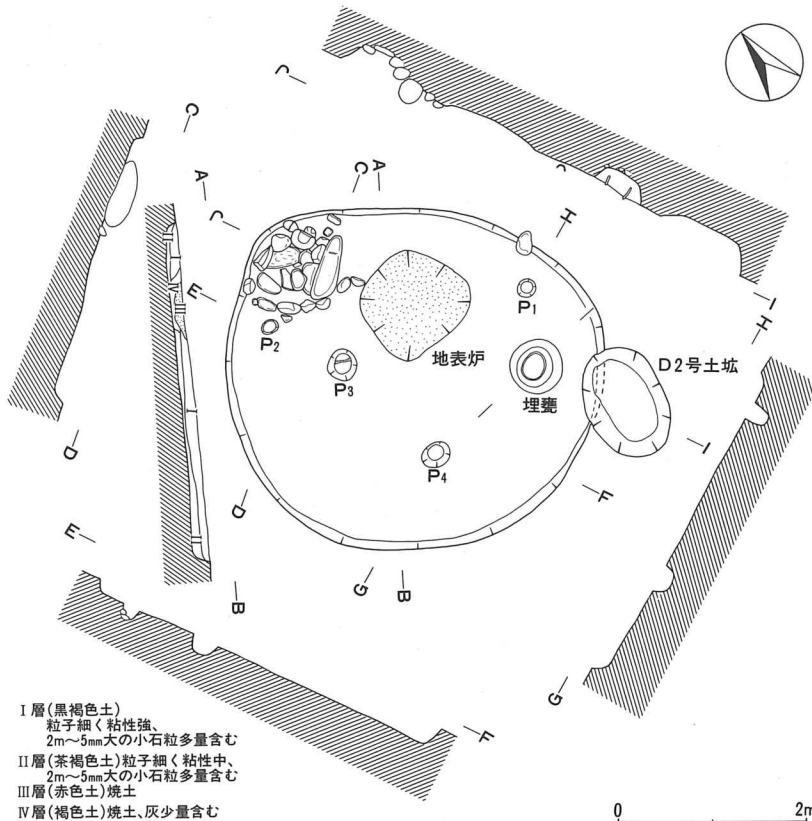
本住居址は、調査区の中央に位置した、お・かー4・5グリッド内より検出された。東壁中央

からD3号土壌に切られている。

本址の規模は小さく、東西4m、南北3.6mを測りほぼ円形を呈している。東南側の壁が高く24cmを測り、北東側の壁は削り取られていてわずか7cmの残存高であった。

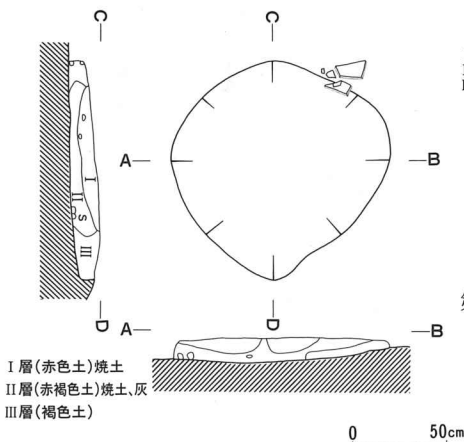
覆土は、I層が粘性の強い黒褐色土でII層は茶褐色を呈し、両層とも2~5mm大の小石粒を多量に含んでいた。ピットは4個存在し、P₁は20×20-23cm、P₂

は18×16-11cm、P₃は30×30-18cm、P₄は30×26-15cmを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、南壁際が空白で北東にやや片寄っているが、4個の柱穴を有する住居址であろう。



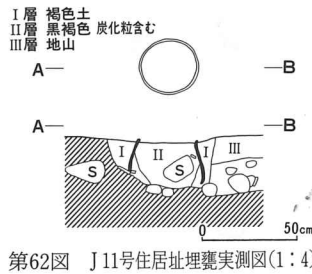
- I層(黒褐色土) 粒子細く粘性強、2m~5mm大の小石粒多量含む
- II層(茶褐色土) 粒子細く粘性中、2m~5mm大の小石粒多量含む
- III層(赤色土) 焼土
- IV層(褐色土) 焼土、灰少量含む

第60図 J11号住居址実測図(1:80)



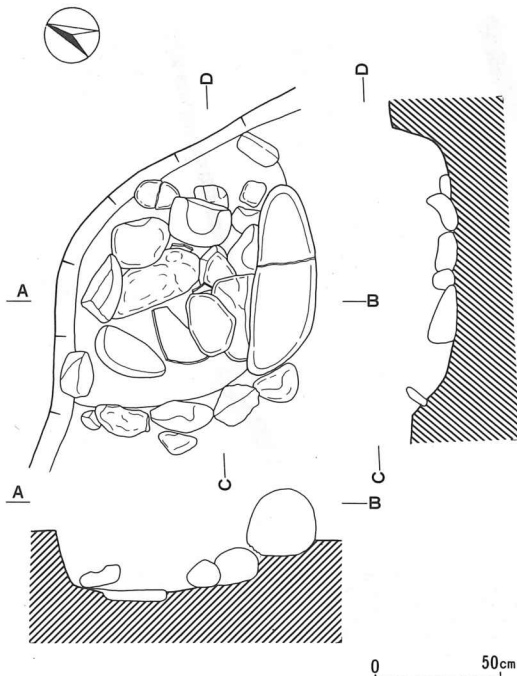
- I層(赤色土) 焼土
- II層(赤褐色土) 焼土、灰
- III層(褐色土)

第61図 J11号住居址炉実測図(1:4)



第62図 J11号住居址埋甕実測図(1:4)

炉は1.15×1.15cmを測る不整円形の地床炉で、床面上より焼土が10cmの厚さに堆積していた。焼土の範囲も広く、住居址の規模に比例してかなり大きな地床炉で



第63図 J11号住居址特殊施設実測図(1:4)

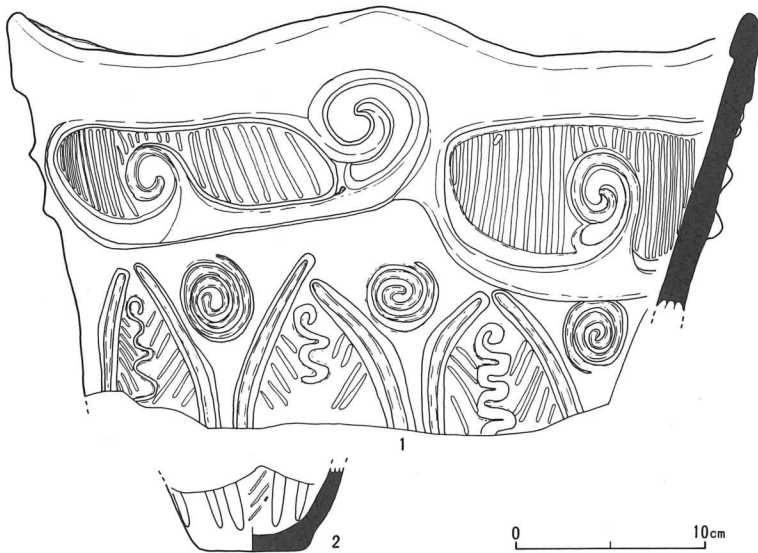
ある。

また、東壁中央から50cm入った位置に埋甕が逆位の状態で埋設されていた。胴下部～底部を欠損した深鉢で、第64図に図示したように埋設の状態は、左側の底面は土器片を使用し、右側は石を利用して埋甕が傾斜しないように支えている。左右の側面は10～15cm程の巾を掘り込んだのみでキッチリと埋設している。口径40cmを測る深鉢でかなり重量もあり大形である。

さらに、本住居址の施設として最も注目されるのは、北西コーナーに設けられた立石を中心としてその周囲に配石された屋内祭祀施設である。規模は1mの範囲を地床より30cm掘りこんで、割れた石皿2個、20cm～60cm大の安山岩を

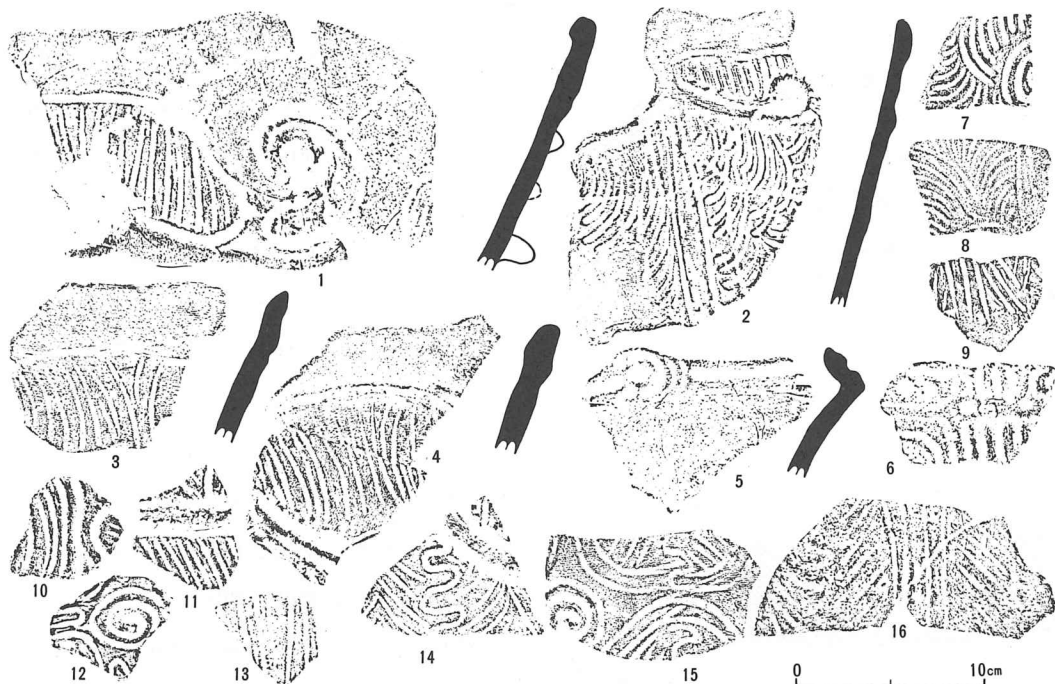
18個配列している。中央底面には塚原泥流の赤石が埋めこまれ、東側の掘りこみ際には75cm×25cmの石英斑岩を素材とした立石が横転していた。立石は中央にヒビが入り割れている。該期に隆盛する屋内祭式の場であったものと考えられる。

本址から出土した土器は、第64図1の埋甕と2の底径の小さい底部片、拓影の破片のみである。1の埋甕は、口径40cmを測る大形で胴中央直下で割れた残存器高22cmのものが埋設され

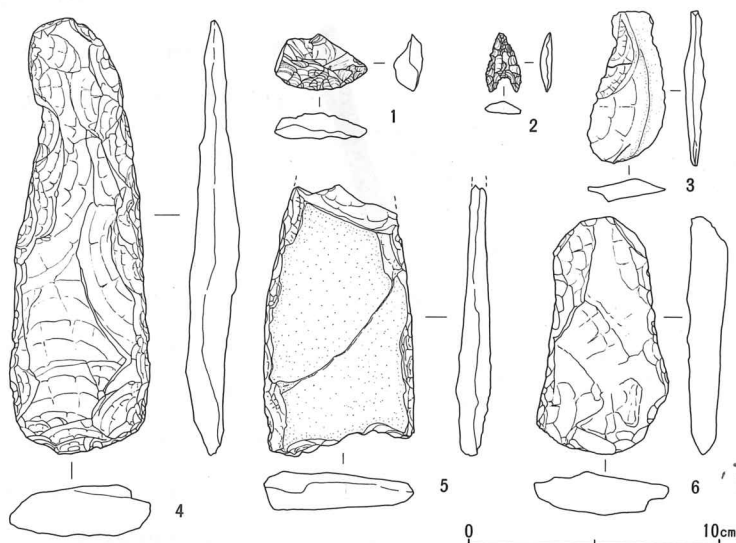


第64図 J11号住居址出土土器実測図(1:4)

ていた。波状口縁をもち、6単位を基本とした文様構成で、渦巻文を中心とした頸部区画帯、胴部はハの字形のアーチ状区画、その中を蛇行懸垂文と綾杉文で構成した華やかな土器である。茶



第65図 J 11号住居址出土土器拓影 (1:4)



第66図 J 11号住居址出土石器実測図 (1:3)

褐色を呈し焼成は固い。長石、石英の粉末、角閃石の粒子が目立つ。

拓影1~4、7~16は隆線と沈線の渦巻文、蛇行懸垂文、篋描縦線文、綾杉文とで構成された唐草文系の基本を取り入れた土器群である。

1は、埋甕と同器形、同文様の大形深鉢である。5、6は摩滅の著しい土器片で沈線を主体としている。5

は、唯一の浅鉢である。

石器は、加工痕のある石器1点、石鏃1点、縦形石匙1点、打石斧3点が出土している。

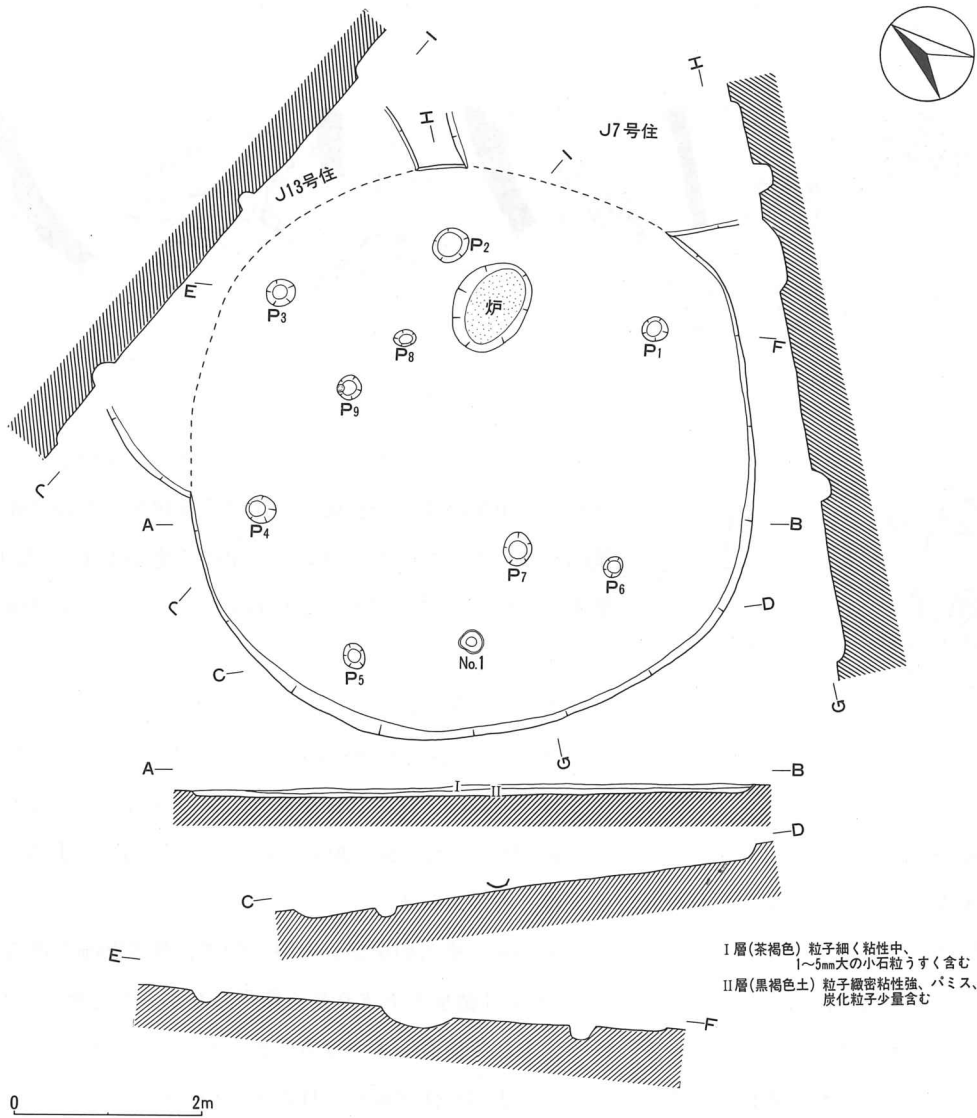
このように、日常的な土器片、石器類が出土していることから考えて、本址は特別な石組祭祀

施設を有してはいるものの、特殊な祭祀専用の住居址とはいいがたいであろう。しかし、屋内祭祀を司どる司祭者の住居であった可能性も強い。

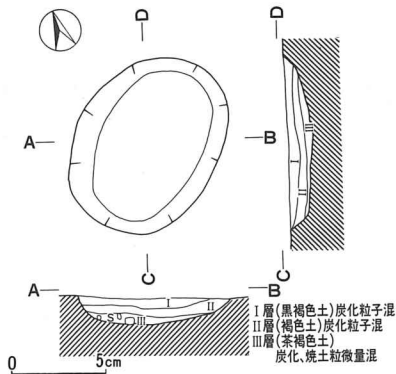
本住居址は、こうした祭祀の確立期にあたる曾利Ⅲ式期に比定される。 (島田 恵子)

12) J12号住居址 (第67~71図)

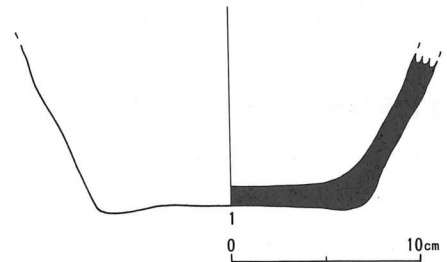
本住居址は、え・おー2・3・4グリッドに検出され、北側をJ13号住居址に、又、東側をJ3号住居址に切られた状態で検出された。



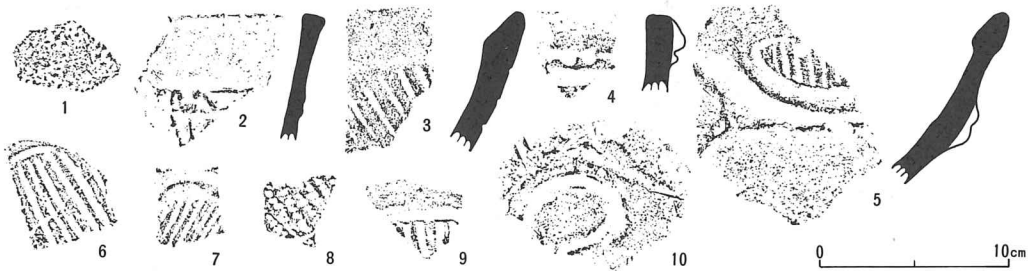
第67図 J12号住居址実測図 (1:80)



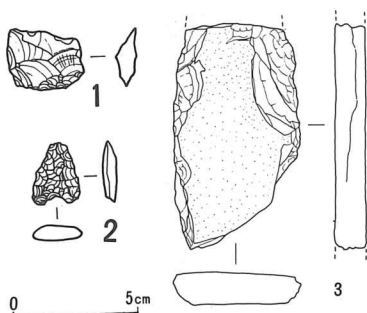
第68図 J12号住居址炉実測図(1:4)



第69図 J12号住居址出土土器実測図(1:4)



第70図 J12号住居址出土土器拓影(1:4)



第71図 J12号住居址出土土器実測図(1・2は1:2, 3は1:3)

平面プランは、約6mを計測し、ほぼ円形を呈すると推測される。東側のJ13号住居址とJ3号住居址との間に僅かに壁面が残っていたのでプランを推定する事が出来た。覆土は、黒褐色を呈し、礫の混入は比較的少なかった。壁高は確認面より4~17cmを計測した。

柱穴は計9個検出され、P₁、P₂、P₃は東側に検出され、径24cm~30cm、深さ13cm~16cmを測る。P₄、P₅は北西側に検出され、径22cm、深さ10cmを測り、共に住居址の壁際の周りに配列している。P₇は、西壁より約1.7mに検出され、24×30cm-8cmを測る。P₉はJ13号址との床面の差がなく、切られた13号址の重複と推定される。

炉は、住居址東寄りに検出され、1m×76cmの楕円形を呈した竪穴炉で、深さ20cmを測る。覆土中に炭化物の混入が多量にみられたが、焼土は微量であり長く使用しなかったと推定される。

本址の床面は非常になめらかで、礫の流入は床面直上まではみられなかった。遺跡内の中で部分的ではあったが、隣接するJ3号住居址、J13号住居址が同様な床面の状態であった。

本址から出土した土器は、第69図1の深鉢形土器底部片が床面直上から出土したのみである。

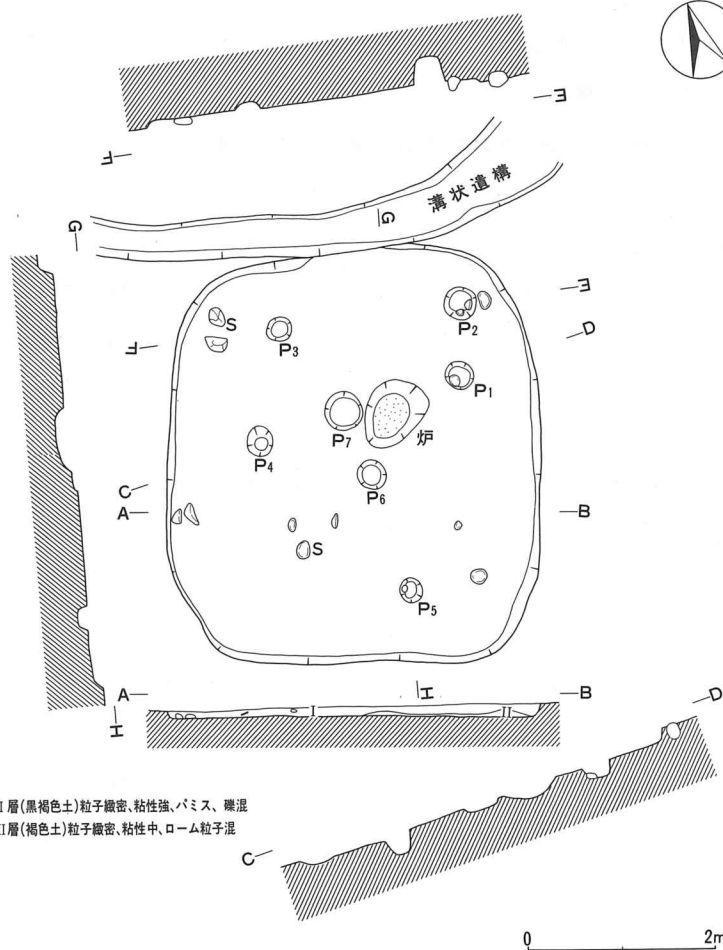
底径14cmを測りかなり大形の深鉢となろう。拓影は10片であるが、No.1は縄文時代前期の破片であり繊維の混入がみられるが、摩滅して文様等不明であり、覆土中に混入したものである。2～5は口縁部片であり、口縁部無文帯の直下を楕円区画文が配され、その中に篋描縦線文、斜線文が施されている。6～10も同様のものである。

J3号住との混入もあり時期の決め手となる決定的な資料に欠けるが、プラン確認の際の状況および重複住居址との関連から、曾利II～IIIの古期に営まれた住居址であると考えられる。

石器は、第71図の3点が出土したのみであった。 (三石 延雄)

13) J13号住居址 (第72～74図)

本址は、う・えー2・3グリッドに検出された。東側は、J3号住居址に近接し、南東側はJ



12号住居址の一部を切っ
て構築し、又、北側の壁
の一部は後につくられた
用途不明の溝状遺構に切
られていた。

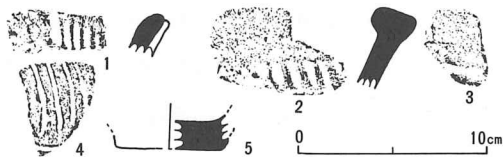
平面プランは、4.3m×
3.9mを計測するやや不
整形の隅丸方形を呈す
る。

覆土は、小石粒を混え
た黒褐色土であり、南西
側より帯状の礫群が遺構
の一部を破壊した形で流
入していた。

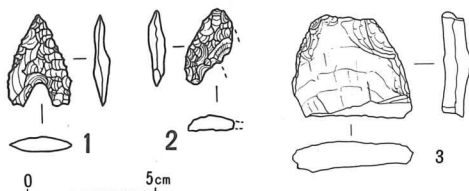
壁高は、確認面より6cm
～9cmを計測した。

柱穴は、計7個検出さ
れ、P₁は炉の北東側に検
出され、径30cm、深さ14
cm、P₂は北東側隅に検出
され、径30cm、深さ14cm
P₂は北東側隅に検出さ

第72図 J13号住居址実測図 (1:80)



第73図 J13号住居址出土土器拓影 (1:4)



第74図 J13号住居址出土石器実測図
(1・2は1:2, 3は1:3)

れ径36cm、深さ25cm、P₃は北西側で径28cm、深さ7cm、P₄は住居址中央の西寄りに検出され、径30cm深さ18cm、P₅は、南東側に検出され径24cm、深さ11cm、P₆は炉の南西側に検出され、径30cm、深さ10cmで、P₇は炉の西側に検出され、径40cm、深さ6cmを計測した。炉際の柱穴が不規則であり、立替も推定される。南西側の不明の部分にも存在したのと思われるが検出できなかった。礫群の流入によりなんらかの影響をうけたものとおもわれる。

炉は、住居址中央のやや北東寄りに検出され、80×60cm、深さ10cmを測る不整な楕円形を呈した竪穴炉で、覆土中には僅かに炭化、焼土が認められたが、あまり多用されなかった様相である。

本址から出土した遺物は少なく、底径5.5cmの深鉢形土器底部、その他拓影にとれたものは僅か4片に過ぎなかった。石器は、大形の石鏃2点、打石斧1点が出土している。

J13号住居址と同様に時期決定をする所見に欠けるが、プラン確認時に本址はJ12号住居址を切っていたことが明確であったことから、曾利Ⅲ～Ⅳ期に営まれた住居であると判断される。

(三石 延雄)

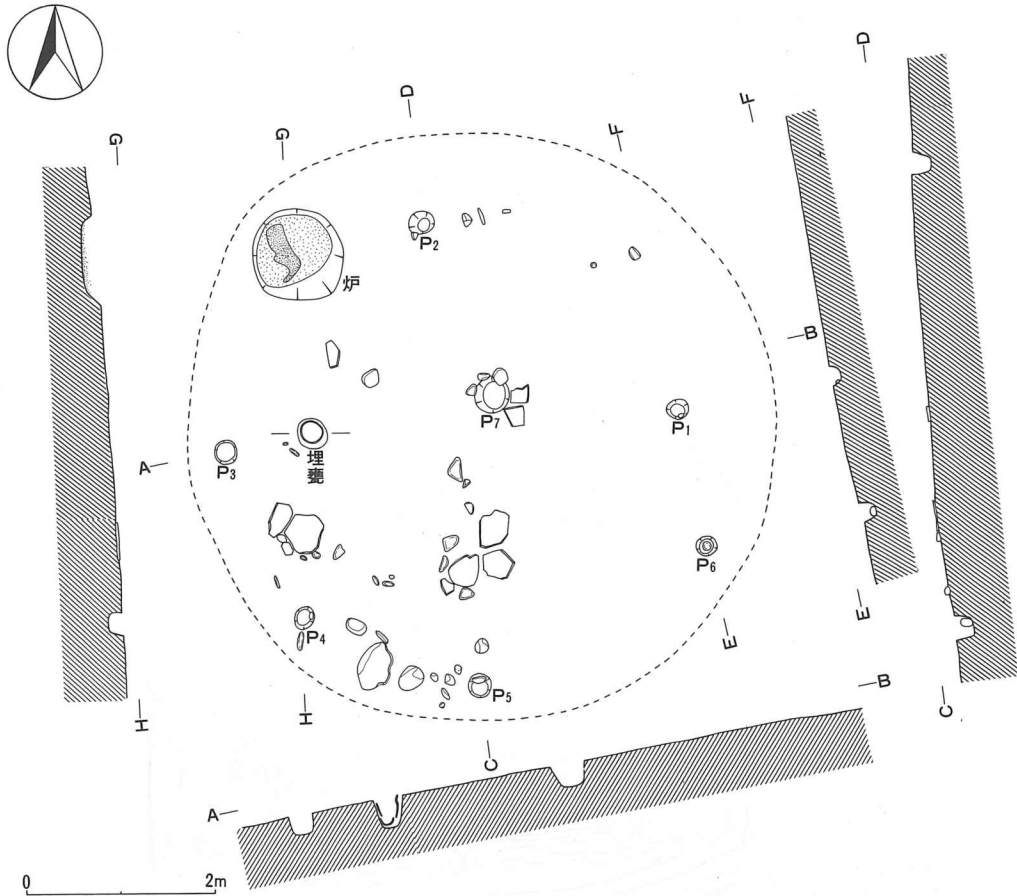
14) J14号住居址 (第75～79図)

本住居址は、J6号住居址とJ8号住居址に隣接した、けー4・5グリッド内にて検出された。プラン確認時においてすでに床面に達しており、僅かに残存した敷石によって住居址であることが判明したような状況であった。恐らく敷石の大部分は耕作時に取り去られたものとおもわれる。

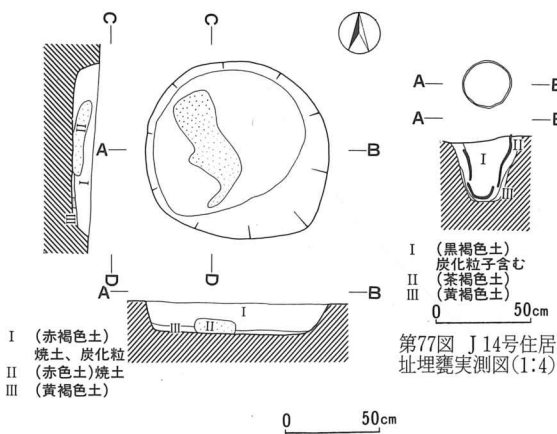
平面プランは、ピットの配列、炉の位置等から計測して6mを測る円形を呈していると考えられる。柱穴は7個配列し、それぞれ20～40cmを測り、深さは15cm～23cmでほぼ垂直に掘りこまれている。

炉は、北西コーナーに位置し、95cm×95cmを測る円形の竪穴炉で、床面より15cm程掘りこまれている。焼土は炉の中央よりやや西側に6cmの厚さとなって堆積していた。バリバリの焼土塊で多用された状態を示していた。

また、埋甕が西壁中央より120cm入った位置に埋設されている。埋甕の位置から入口部を想定すると、炉は入口部に近い左側の奥に存在したことになる。口縁部を半分程欠失するが、当初は完形品を正位の状態で埋設したものであろう。唯一の埋甕の完形品である。埋設は左右の側面を



第75図 J14号住居址実測図 (1:80)

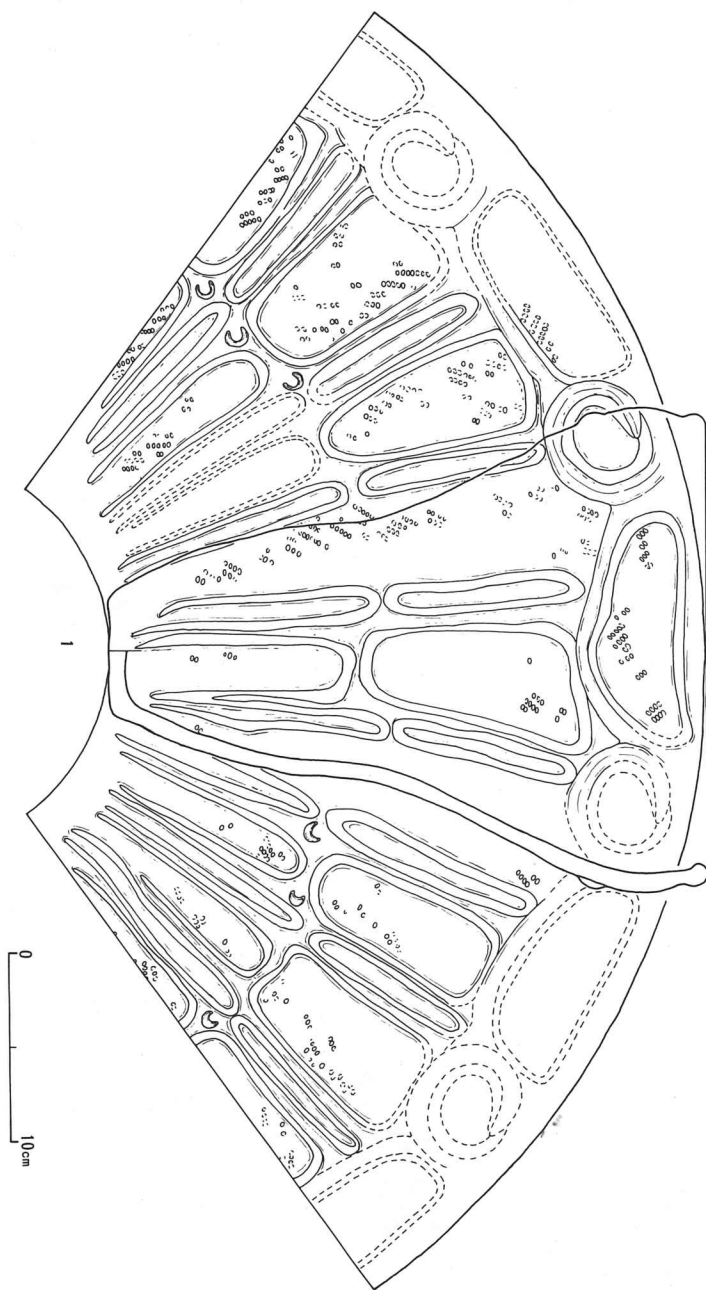


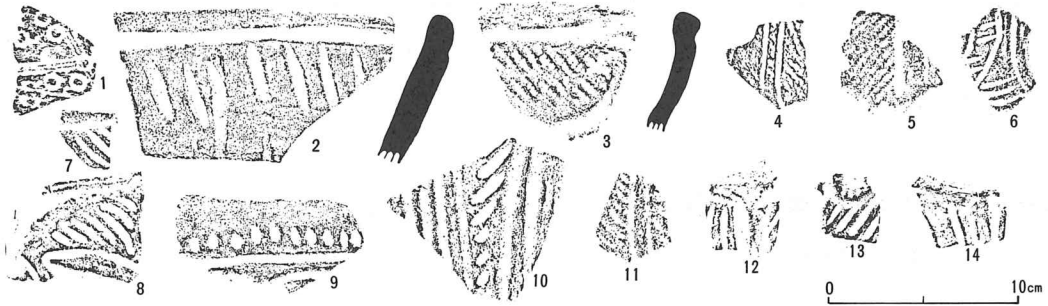
第76図 J14号住居址炉実測図(1:4)

口径より6cm巾をとって掘りこんだのみで、実に無駄なくキッチリと埋設してあることがわかる。本遺跡に埋設されている埋甕の位置は、各々異なっていて統一されていない。

また、本址は鉄平石(板状の輝石安山岩)を使用した敷石が配されており。その多くは住居址の南に残存している。大きいもので直径40cmを測り、小さい礫を鉄平石の支えや空間に添えてキッチリすき間のないように配石している。本址の敷石は残存部の状態からかなり住居址の広範囲にわたって配されてい

第78图 J14号住居址出土土器实测图(1:4)





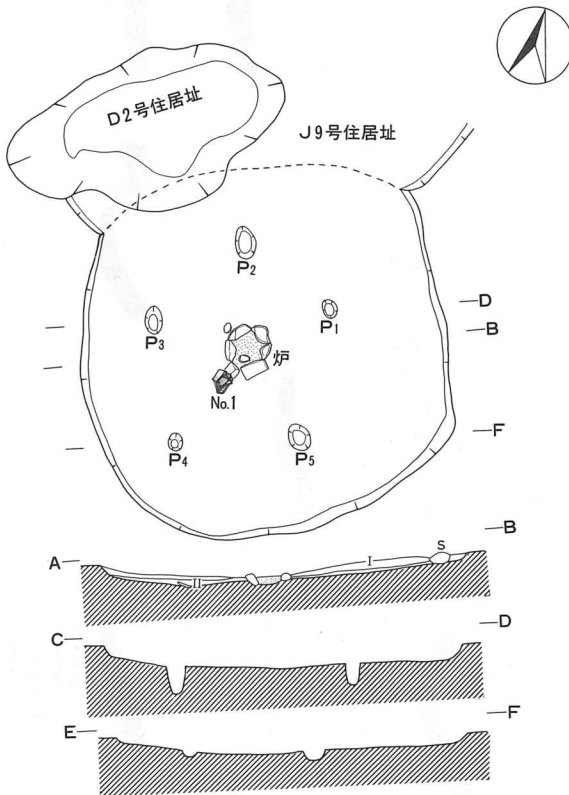
第79図 J14号住居址出土土器拓影(1:4)

たことがうかがえる。また、炉周辺に残存していないことも、J1号敷石住居址とは異なった配石である。敷石の残存していない部分の床面は、わずかに黒味がかっているものの全体は礫の混入した褐色土で、隣接のJ6号住居址、J8号住居址の床面と何等変化はみられない。

出土土器は、埋甕と拓影の小片のみで少ない。第78図展開図の埋甕は、頸部のくびれが胴中央

に移り頸部が内湾して、底部が小さいキャリバー形深鉢である。頸部文様帯は渦巻隆線と沈線文、長楕円の区画文から成る。胴部は長楕円文および細い楕円文が交互に配され、胴中央から底部にかけては細い逆U字文を施文している。それらの中間に小さい勾玉状刺突文が配されており、左側は3個連続して存在するが、右側は1つの間隔が設けられており製作者のミスであろうか。また、磨消縄文が巾広の長楕円文および逆U字文の中に施されていて、該期の特徴をそなえた土器である。

第79図の拓影1は、前期の繊維含有土器片で円形竹管文と1本の捺糸圧痕を配した、第1群1類の土器片である。2~14は、第IV群の5類に位置付けられ、2、9、10にみられるように、文様が大柄の沈線文に移っている。特に口縁に沿って一条の凹線が引かれ、その下部より雨垂



I (黒褐色土)粒子細く粘性中、パミス、小礫(5~10cm大)を多量に含む

II (褐色土)粒子細く粘性小、パミス、ロームブロック、小礫多量に含む

0

第80図 J15号住居址実測図(1:80)

状沈線文が施され、曾利Vの古い段階に属する最も特徴的な大深鉢である。

以上のような所見から、本址は曾利IV式期終末からV式期の古期に属するであろう。尚、石器の出土は皆無であった。

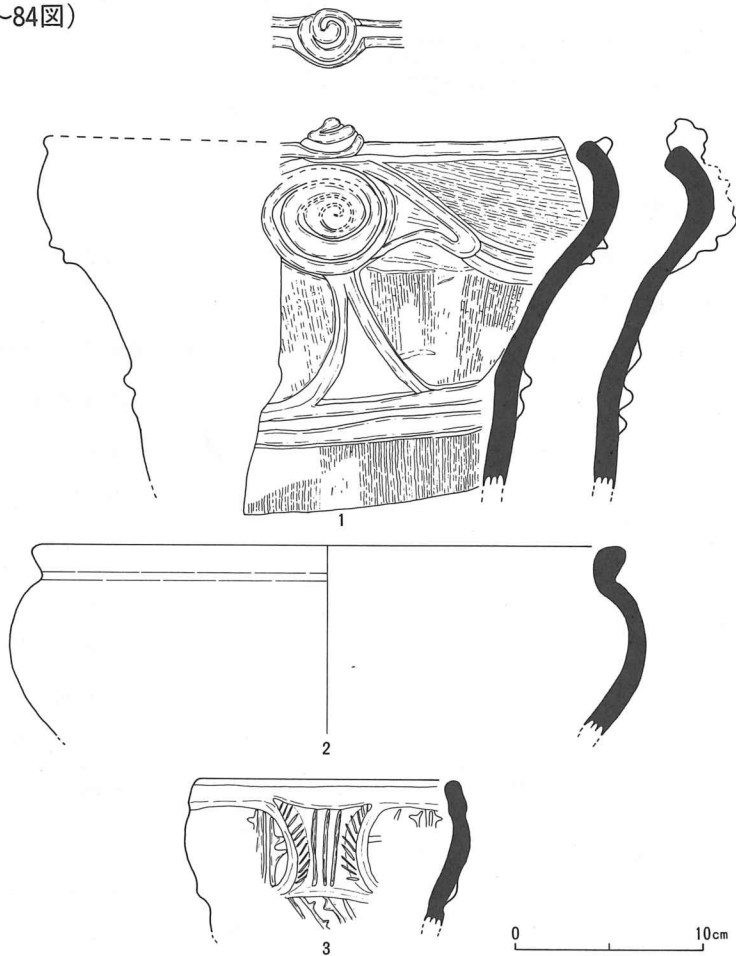
(島田 恵子)

15) J 15号住居址 (第80~84図)

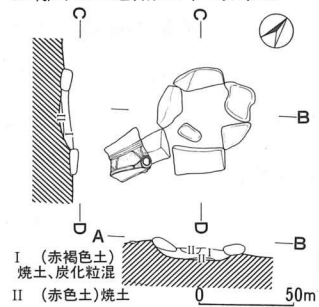
本住居址は、J 9号住居址、D 2号土壇と重複して、き・く-1・2グリッド内にて検出された。北西コーナー寄りをD 2号土壇に切られ、さらに北壁全体をJ 9号住居址に切られている。プラン確認は、礫に埋れていて、炉の検出によって住居址の存在を確認したのである。

平面プランは、390cmを測る隅丸方形で、壁高は7~20cmを測り南壁コーナーが比較的良好的な遺存状態であった。

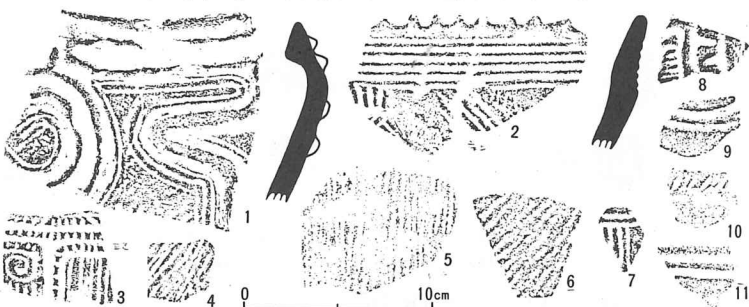
柱穴は5個検出された。炉を中心に壁から70cm離れた地点に平均的な



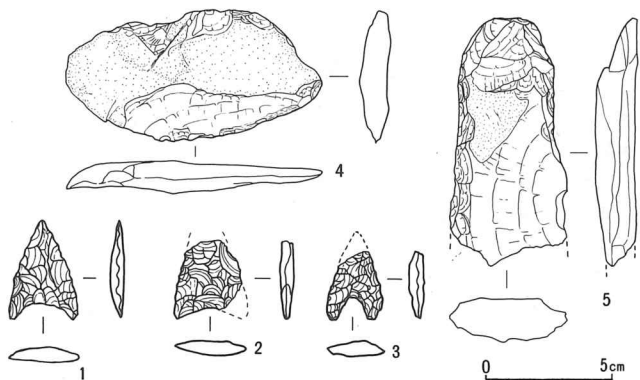
第82図 J 15号住居址出土土器実測図(1:4)



第81図 J 15号住居址炉実測図(1:40)



第83図 J 15号住居址出土土器拓影(1:4)



第84図 J 15号住居址出土石器実測図(1:3、1~3は1:2) 焼土が堆積していた。炉際には、キャリバー形深鉢片が出土した。

床面は、炉の付近がなめらかのみで、前述した礫群の流入で凸凹気味であった。

出土した土器は、炉付近より出土した第82図1のキャリバー形深鉢、2の鉢形土器、3の小形深鉢の3点が図示できた。1は、口唇部にとぐろを巻いた蛇体が貼付されており、隆帯の大渦巻文を中心に区画帯の地文は条の少ない縄文を転がして細く埋めている。2の鉢形土器は、胴部が大きく湾曲して見事な曲線を描いている。赤褐色を呈し、長石、石英粒が目立つが焼成は固い。3の小形キャリバー形深鉢は、口縁部はほぼ一周するが胴部の残存部が少なく、文様構成がつかみにくい。頸部区画帯の中に施文された文様は、連続楕円刻文、半肉彫三叉文等で藤内式期の特徴が残っている。

また、拓影1~3、8の土器片は、渦巻隆線、波状口縁、連続楕円刻文等がみられ、本址は、第III群の1類である井戸尻式の新しい時期に比定されよう。

石器は、石鏃3点、横刃形石器1点、打製石斧1点の出土があった。

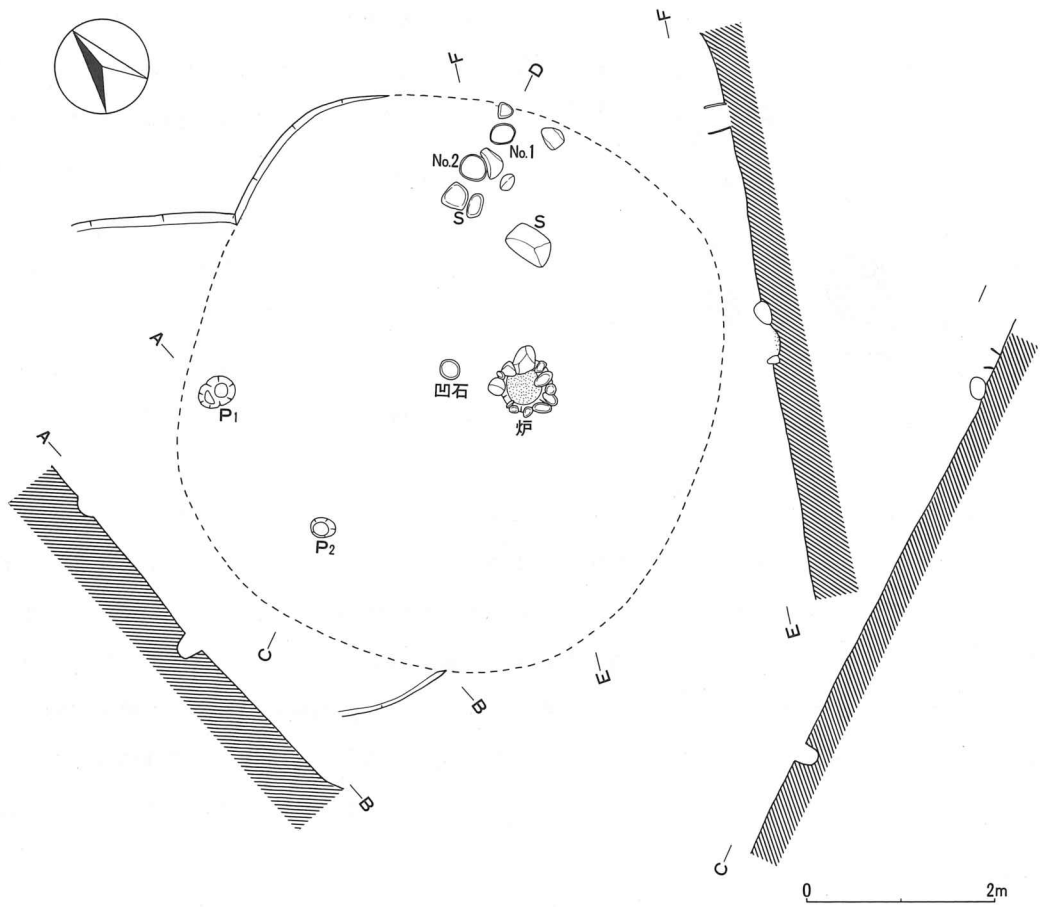
(森泉 定勝・島田 恵子)

16) J 16号住居址 (第85~88図)

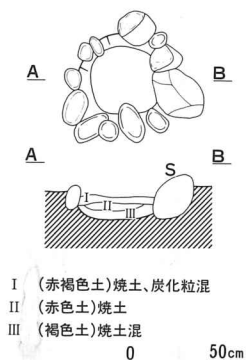
J 16号住居址は、調査区中央の西端、か・き-0・1・2グリッド内に属し、J 9号住居址に切られて存在する。この地点は、J 9号住居址で前述したように、おびただしい数の礫が流れこみ、ことに本址は中央に土堤の切りこみもあり傾斜しているために段差があり破壊がひどく住居址の一部分が残存していたのみであった。

平面プランは、北東コーナーが検出できたのみであるが、推定では南北5.6m、東西が6mを測る円形プランであると想定される。残存部分の北東側壁高は、15cmを測る。

柱穴は2個検出できたのみであった。P₁はテラス状に連なった状態で、35×30cm-20cmを測り、テラス状の部分の深さは9cmである。P₂は25×20-23cmで良好な掘り込みであった。

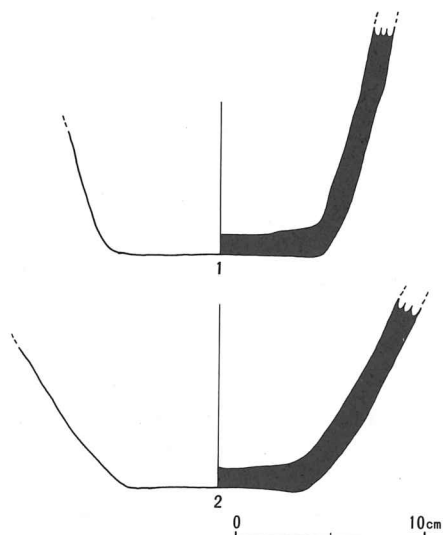


第85图 J16号住居址实测图 (1:80)

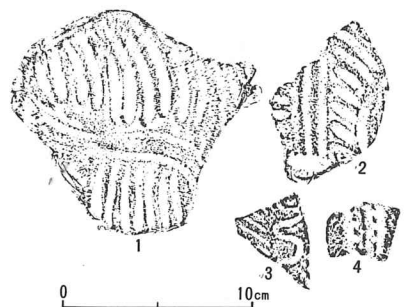


- I (赤褐色土) 烧土、炭化粒混
- II (赤色土) 烧土
- III (褐色土) 烧土混

第86图 J16号住居址炉实测图(1:4)



第87图 J16号住居址出土土器实测图(1:4)



第88图 J16号住居址出土土器拓影(1:4)

炉は、住居址中央からやや南寄りに位置し、12個の安山岩を使って囲った、50×50cm、深さ10cmを測る小形の円形石囲炉であった。炉の底面よりやや上部には、焼土が2cm程堆積していた。

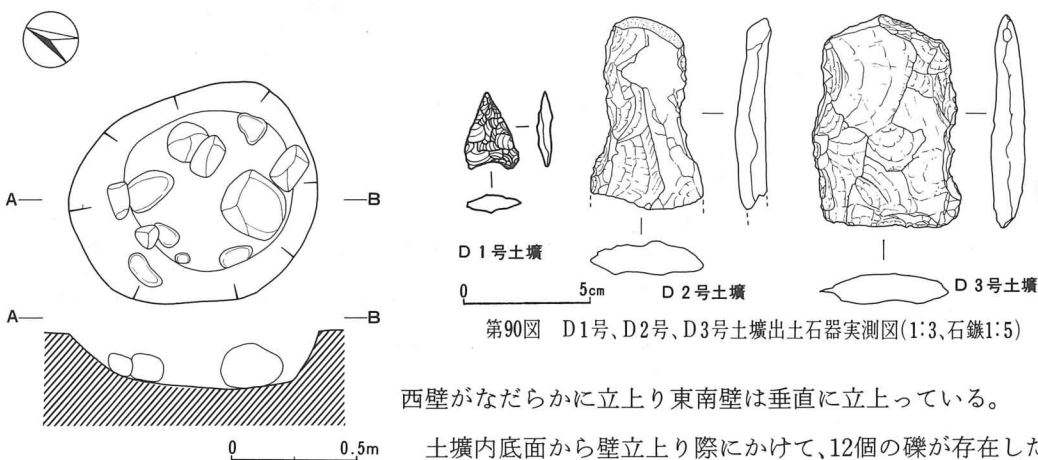
遺物は、炉から30cm北寄りの床面に直径20cmの円くて偏平な凹石が存在し、また、東壁際には摩滅した深鉢の胴下部～底部にかけての破片が2点出土したのみで、その他は拓影に図示した4点と少量の出土であった。覆土からの出土であり、J 9号住居址との混入も考えられ、明確な時期決定はできにくい。床面直上の底部片の立ち上りと、J 9号との切り合い関係から、曾利Ⅲ式期の古期に比定されよう。
(島田 恵子)

2 土 壙

1) D 1号土壙 (第89~90図)

本土壙は、調査区の最北端、あー4・5グリッドに検出され、J 7号住居址の壁の一部を破壊して存在した。

平面プランは、85×98cmのやや不整な楕円形を呈し、深さは確認面より28cmを測る。壁は、北



第90図 D1号、D2号、D3号土壙出土石器実測図(1:3、石鏃1:5)

第89図 D1号土壙実測図(1:30)

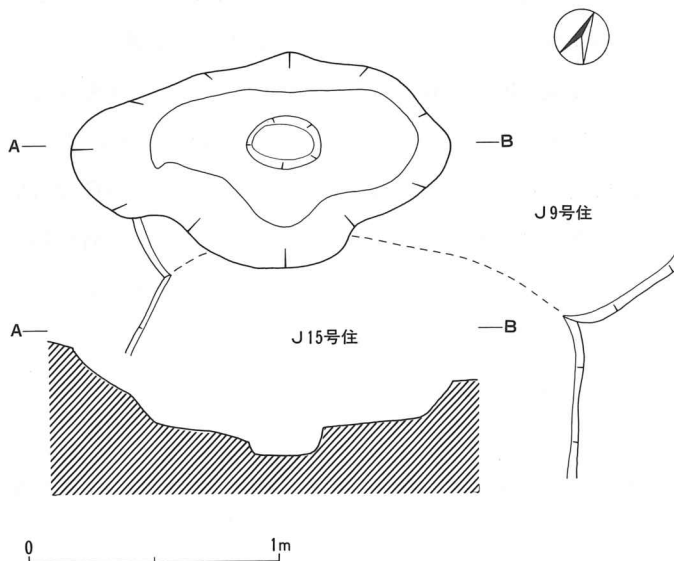
西壁がなだらかに立ち上り東南壁は垂直に立上っている。

土壙内底面から壁立ち上り際にかけて、12個の礫が存在した。最大のもので25×25cmを測り、その他は10cm～15cm前後を測る。出土遺物は、石鏃1点が出土したのみである。浅く、形状の有りかたから墓壙であるとおもわれる。
(三石 延雄)

2) D 2号土壙 (第91図)

本土壙は、調査区の西側き・くー1グリッド内に検出された。J 9号住居址の東よりの南壁を切って住居内に構築され、さらに、J 15号住居址の西壁に一部かかっている。

本土壙が検出されたJ 9号住居址、J 15号住居址付近は、かつての中沢川の氾濫原であり、遺構上面および遺構内には非常に礫が多く、遺構検出、掘り下げ等に困難をきわめた。しかし、本



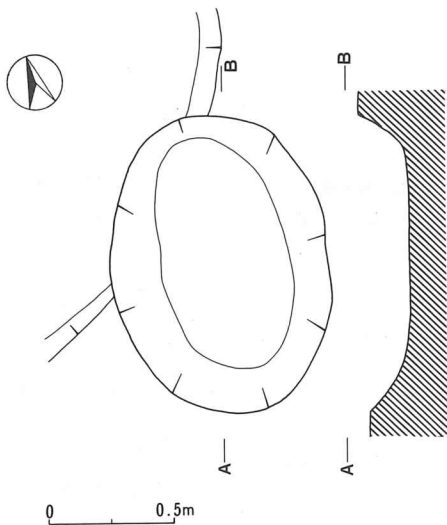
第91図 D2号土坑実測図 (1:30)

土坑は礫を取り除いたJ9号住居址の比較的なめらかな床面を掘り下げて構築されていた。

平面プランは、150×85cmの南壁中央が張り出した不整な楕円形を呈し、深さは約45cmを測る。

壁は、南西側が長く尾を引くようになだらかに立ち上り、西壁はやや垂直気味となる。

土坑内中央に、20×30cm、深さ10cmの小穴が存在している。覆土中には小さな礫が多量に含まれており、遺物は、覆土上部から篋描き沈線文を主体とした土器片が出土したが、J9号住居址の混入とも考えられ判然としない。



第92図 D3号土坑実測図 (1:30)

本土坑は、比較的規模の大きなもので、坑内からは打石斧片が1点出土した。墓坑であるとおもわれる。

井戸尻式期のJ15号住居址および曾利III式期のJ9号住居址を切って構築していることから、本土坑の時期はそれ以後になるであろう。

(森泉 定勝・三石 延雄)

3) D3号土坑 (第92図)

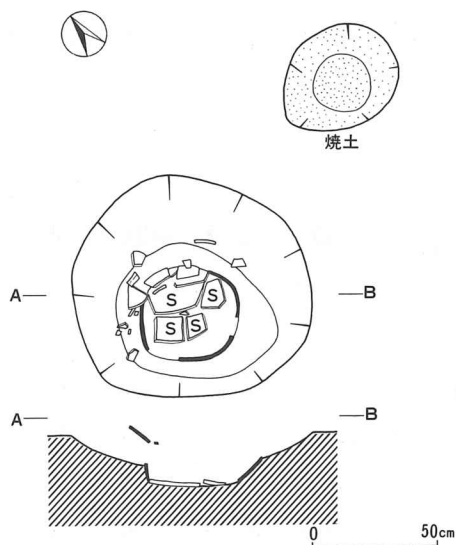
本土坑は、か-5グリッド内に検出され、J11号住居址の東壁を切って存在している。

平面プランは、120×85cmを測る楕円形を呈し、壁はなだらかに立上っている。深さは、17cmで、底面は平坦である。

覆土は、礫を多量に含んだ粘質土であり、覆土中より打石斧1点、篋描き沈線文の土器片が数片出土している。D1号土坑と同時期で性格も同様であると考えられる。

(三石 延雄)

4) D 4号土壙 (第93~95図)



第93図 D 4号土壙実測図 (1:30)

本土壙は、調査区の最南端、しー4グリッドより検出された。重複関係にあるJ 4号、J 5号住居址の中間に隣接する。

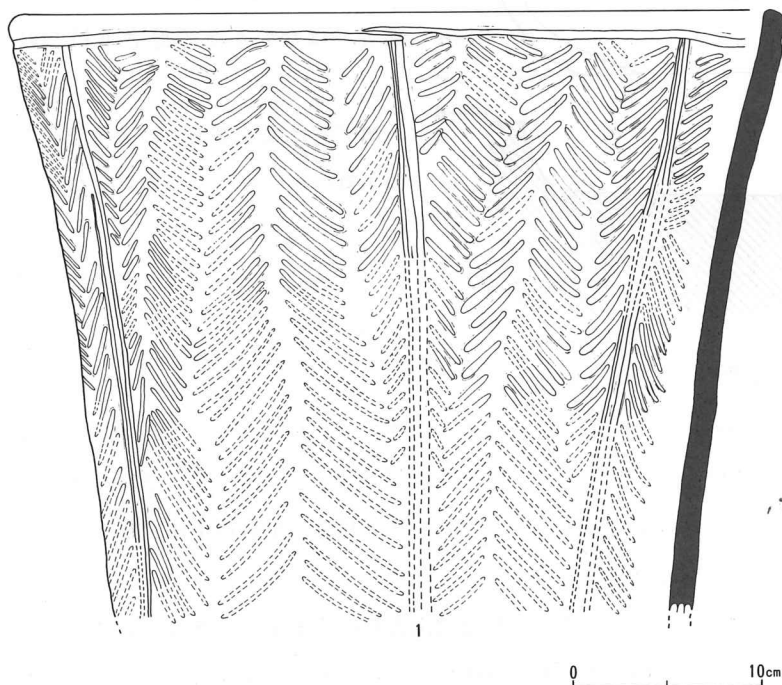
平面プランは、95×90cm、深さ20cmを測る不整な円形を呈する。壙内底面には、直径10cm~20cmの鉄平石(輝石安山岩)が4枚敷かれており、その周囲には第96図に図示した大形の桶形土器が正位の状態で埋設されていた。底部を欠損しており現存高は32cmを測る。口径は41cmで唯一の桶形土器である。

土壙内の掘り方は、埋甕の部分をほとんど間隔的な余裕を持ち得ないでキッチリと埋設し、壁高は10cm足らずと浅く、ゆるやかな立ち上がりをみせている。覆土も固く、人為的な埋土であるとおもわれる。

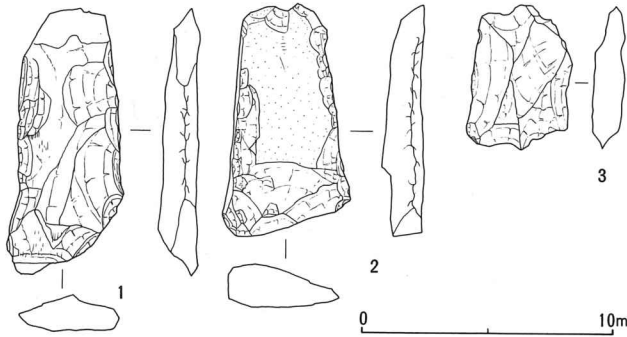
また、本土壙の北東側に焼土の塊りを有する直径45cmの落ちこみが存在した。本土壙との関係も充分考えられる。

出土遺物は、桶形土器の埋設と共に、打石斧3点、磨石1点が埋甕内から出土した。壙内底面の敷石施設から考えて、丁重に埋葬した墓壙であると判断される。

桶形土器は、口縁に沿って一条の凹線が引かれ、その直下から棒



第94図 D 4号土壙出土土器実測図 (1:4)



第95図 D4号出土石器実測図 (1:3)

状懸垂文と篋描き綾杉文とで文様構成されている。曾利IV式期の終末から曾利V式期にかけての土器であるとおもわれる。

(島田 恵子)

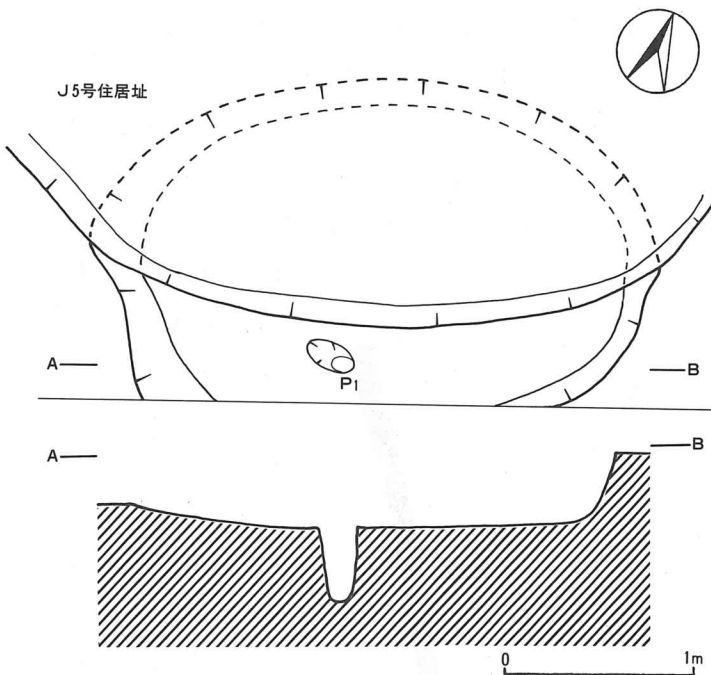
5) D5号土壙 (第98~100図)

本土壙は、さー4.5グリッド内にて検出された。J5号住居址の南東コーナーと調査区外の廃土の部分に両端を切られて存在する。

そのため、全容が明確に把握できず、出土遺物が多量な事とJ5号住居址のIV区(東南の部分)全体に散布しているという広範囲な面の出土から考慮して、あるいは住居址の一部ではないかとの懸念も持たれる。

第97図に本土壙出土の繊維含有の第1群の土器群を1類から4類に分類して図示した。

1~11が1類の土器群で花積下層式期に位置付けられる。1は、大きく外反した波状口縁を持ち、口縁は

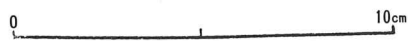
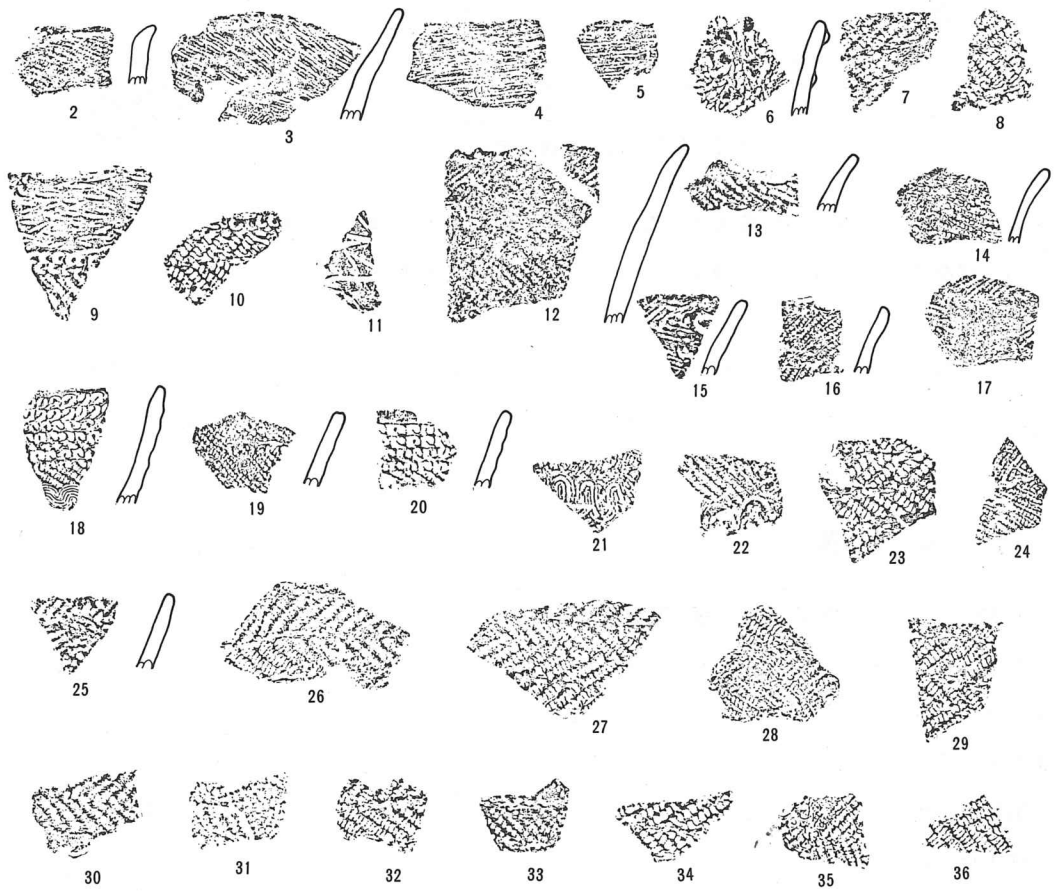
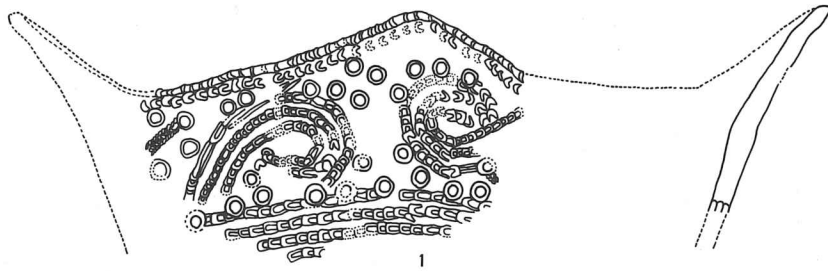


第96図 D5号土壙実測図 (1:40)

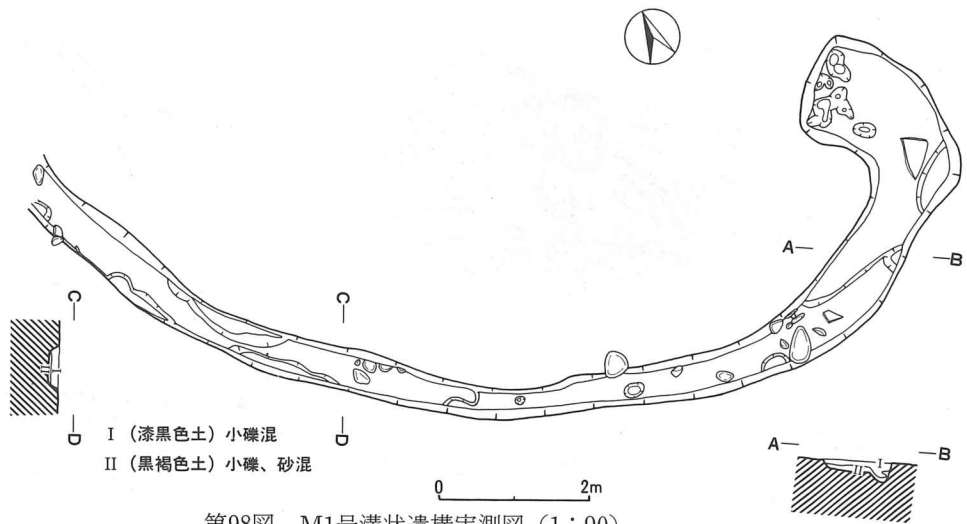
2条の押し引きによる爪形文を廻らせている。同じく押し引き状の「逆の字」文と円形竹管文、2本揃えの燃糸文により文様構成がなされている。また口縁部には赤色顔料で塗彩された部分が若干見受けられる。焼成固く黒褐色を呈し石英粒子を含む。2~11は、単軸絡条体回転文、ループ文、単節条文、刺切文、瘤状の貼り付文等が見られる。

12~17は2類の土器群で、花積下層式期と並行または関山式期に入るものである。12は外反した口縁で、口唇部は楕円形の刺突が連続している。全体にこの類は薄手で焼成も悪くろい。羽状縄文が多い。

18~24を3類とした。関山式期に比定される。多段のループ文に櫛状工具による波状のコンパ



第97图 D5号土壤出土土器实测图及拓影 (1:4)



第98図 M1号溝状遺構実測図 (1:90)

ス文が見られる。特に18は焼成固くなめらかな器膚である。ほとんどが茶褐色を呈する。

25~36を4類に区分した。縄文を主体とした土器群で時期区分は明確にでき得ない。器肉が厚く焼成も固い。

以上がD5号土壌より出土した前期の繊維含有の土器群である。この他に、尖底の部位にあたる破片が5個出土している。本址は、花積下層式末期~関山式期に比定されると考えられる。

(島田 恵子)

3 溝状遺構

1) M1号溝状遺構実測図 (第100図)

本遺構は、調査区西北側のい・う-1・2・3グリッド内に検出された。巾は、50cm~140cmで、深さは、20~22cmを測る。西側の道路脇水路近くより、ほぼ半円形を描き、い-3グリッド内で北西側に曲りながらやや広がった状態で消えていた。

遺物は、西側道路脇の最先端に、格子叩目を有す大甕片が散乱していた。また、覆土中からは、石鏃1点、打石斧1点の出土があり、礫の混入もみられた。

本遺構は、最後の消えた状態等からみて、人為的な遺構ではなく、道路脇の水路、あるいは中沢川の氾濫等の、自然発生によって生じた所産であると考えられる。当初のプラン確認時より明確にあらわれていた土層の色調は漆黒色土であって、本遺構の年代よりずっと新しくなるとおもわれる。

(三石 延雄)

第1表 中村遺跡石器一覧表

挿図番号	出土地点	種別	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	欠損状態	備考
-1	J-1	加工痕のある石器	黒曜石	2.8	3.0	0.9	7.7		
-2		ピエス・エスキーユ	〃	1.4	1.3	0.3	0.7		
-3		石 鍬	〃	(0.9)	(0.6)	0.2	0.1	先端のみ	
-4		〃	〃	(1.5)	(1.4)	0.3	0.7	両脚欠	無茎
-5		横刃形石器	粘板岩	4.9	5.1	1.2	31.0	完	
-6		打製石斧	〃	(7.7)	4.1	1.1	45.9	基部欠	斜刃
-7		〃	玄武岩	(16.7)	6.8	1.5	247.2	基部・刃部欠	短冊型 腹部、背部に自然面残
-8		〃	〃	13.2	5.3	2.6	209.6		短冊型 円刃 〃
-9		〃	〃	(10.4)	5.9	2.1	147.2	基部欠	短冊型
-10		〃	〃	(8.0)	5.0	1.7	97.5	刃部欠	
-11		〃	〃	(5.0)	5.2	1.2	43.4	〃	風化著しい
12-1	J-2	石 鍬	黒曜石	(2.0)	(1.2)	0.4	0.6	先端・両脚欠	無茎
2		〃	〃	2.0	(1.2)	0.4	0.8	両脚欠	
3		〃	チャート	(2.5)	1.7	0.4	1.4	先端欠	鋸歯状の剝離 エグリ部深い
4		加工痕のある石器	黒曜石	1.8	2.4	0.8	2.5		
-1	J-3	石 鍬	〃	2.2	1.3	0.3	0.5	完	エグリ部深い
2		〃	〃	(1.8)	1.6	0.4	1.1	先端欠	エグリ部深い
3		〃	〃	1.3	1.4	0.3	0.3	完	〃
4		〃	〃	(1.9)	(1.5)	0.2	0.6	先端・片脚欠	
5		〃	〃	1.8	(1.4)	0.3	0.6	片脚欠	エグリ部深い
6		〃	〃	(1.8)	(1.4)	0.3	0.6	先端片脚欠	
7		〃	チャート	(1.7)	1.1	0.3	0.4	先端欠	エグリ深い
8		〃	黒曜石	(1.5)	(1.3)	0.2	0.4	先端片脚欠	
9		加工痕のある石器	〃	1.8	2.0	0.8	1.8		
10		石 錘	〃	(3.0)	1.9	1.3	4.3	錘部欠	掘り部をもつ
11		加工痕のある石器	〃	2.5	2.5	1.0	5.7		
12		縦形の石匙	チャート	(5.3)	2.8	0.6	8.0	先端欠	
13		打製石斧	玄武岩	(14.1)	5.7	1.6	171.2	基部・刃部欠	短冊型 腹部、背部に自然面残 両側面磨耗著
14		〃	粘板岩	12.9	5.3	1.9	144.5	完	短冊型、斜刃
15		〃	〃	(8.8)	5.3	1.8	97.7	基部・刃部欠	
16		定角式磨製石斧	閃緑岩	10.0	4.6	2.1	165.2		刃部が欠損し、再加工されて、 斜刃状になる、両刃
17		小型定角式磨製石斧	硬砂岩	(6.8)	3.1	1.0	30.5	刃部欠	刃部時における剝離著しい
23-1	J-4	石 鍬	黒曜石	(1.7)	(1.3)	0.2	0.3	先端・片脚欠	エグリ部深い
2		〃	〃	(1.7)	(1.8)	0.4	0.5	〃	エグリ部浅い
3		〃	〃	(2.2)	(1.1)	0.6	1.3	〃	
4		加工痕のある石器	〃	2.0	2.4	0.7	3.4		
5		〃	〃	1.8	1.2	0.5	1.2		
6		打製石斧	〃	7.9	3.8	1.3	72.3		刃部磨耗
7		〃	チャート	(5.9)	5.7	1.4	27.5	先端欠	エグリ部浅い
8		横刃形石器	黒曜石	(4.4)	(7.1)	0.9	24.9	先端・片脚欠	
9		〃	〃	4.3	8.2	0.9	49.5		

挿図番号	出土地点	種別	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	欠損状態	備考
23-10	J-4	磨製石斧		7.3	5.2	2.9	217.3	基部欠	
11		凹石	花崗岩	10.2	7.5	3.9	474.8		両側面擦痕あり
27-1	J-5	石鏃	黒曜石	2.8	(1.4)	0.5	1.1	片脚欠	
2		〃	〃	2.1	1.4	0.3	0.7	完	
3		〃	〃	(1.3)	1.6	0.2	0.3	先端欠	
4		〃		1.8	1.2	0.4	0.7	完	
5		〃	黒曜石	2.1	(1.3)	0.4	0.9	片脚欠	
6		〃	〃	1.5	1.0	0.3	0.3	完	
7		〃	〃	1.7	1.3	0.4	0.5	〃	
8		〃	〃	(1.8)	(1.2)	0.3	0.6	先端・片脚欠	
9		〃	〃	(1.2)	(0.8)	0.3	0.2	〃	
10		〃	〃	1.5	1.5	0.3	0.5	完	
11		〃	〃	1.7	1.2	0.3	0.4	〃	
12		〃	〃	1.9	(1.1)	0.4	0.7	片脚欠	
13		〃	〃	1.9	1.2	0.2	0.5	完	
14		〃	〃	2.2	(1.4)	0.4	0.8	片脚欠	
15		〃	〃	2.2	1.3	0.5	0.9	完	
16		〃	〃	1.9	1.6	0.3	0.7	〃	
17		〃	〃	2.3	1.8	0.5	1.3	〃	
18		〃	〃	(1.7)	1.8	0.4	1.2	先端欠	
19			〃	1.1	2.2	0.2	0.6		
20			〃	3.5	1.2	0.6	1.9		
21			〃	2.9	2.6	1.4	9.2	完	
22		石鏃	〃	3.5	2.0	0.7	2.6	〃	
23			〃	1.6	1.6	0.4	0.9		
24		ピエス・エスキーユ	〃	2.0	1.1	0.8	1.4		
25			〃	2.1	4.5	1.1	6.9		
26			〃	2.5	1.7	0.4	0.7		
27			〃	3.2	5.5	1.1	20.7		
28			〃	3.0	4.7	1.7	17.3		
28-1	J-5	打製石斧		(11.0)	5.4	2.0	146.2	刃部欠	
2		〃	砂岩	(11.4)	5.4	2.0	148.2	基部欠	先端やや磨耗
3		打製石斧未成品	〃	(9.7)	5.8	2.2	173.1	刃部欠	
4		〃	粘板岩	(8.2)	5.9	2.3	111.9	基部欠	風化著しい
5		〃	〃	10.6	4.1	1.5	83.3	完	先端磨耗著しい
6		〃	砂岩	(6.6)	4.0	1.2	44.5	刃部・基部欠	
7		横刃型石器	〃	7.0	5.6	0.9	37.6		
8		打製石斧未成品	〃	8.2	5.6	2.0	125.3		表裏に礫面を大きく残す
9		横刃型石器	〃	6.2	7.5	1.7	90.6		両面加工
10		凹石	玄武岩	11.2	6.9	3.6	577.3		擦痕有り
11		磨石	安山岩	11.0	7.4	4.2	582.8		

挿図番号	出土地点	種別	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	欠損状態	備考
12	J-5			10.3	8.3	5.9	523.9		
35-1	J-6	石鏃	黒曜石	2.8	1.7	0.4	1.3	片脚欠	
2		〃	〃	2.0	1.6	0.5	1.1	完	
3		ピエス・エスキーユ	〃	2.2	1.7	0.8	2.7		
4		〃	〃	2.8	1.8	1.1	4.7		
5		磨製石斧	蛇紋岩	(6.4)	5.0	2.6	128.2	基部欠	先端刃こぼれ有り
6		打製石斧	砂岩	(7.5)	4.8	1.6	65.9	〃	先端やや磨耗
36-1	J-7	ピエス・エスキーユ	黒曜石	3.2	1.0	0.7	2.2		
2		打製石斧	砂岩	13.3	5.7	1.7	196.5	完	先端やや磨耗
3		〃	〃	14.5	5.8	2.3	168.4	基部欠	両側縁やや磨耗
4		〃	〃	(9.8)	6.2	1.8	116.5	刃部・基部欠	加工周縁のみ
5		〃	〃	(7.2)	5.5	1.5	79.9	〃	
6		〃	硬砂岩	(7.5)	4.9	1.1	46.2	刃部欠	
7		〃		(5.4)	5.3	1.0		刃部・基部欠	
8		横刃型石器	粘板岩	5.8	6.6	0.7	24.5		貝殻状の剥片の末端にエッジを設ける
40-1	J-8	石鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.4	0.6	完	
2		石鏃未成品	〃	2.0	1.4	0.7	1.5		
3		使用痕のある剥片	砂岩	9.6	3.5	1.1	25.4		
4		打製石斧	〃	8.0	6.4	2.0	103.3		
5		〃	〃	(5.4)	5.4	1.0	44.2	先端部のみ	表裏とも磨耗著しい
6		使用痕のある剥片	〃	7.9	4.4	1.1	44.5		
7		スクレイパー	玄武岩	5.1	5.8	1.7	51.1		両面加工
8		横刃形石器	硬砂岩	6.7	8.1	1.5	100.2		背面に円礫面をとどめる
9		凹石		9.0	7.6	5.2	404.4		磨痕はあまり顕著でない
45-1	J-9	打製石斧	粘板岩	10.5	4.7	1.5	99.4	完	先端やや磨耗
-2		〃		9.7	4.2	1.5	83.3	〃	両側縁に着板のためえぐりあり
-3		ホルンフェルス		(5.4)	5.0	2.9	79.2	刃部・基部欠	
-4		敲石	砂岩	(11.1)	6.7	4.5	520.3	基部欠	
55-1	J-10 No105	打製石斧	玄武岩	27.5	11.0	2.3	890.85	完型	短冊型、斜刃
2	覆土内	〃	玄武岩	19.9	6.8	3.0	394.4	完型	短冊型、斜刃 基部と刃部の切断面を持つ
3	〃	〃	粘板岩	9.9	5.35	1.5	101.0	完型	短冊型(胴膨)、 斜刃状を呈する、円刃
4	炉内	〃	粘板岩	6.1	4.3	1.4	57.1	基部欠損	短冊型、斜刃
5	No.15	〃	粘板岩	10.8	5.2	1.7	115.6	基部部欠損	短冊型、(先端部が突出する) 斜刃
6	No.52	〃	粘板岩	12.0	5.2	1.85	132.7	完型	短冊型、円刃
56-7	pit-A	〃	粘板岩	10.5	4.3	1.4	77.8	基部部欠損	短冊型、円刃
8	No.5	〃	玄武岩	10.6	4.6	1.7	88.4	完型	短冊型、斜刃 基部と刃部は切断面を持つ
9	No.12	〃	硬砂岩	10.7	4.0	1.5	69.8	完型	短冊型、直刃状
10	覆土内	〃	硬砂岩	9.7	5.2	1.2	73.9	完型	撥型、円刃
11	〃	〃	玄武岩	9.7	4.6	1.7	78.2	刃部欠損	短冊型
12	No.55	〃	粘板岩	6.7	10.7	2.1	162.2	基部欠損	分銅型と思われる。円刃両側 辺部に緊縛の為のエグリ
13	No.104	〃	粘板岩	16.0	5.2	2.2	207.2	完型	短冊型(先端部が突出する)、 斜刃

挿図番号	出土地点	種別	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	欠損状態	備考
56-14	J-10 No.01	"	玄武岩	12.8	5.5	1.8	150.6	完型	短冊型 未製品か? 刃部は自然面を利用(加工されない)
15	覆土内	"	粘板岩	9.4	4.0	1.6	68.1	基端部 刃部欠損	短冊型
16	"	"	玄武岩	4.8	3.9	1.1	23.1	刃部のみ残る	短冊型 斜刃
17	"	"	玄武岩	6.5	5.3	2.1	93.0	"	短冊型、斜刃
18	"	"	硬砂岩	10.3	4.3	1.4	93.5	完型	短冊型、風化による磨耗が著しい、直刃状である
57-19	"	"	硬砂岩	9.7	4.2	1.6	57.75	完型	短冊型、風化による磨耗が著しい
20	"	"	粘板岩	7.2	5.5	1.7	72.3	刃部のみ残る	短冊型、斜刃
21	No.52	"	粘板岩	5.9	6.4	25.5	99.3	"	短冊型、斜刃
22	覆土内	"	粘板岩	10.2	6.1	1.6	116.3	基部欠損	短冊型、斜刃
23	"	"	粘板岩	7.9	4.7	1.35	57.3	"	短冊型、斜刃
24	No.50	"	粘板岩	6.9	5.5	1.4	59.2	"	短冊型、直刃
25	No.49	"	硬砂岩	9.2	6.0	2.9	170.4	"	短冊型、斜刃
26	覆土内	"	玄武岩	8.7	4.4	1.4	86.7	刃部欠損	短冊型
27	"	"	粘板岩	7.9	3.8	1.5	57.2	"	短冊型
28	No.57	"	玄武岩	7.3	4.3	1.2	45.0	"	短冊型
29	No.8	"	玄武岩	7.7	4.8	1.4	70.2	"	短冊型
30	覆土内	"	粘板岩	7.7	4.8	1.0	43.1	"	短冊型、風化による磨耗が著しい
31	"	"	粘板岩	8.6	4.6	0.85	39.2	半分に剝離、刃部が欠損している	
32	"	"	粘板岩	4.5	7.9	0.6	26.1	半分に剝離し基部が欠損している	
33	"	"	玄武岩	5.8	6.7	1.5	106.0	基部 刃部欠損	短冊型
58-34	No.1	磨製石斧	輝緑緑灰岩	10.7	4.1	2.75	204.0	基部 刃部端部欠損	現存の刃部は2次的に造り出されたものと思われる。袈り部有り
35	No.100	磨製石斧	閃緑岩	9.9	5.9	3.1	355.0	刃部欠損	大型定角式石斧 両側辺部に着柄の為の袈り
36	覆土中	磨石	安山岩	4.7	2.6	2.0	28.1		全面に磨耗痕が認められる
37	No.24	磨製石斧	硬砂岩	13.1	5.6	3.1	404.3	刃部欠損	
38	No.5	凹石	安山岩	11.2	5.7	3.4	304.3	完型	全面磨石状に磨かれる
39	覆土中	磨石		9.2	10.0	3.5	515.3	定型	"
40	No.21	凹石	安山岩	11.3	8.8	3.8	525.8	1部欠損	両面凹石として使用される。全面磨石状に磨かれる。
59-41		磨石		19.5	4.2	3.1	407.8	完型	両端部は敲石状に剝離し、全面磨石状に磨かれる。
42	No.3	磨石	小花崗岩	9.5	7.1	6.8	652.0	1部欠損	
43	No.102	磨石		19.7	3.0	2.8	547.5	完型	
44	No.1	磨石	安山岩	10.4	10.3	5.1	860.6	1部欠損	
45	P-A	石鏃	黒曜石	1.8	1.5	0.2	0.4	完型	無茎、先端普通、逆刺し鈍り、袈り深い
46	覆土中	石鏃	黒曜石	1.8	1.6	0.4	0.5	先端部欠損	無茎 逆刺し鈍り袈り深い
47	"	石鏃	チャート	2.4	1.5	0.5	1.3	先端部欠損	無茎 逆刺し鈍い袈り深い
48	"	石鏃	黒曜石	2.1	1.7	0.5	1.0	両脚端欠損	無茎 先端鈍り 袈り深い
49	"	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.3	0.6	先端部 片脚部欠損	無茎、袈り浅い
50	"	石鏃	黒曜石	2.1	1.2	0.3	0.6	先端部 両脚部欠損	無茎
51	"	石鏃	チャート	2.25	1.3	0.45	1.2	先端部 両脚部欠損	無茎
52	"	石鏃	黒曜石	1.8	1.15	0.45	0.5	先端部 脚部欠損	無茎、袈り深い
53	"	石鏃	黒曜石	1.5	0.9	0.25	0.2	先端部 脚部欠損	無茎、袈り浅い
54	"	石錐	黒曜石	2.0	0.8	0.6	0.9	先端部欠損	棒状型を呈し断面台形である

挿図番号	出土地点	種別	石質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	欠損状態	備考
59-55	J-10覆土中	ピエス・エスキュー	黒曜石	1.8	1.3	1.3	1.9		
56	〃	ピエス・エスキュー	黒曜石	1.7	1.4	1.4	2.7		
57	〃	ピエス・エスキュー	黒曜石	1.7	1.1	0.4	0.8		
58	〃	使用痕の有る剝片	黒曜石	3.4	0.5	0.5	1.7		
59	〃	加工痕の有る石器	黒曜石	2.5	1.8	0.6	2.1		
60	〃	加工痕の有る石器	黒曜石	1.8	2.4	0.5	1.7		
61	〃	加工痕の有る石器	黒曜石	2.0	1.6	0.4	2.0		
その他	剝片、黒曜石72点、粘板岩、砂岩23点検出される。								
67-1	J-11		黒曜石	2.2	3.7	1.1	6.8		
2		石鏃	〃	2.4	1.4	0.4	1.1	完	
3		縦形石匙	砂岩	6.1	2.9	0.8	12.0	〃	
4		打製石斧	玄武岩	17.3	5.6	1.8	203.2	〃	器体のほぼ全面に調整が及ぶ
5		〃	砂岩	(10.7)	6.0	1.4	106.9	刃部・基部欠	周縁加工
6		〃	玄武岩	9.4	5.1	1.5	80.4	完	背面に礫面を留める、先端やや磨耗
71-1	J-12		黒曜石	1.5	1.9	0.5	1.7		
2		石鏃	〃	1.6	1.3	0.4	0.7	完	
3		打製石斧	砂岩	(8.9)	5.0	1.2	9.0	刃部・基部欠	
74-1	J-13	石鏃	黒曜石	2.4	1.7	0.4	1.0	完	
2		〃	〃	2.0	(1.2)	0.4	0.7	片脚欠	
3		打製石斧	玄武岩	(4.0)	4.5	1.0	5.9	基部のみ	
84-1	J-15	石鏃	黒曜石	2.6	1.8	0.4	1.5	完	
2		〃	〃	(2.1)	(1.6)	0.4	1.4	先端片脚欠	
3		〃	〃	(1.8)	1.5	0.4	0.9	先端欠	
4		横刃型石器	硬砂岩	5.2	10.1	1.1	62.5	完	
5		打製石斧	砂岩	(9.9)	4.6	1.7	90.4	刃部欠	
90-1	D-1	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.5	0.9		
1	D-2	打製石斧		7.6	4.5	1.3	42.9		
1	D-3	〃	砂岩	8.4	5.1	1.2	73.9	基部のみ	基部端に磨耗痕が認められる
95-1	D-4	〃	粘板岩	10.5	4.0	1.4	87.6	刃部欠損	両側辺部が著しく磨耗する
2		〃	硬砂岩	9.2	3.9	1.7	88.3	刃部欠損	腹面基部、側辺部に自然面が残る
3		〃	砂岩	5.8	4.1	1.3	28.8	基部のみ	

V 総 括

第1節 遺 構

本遺跡は、千曲川左岸の佐久平中央部西端に位置し、山麓傾斜面と沖積地の交わる緩斜面の頂点に立置している。遺跡前方には、浅間山とその裾野に広がる、小諸市、御代田町、長土呂、岩村田、伴野等の地が一望のもとに開けている。この日当りの良いゆるやかな斜面に、縄文前期初頭から平安時代まで連続した時代の集落が営まれていたのである。

本調査は、大遺跡の一部分にメスを入れたのみであった。検出された遺構は、縄文時代前期の土壇1基、縄文中期中葉井戸尻式期の竪穴住居址1軒、縄文中期後葉曾利式期の竪穴住居址15軒、土壇4基、その他時期の新しい溝状遺構1を検出した。

先ず、住居址の形態および付随施設について概観してみたい。

井戸尻式期のJ15号住居址は、調査区中央の西側に1軒検出された。隅丸方形を呈す小形で直径390cmを測る。柱穴は5個、炉を囲むように規則性をもって配列している。炉は、円形の浅い石囲炉でやはり小形である。

曾利Ⅲ～Ⅴ期の住居址は、時間的差はあまりなく、互いに隣接、重複しながら密の濃い分布を示している。住居は、直径600cm前後を測り、不整形を呈する、J1号、J3号、J4号、J5号、J6号、J7号、J10号、J12号、J14号、J16号の10軒と、隅丸方形を呈する、J9号、J13号、J15号の3軒、および円形を呈し、400cm前後を測る、J2号、J8号、J11号の3軒に大別される。

先ず、小形のJ2号、J8号住居址は炉の施設がないことも共通している。しかし、同形のJ11号住居址は、地床炉を有し、埋甕、石組祭祀施設が存在する特殊な住居址である。施設の有無の違いはあるが、どちらにしてもこれ等の小形住居址は、曾利Ⅲ～Ⅳ式期の非日常的な住居かJ11号住のように祭祀を司どる人物が住んでいたと想定される特別な住居であったとみてよいであろう。J11号住の石組祭祀施設は、住居内の奥壁部に設けられ、石英斑岩の立石を立てて祭祀がおこなわれたのであろう。岩石中に含まれた石英はキラキラ光ってより神秘的な雰囲気をかもし出したであろう。石英斑岩は内山の谷に産する岩石である。また、埋甕も出入口部に埋設され、立石と埋甕施設がセットされている。この2つの組合せは、千曲川の最上流に存在する川上村大深山遺跡第36号住居址に1軒みられるが、あまり例のないセットである。曾利遺跡においてはこの組合せは全くみられないが、伊那谷に入ると数例見られる。箕輪町上の林遺跡10号住居址では、

埋甕4個に玉抱三叉文が彫刻された有頭石棒が出土している。

曾利Ⅰ～Ⅱ式期に確立して曾利Ⅲ～Ⅳ式期に隆盛する屋内祭式の場合、J11号住居址の石組祭祀施設であり、本遺跡の精神生活～生業の一端を語っているといえよう。

第2表 中村遺跡検出住居址一覧表 ()内推測値

図No.	遺構	平 面 プ ラ ン				炉	柱穴	時 期	備 考
		形 態	規 模						
			長軸	短軸	壁高				
5	J1号	(円形)	cm (620)	cm (600)	cm —	埋甕炉	6	曾利Ⅴ式期	敷石住居址
10	2	不整円形	370	335	3 10	—	7	曾利Ⅲ式期	
13	3	不整円形	590	540	12 22	方形 竪穴炉	11	〃	石蓋付の埋甕
19	4	円形	565	540	10	方形 竪穴炉	14	曾利Ⅳ式期	伏甕
24	5	不整円形	580	500	11	円形 竪穴炉	10	曾利Ⅲ式期	炉小形
29	6	円形	555	525	4 10	円形 竪穴炉	13	曾利Ⅲ式期	敷石住居址 埋甕正位
35	7	不整円形	600	570	9 16	石囲炉	9	曾利Ⅳ式期	
40	8	円形	400	400	18 22	—	14	〃	
44	9	隅丸方形	530	500	11 19	方形 石囲炉	9	曾利Ⅲ式期	
49	10	円形	650	610	20	埋甕炉	10	曾利Ⅱ式期	石組施設
60	11	円形	400	360	7 24	地床炉	4	曾利Ⅴ式期	屋内祭祀施設 埋甕逆位
67	12	(円形)	(600)	(600)	4 17	橢円形 竪穴炉	9	曾利Ⅲ式期	
72	13	隅丸方形	430	390	6 9	橢円形 竪穴炉	7	曾利Ⅳ式期	
75	14	(円形)	(600)	(600)	—	円形 竪穴炉	7	曾利Ⅴ式期	敷石住居址 埋甕正位
80	15	隅丸方形	390	390	7 20	円形 石囲炉	5	井戸尻式期	炉小形
85	16	(円形)	(600)	(560)	—	円形 石囲炉	2	Ⅲ 曾利Ⅰ式期 Ⅳ	炉小形

次に敷石住居址をみてみよう。敷石を配石した住居址は、J 1号、J 6号、J 14号住の3軒である。J 1号、J 14号住居址は共に曾利V式期に属し、敷石住居址が増加する時期に該当する。住居の規模、柱穴の配列も同一である。しかし、炉の位置と構造に差異がある。J 1号住は埋甕炉で住居址中央よりやや西南に寄るが、J 14号住は北西コーナーに位置し、円形の堅穴炉である。どちらも焼土が厚く堆積して多用されており、日常的な住居であったと思われる。この同時期の住居址が示しているように、本遺跡の炉の位置は一定していないのである。

また、敷石に使用された石は、佐久地方に特に多い板状の鉄平石（輝石安山岩）である。J 1号、J 14号住の敷石は板状節離された千曲川東岸の平尾山産出の鉄平石であるが、J 6号住の敷石は、石質は同質であるが板状節離がきれいになされていない厚味のある平石である。敷石の配石は、ほぼ地山に近い褐色土層中になされていた。他の住居址の床面もローム層中というより、ローム層直上に設けられていたことから、他の住居址と何の差異も認められない。敷石の残存は少なく、最大のものはJ 1号住の70×30cmであるが、ほとんど耕作時に取り去られたものとおもわれる。

埋甕施設は、J 3号、J 6号、J 11号、J 14号住に存在した。J 3号住は、立科山系産出の安山岩を素材とする平な石で蓋をした状態で埋設されていた。胴中央より下部を欠失する。J 6号住、J 14号住の埋甕は完形品を正位の状態で埋設したものである。また、J 11号住の埋甕は、胴下部～底部を欠失し、逆位に埋設されていた。J 3号住の埋甕と共に波状口縁を有し、唐草文系の盛華ともいべき文様構成である。両者とも同時期の曾利III式期にあたる。

第IV章で埋甕の埋設状態を図を通して詳細に明記してあるので、ここでは結論を述べることにしよう。J 6号、J 14号住の敷石住居址に埋設されている埋甕から、埋設の掘り下げ状態等を加味して判断すると、明らかに住居址構築時に埋設されている。当初より設計されていたことが理解される。また、埋甕に使用されている土器は、煤とお焦げの付着で明らかのように、日常生活に頻繁に使用されていた煮炊用土器が転用されている。煮炊用土器の埋甕への転用は、中南信地区においては一般的である。本遺跡の土器もJ 6号、J 14号の土器が最も顕著であり、J 3号住の波状口縁を有す深鉢もその可能性がある。J 11号住の華やかな文様の深鉢は明るい茶褐色を呈し、煤やお焦げ痕が認められない。やはり、屋内祭祀施設を有す住居址のために特別な土器が使われたのであろうか。J 11号住のみが逆位であることも何等かの意味があるとおもわれる。

J 4号住居址には、伏甕が存在した。同様な出土状態で文様構成も酷似するものが、川上村大深山遺跡第23号住居址から出土している。胴中央から底部が切除されていて、一般的な伏甕のあり方を示している。このような伏甕は、廃屋墓葬にともなう甕被り葬設として、武藤雄六、山本暉久氏が有力な論拠を提示している。本住居址の場合、礫の流入による住居址の破壊、J 5号住居址との重複によって十分な検討が加えられないことから速断はできない。今後の課題として

とどめておきたい。

炉の形態は、埋甕炉2（J 1号、J 10号）、竪穴炉7（J 3号、J 4号、J 5号、J 6号、J 12号、J 13号、J 14号）、石囲炉4（J 7号、J 9号、J 15号、J 16号）、地床炉1（J 11号）、に区分される。

全体に本遺跡の炉は、小形で貧弱である。該期に属す川上村大深山遺跡の炉は、そのほとんどが頑丈な石で組れており竪穴炉は存在しない。望月町下吹上遺跡も同様である。該期の竪穴炉は、唐草文系土器の発達した伊那谷、諏訪盆地に多い。辰野町樋口内城遺跡、箕輪町上の林遺跡に多数みられる。床面をかなり大規模に掘り込んであり、曾利IV～V式期に入ると竪穴炉の中間に簡単な石囲いが築かれる竪穴式石囲炉へと推移してゆく。だが、本遺跡の竪穴炉および石囲炉は依然として小形である。これが大きな特徴でもあろう。

J 1号、J 10号住の埋甕炉に埋設された土器は、無文粗製土器で埋甕炉への使用のために作られた土器であろうとおもわれる。

また、竪穴炉の多い、伊那谷、諏訪盆地との共通性は、本遺跡の土器の伝播経路に関係しているものと考えられよう。

土壙は5基検出された。D 1号、D 3号、D 4号は規模的には大差はないが、とりわけD 4号は壙内に敷石が配され、その外側に桶形の大深鉢が埋設されていた。また、D 2号は、長径150cm 深さ45cmを測り、比較的大形である。これらの土壙は、規模、様相等から墓壙であるとおもわれる。D 1号～D 4号までそれぞれ打石製石斧が出土している。D 4号は出土土器から曾利V式期

と決定した。D 1号～D 3号までは時期決定をする出土遺物等の所見に欠るが、住居址を切ってそれぞれ構築されていることから判断して、やはり同時期に位置付けられよう。

D 5号土壙は、調査区の最東南端に位置していたために完掘に至らなかった。西壁をJ 5号住居址に切られており、J

第3表 中村遺跡検出土壙一覧表

図No.	遺構	平 面 プ ラ ン				備 考
		形 態	規 模			
			短径	長径	深さ	
89	D 1号	不整楕円形	cm 85	cm 98	cm 28	打斧1点出土
91	D 2号	〃	85	150	45	打斧1点出土
92	D 3号	楕 円 形	85	120	17	打斧1点出土
93	D 4号	不 整 円 形	90	95	20	桶形大深鉢埋設 底面に敷石、打斧3点 曾利V式期、磨石1点
96	D 5号	—	(100)	(140)	(10)	花積下層式末期～ 閉山式期

5号住居址の掘り下げ時にもこの重複部分から、縄文前期の繊維含有土器が多数出土した。小さな土壌であるにもかかわらず、花積下層式期～関山式期にかけての土器片が集中し、あるいは住居址が調査区外にのびていた可能性も考えられる。しかし、掘り下げ部分が狭く、時間的な制約等から十分な精査ができなかったことは非常に残念であった。

第2節 遺物

出土遺物については、住居址毎に図示して説明を加えてあるので重複を避ける意味で、ここでは問題点の提起にとどめておきたい。

縄文前期初頭～前葉にかけての繊維含有の土器片は、住居址掘り下げの過程において、少量ではあるがほとんどの住居址覆土上部から出土した。調査区全域へ散布している模様である。D5号土壌の検出等でも明らかなように、かってこの地にも該期の集落が営まれていたものとおもわれる。

中村遺跡近隣の縄文中期の遺跡発掘調査例は、南佐久郡川上村大深山遺跡、望月町下吹上、後沖遺跡、御代田町宮平遺跡、佐久市前山の後沢遺跡と僅か5例にすぎないが、佐久市の後沢遺跡は炉址のみの検出であった。

川上村より千曲川を北流した右岸台地に、八千穂村崎田原遺跡が、さらに下った左岸台地には佐久西小学校裏遺跡が存在し、佐久市に入ると志賀川が香坂川と合流して南へ折れて曲る舌状台地に和田上遺跡が存在する。これ等の遺跡は、八幡一郎先生が「南佐久郡の考古学的調査」の中で、遺物の種類、数量に豊む点に於ては本郡の双壁である。と記述しておられる。「中部高地縄文土器集成」を試みた、長崎元広氏は、川上村の大深山遺跡は、純粹に曾利式の遺跡であると指摘していられる。八千穂村崎田原遺跡においても同様なことがいえる。現実には、井戸尻遺跡第4号住居址出土の4つの相対する中空の人面把手をもつ甕形土器の装飾把手と全く同一の把手部分が3個出土しており、八ッ岳山麓からの文化の伝播は直接的である。本遺跡も曾利式編年によって時期区分した。

本遺跡から出土した土器の中では、唐草文系土器群の影響が著しい。前述した中部高地土器集成の中で長崎元広氏は、「埼玉県の山地部に唐草文甕形土器の類品があるというので、千曲川中流から上流のうちに唐草文系の進出地帯があると予測される。」と述べておられるが、本調査によってこの答を見出す資料が増加したといえよう。

唐草文系土器の特色は、樽形の大甕を中心に、胴部の全面に大柄渦巻文、その間隙を篋描沈線による綾杉文とその変形で充たす文様構成である。また、蓋受状の突起が内側の口唇部～口縁部にかけて貼付されている。本遺跡の土器は、多少の差はあれこのような文様を基本として構成さ

れているが、器形の面では樽形の大甕は存在しないし、蓋受も貼付されていない。しかし、わずかにその影響を受けた小形の樽形土器がJ 3号住居址から出土している。また、D 4号土壇出土の大甕は、樽形というよりはむしろ桶形である。

J 10号住居址出土の第52図1は、隆線の腕骨H状懸垂文が施され、地文は篋描綾杉文が、口縁は山形突起およびその間を把手2個が配されており、隆線の面にも連続刺突文が施されている。また、2は隆線の雑なH状懸垂文と半割竹管と篋による強い平行沈線文が地文である。このように唐草文系土器と曾利式土器の両者にみられる腕骨状のH状懸垂文、篋描沈線等、近似した面も多分にある。

さらに、本遺跡の土器はJ 3号、J 11号住居址の埋甕に代表されるように、伊那谷から南下して曾利式土器圏へ影響を与えた、唐草文系土器とは異なり、直接伊那谷から唐草文系の影響を受けていると考えられる。換言すれば、在来の曾利式土器の伝統と新たに加った唐草文系の土器とがうまくとけ合っているといえよう。そして、J 4号、J 7号住で提示したように、さらに、加曾利E式の影響も混在しているのである。立科山麓から茅野市への道、有賀峠から辰野町への道と伊那谷への交通路は、黒曜石を媒介として早くから開けていたものとおもわれる。

隣接する望月町下吹上遺跡とは類似点もあり、以上のような問題は時間的余裕と多くの資料を検討して、再度観察する必要がある今後の課題としたい。

石器は、各住居址から出土したものは別に、黒色土の包含層中から、打石斧の完形品が94点、石鏃が18点出土した。この他にも破片が相当あり、これらの打石斧を使用した生業の生産背景を解明する必要性と、これらの打石斧の形態と機能がそれぞれに分かれていることが一見して観察される。これ等の諸問題は別に稿をあらためたいと考えている。

本報告書では、J 10号住居址から出土した石器の一括資料が最も注目される。

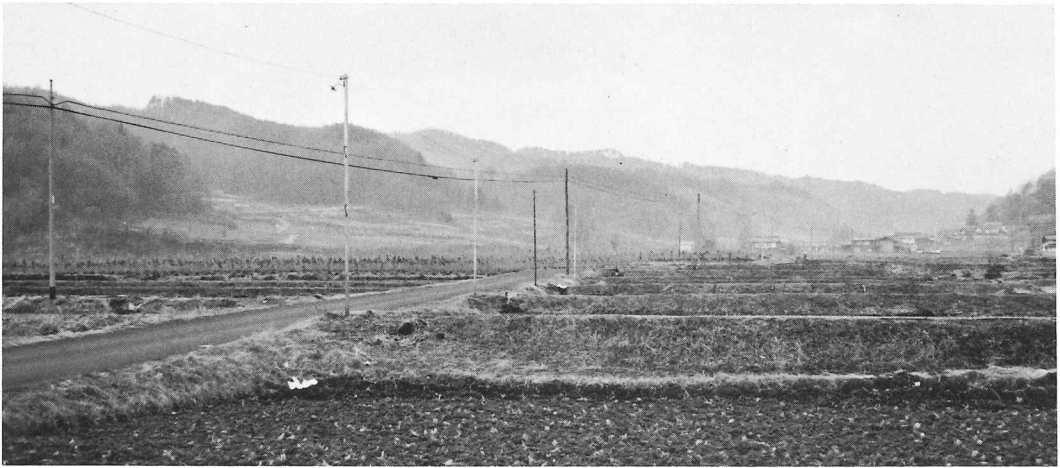
中村遺跡は、佐久市内では初見である縄文時代中期の集落址の調査であった。集落のほんの一端ではあったが、その構造が馬蹄形広場を中心に2単位～4単位に分かれていることが、全体図および埋甕の位置等から読みとれる。しかし、ほんの一端であることから十分な検討には至らない。

(林 幸彦・島田 恵子)

引用参考文献

- 1 『中央道報告書——茅野市・原村その3』 1976・1977
- 2 『 “ ——原村その4』 1977
- 3 『 “ ——上伊那郡辰野町その2』 1973
- 4 伊藤正和他 「橋原遺跡」 岡谷市教育委員会 1981
- 5 樋口昇一 「土器廃棄に関する一問題」 信濃24—12 1972
- 6 島田哲男 「唐草文土器の文化」 山麓考古10 1978
- 7 鈴木道之助 図録「石器の基礎知識III」 1981
- 8 千曲川水系古代文化研究所編 「編年」 1980
- 9 五十嵐幹雄他 「真行寺」 東部町教育委員会 1982
- 10 児玉卓文他 「六反田」 長門町教育委員会 1983
- 11 戸沢充則他 「新山遺跡」 東久留米市教育委員会 1981
- 12 永峰光一他 「縄文土器大成」 第2巻中期 1980
- 13 長崎元広 「石棒祭祀と集団構成」 どるめん8 1976
- 14 長崎元広 「中部地方の縄文時代集落」 考古学研究 23—4 1977
- 15 長崎元広 「縄文集落研究の系譜と展望」 駿台史学50 1979
- 16 長崎元広他 「中部高地縄文土器集成」 第1集 中部高地縄文土器集成グループ 1979
- 17 長崎元広他 「山梨・長野における縄文中期後半 “ “ 1980
の曾利式土器編年」
- 18 折井 敦 「八ヶ岳南麓における縄文中期の炉形態の変遷に関する一考察」長野県考古学会誌
1977
- 19 水野正好 「集落」 考古学ジャーナル 100 1974
- 20 水野正好 「埋甕祭式の復原」 信濃 30—4 1978
- 21 武藤雄六・小林公明 「曾利」 富士見町教育委員会 1978
- 22 武藤雄六 「長野県富士見町箆畑遺跡の調査」 考古学集刊 第4巻第1号
- 23 武藤雄六 「縄文農耕の素描」 山麓考古8号 1976
- 24 福島邦男 「下吹上」 望月町教育委員会 1978
- 25 福島邦男 「望月町下吹上遺跡の打製石斧」 千曲川水系古代文化研究所 1979
- 26 八幡一郎 「信濃大深山遺跡」 川上村教育委員会 1976
- 27 八幡一郎 「南佐久郡の考古学的調査」 1977
- 28 宮坂光昭 「縄文中期集落復元の基礎的検討」 信濃23—4 1971

- 29 山本暉久 「住居跡内に倒置された深鉢形土器について」 神奈川考古 1 1976
- 30 山梨県考古学協会編 「山梨の遺跡」 山梨日日新聞社 1983
- 31 桐原 健 「床面浮上土器の取扱いについて」 信濃28—8 1976
- 32 小林公明 「縄文中期八ヶ岳南麓における農具としての打製石器」 信濃29—4
- 33 丸山敞一郎他 「上の林遺跡」 箕輪町教育委員会 1981
- 34 佐久市教育委員会編 「佐久の古代を知ろう」 19



1 中村遺跡遠景（北方より）



2 中村遺跡全景（南方より）



3 中村遺跡全景（東方より）



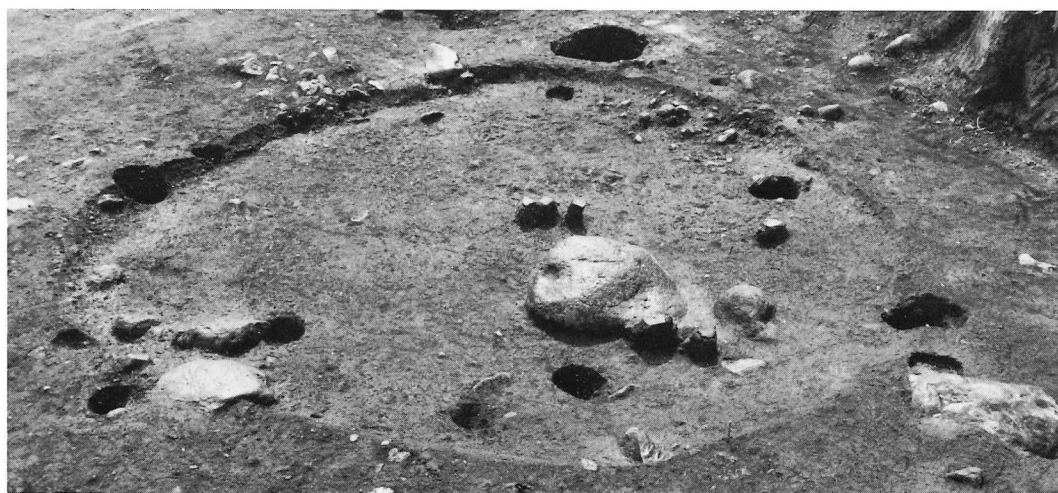
1 J1号住居址全景（南方より）



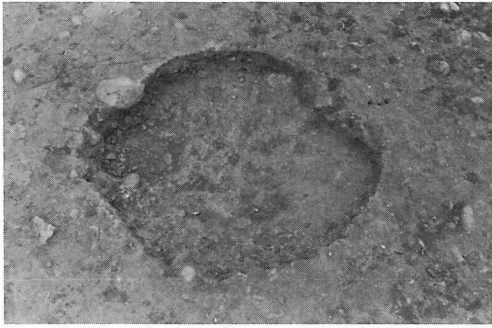
2 J1号住居址炉



3 J1号住居址敷石



4 J2号住居址全景（南方より）



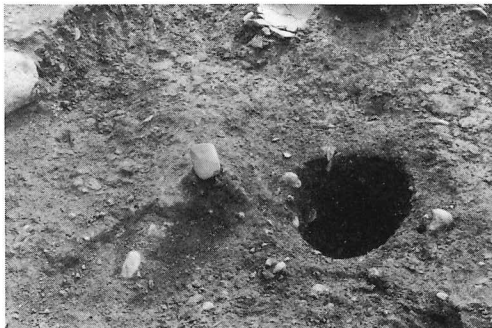
1 J3号住居址炉



2 J3号住居址埋甕



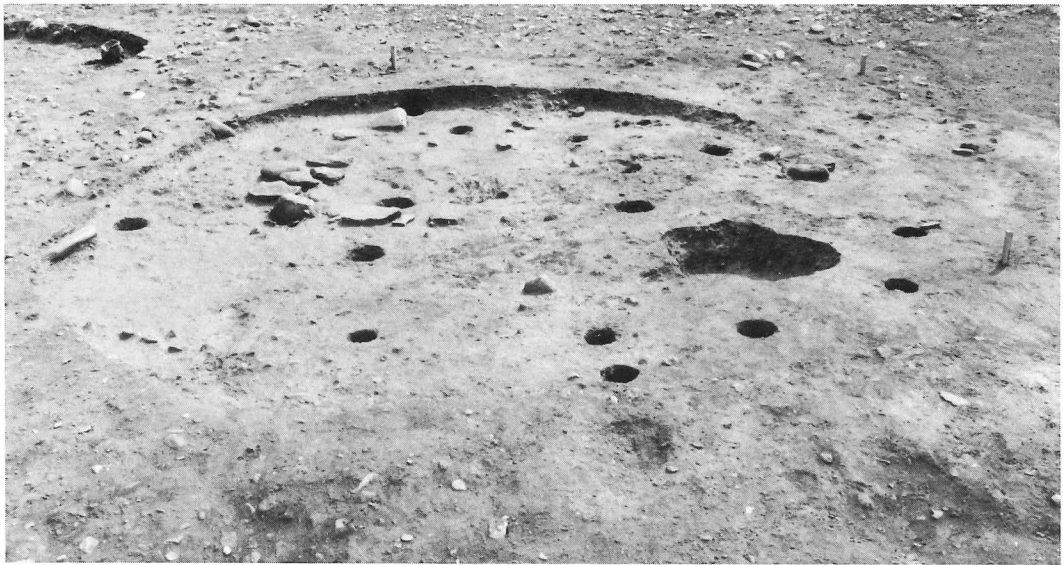
3 J4・5号住居址全景（東方より）



4 J4号住居址遺物出土状況



5 J4号住居址遺物出土状況



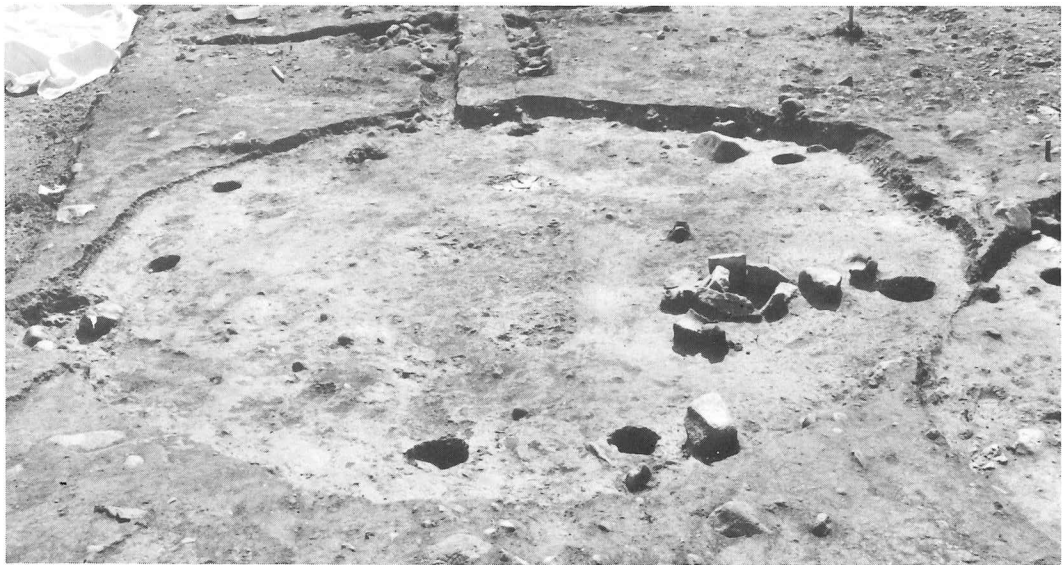
1 J6号住居址全景（北方より）



2 J6号住居址埋甕



3 J7号住居址炉



4 J7号住居址全景（北西より）



1 J8号住居址埋甕



2 J8号住居址遺物出土状況



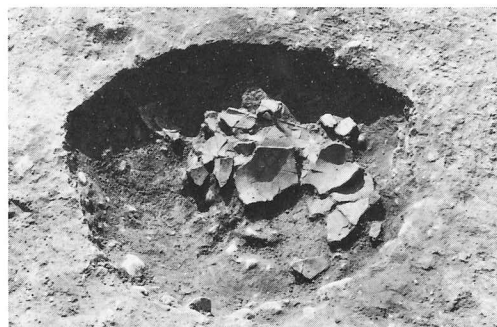
3 J8号住居址全景（西方より）



4 J9・15・16号住居址全景（東方より）



1 J 10号住居址遺物出土状況（北西より）



2 J 10住居址炉



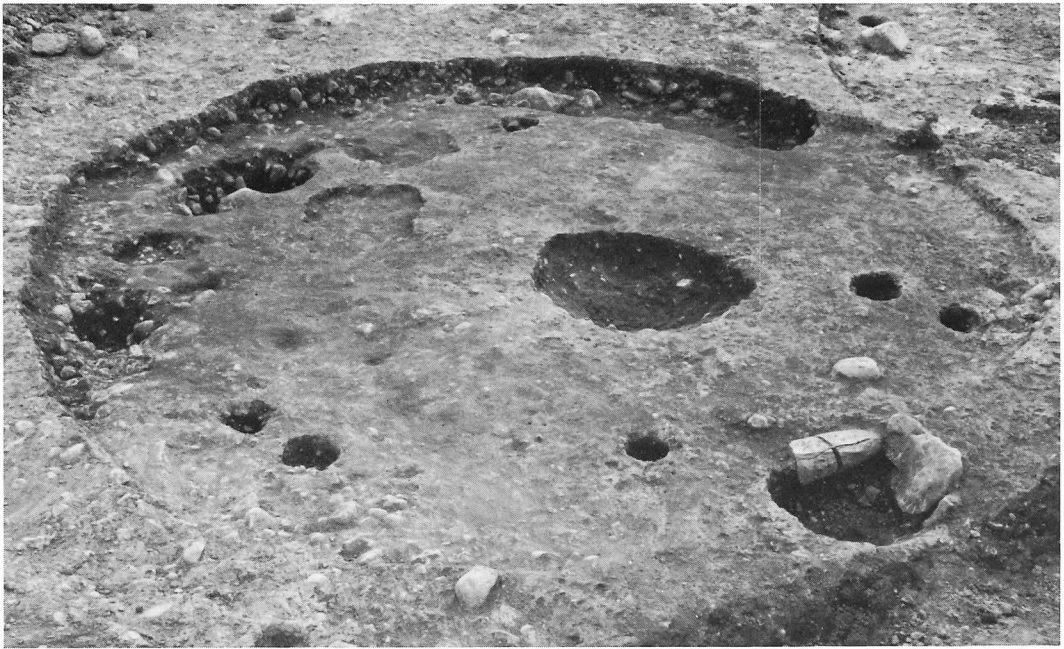
3 J 10号住居址



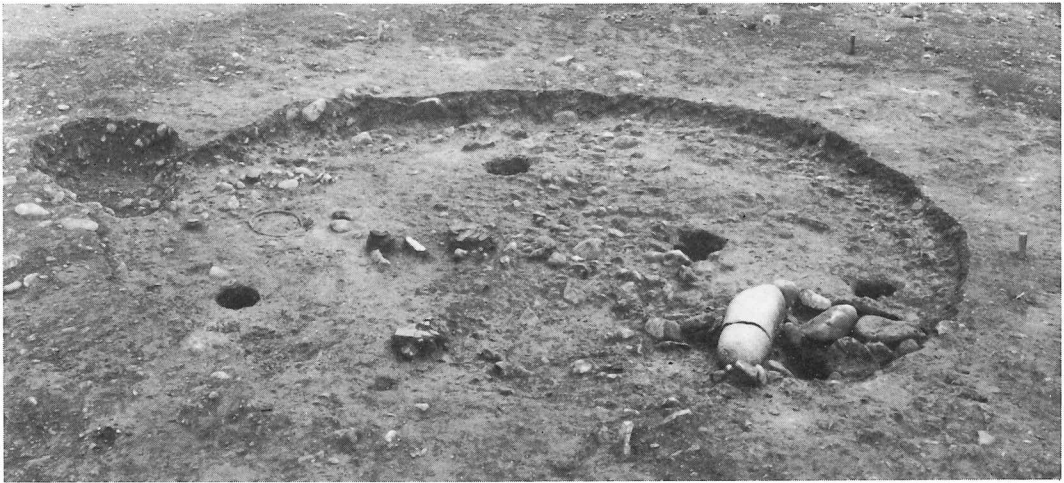
4 J 10号住居址遺物出土状況



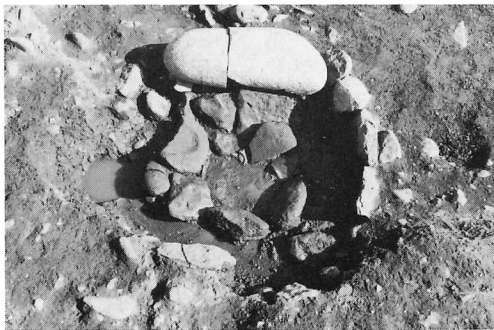
5 J 10号住居址遺物出土状況



1 J 10号住居址全景（東方より）



2 J 11号住居址全景（北東より）



3 J 11号住居址炉



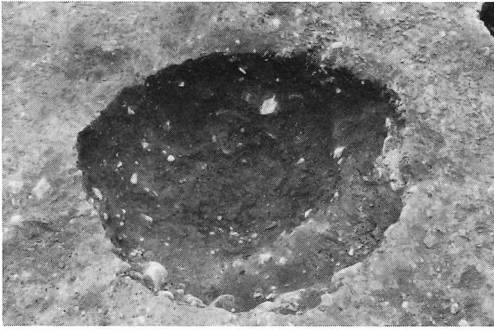
4 J 11号住居址埋甕



1 J 12・13号住居址全景（北方より）



2 J 14号住居址全景（南東より）



1 J 14号住居址炉



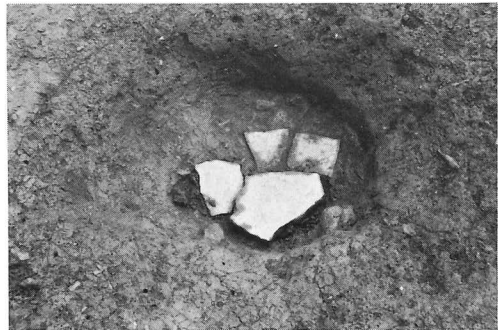
2 J 14号住居址埋甕



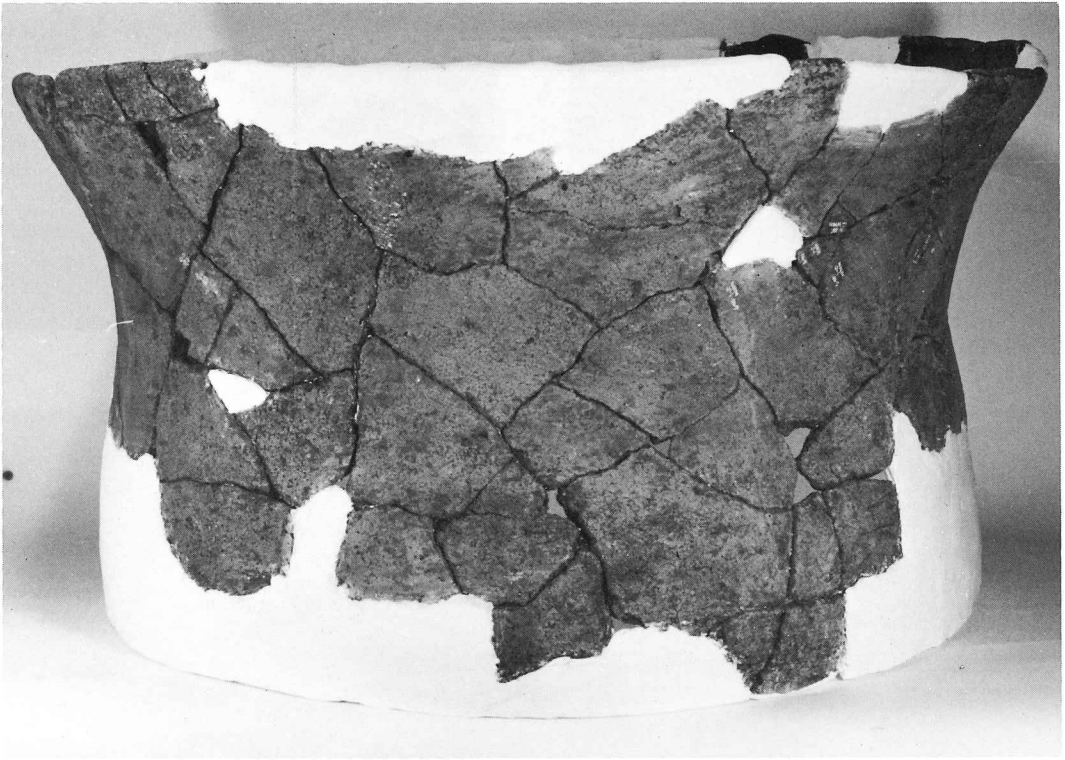
3 J 15号住居址全景（東方より）



4 D 4号土壙遺物出土状況



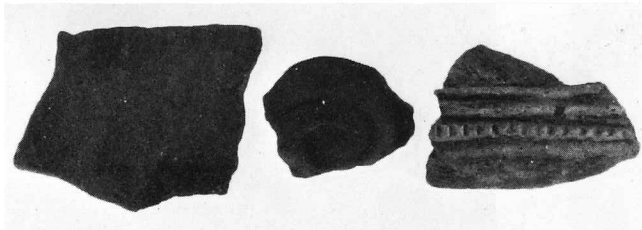
5 D 4号土壙



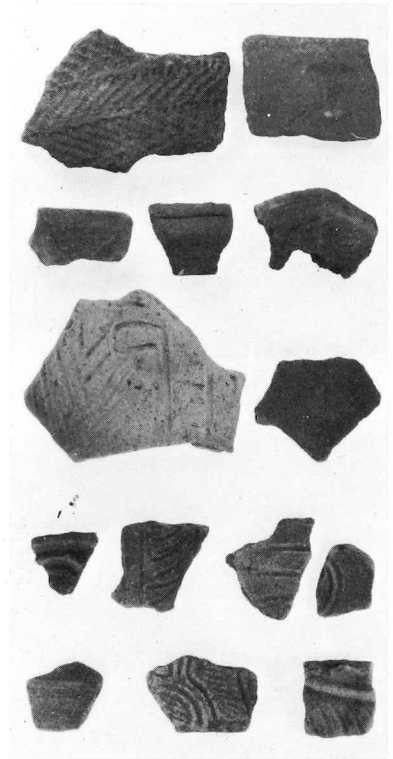
7-1



7-2



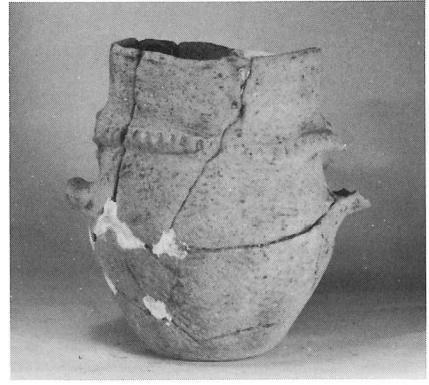
J2号住居址出土土器



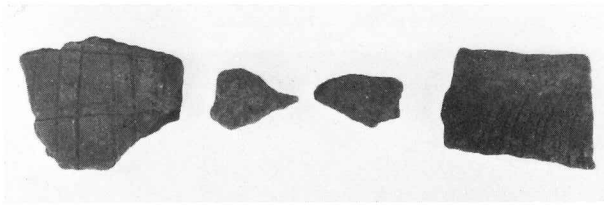
J1号住居址出土土器



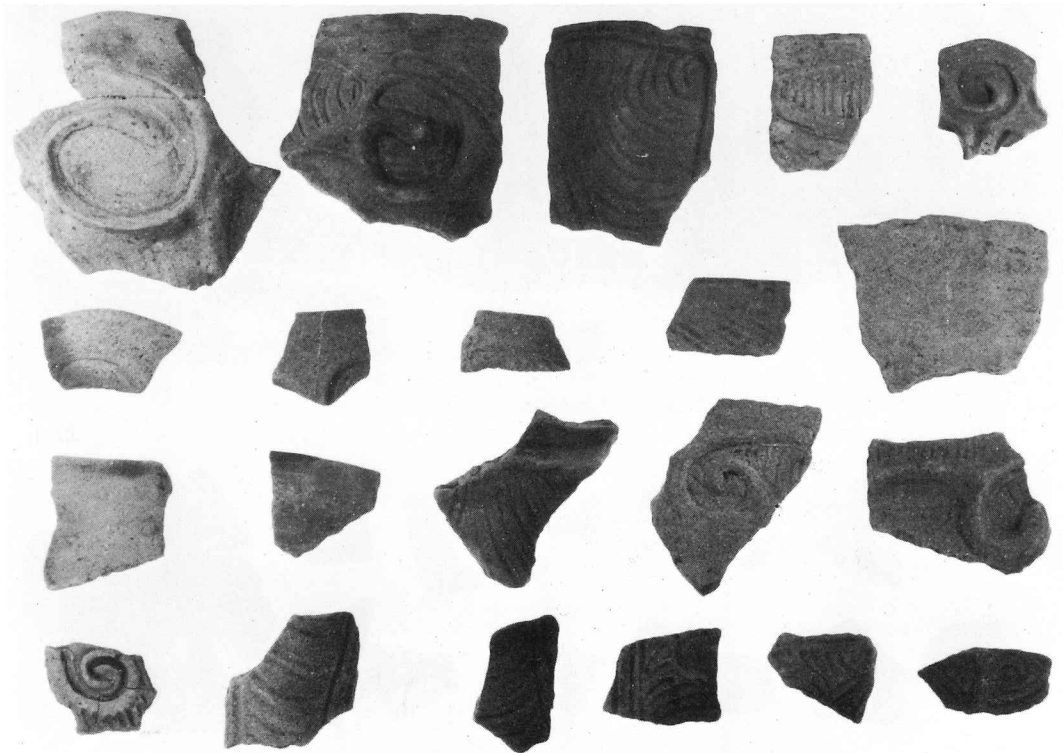
16-1



16-6



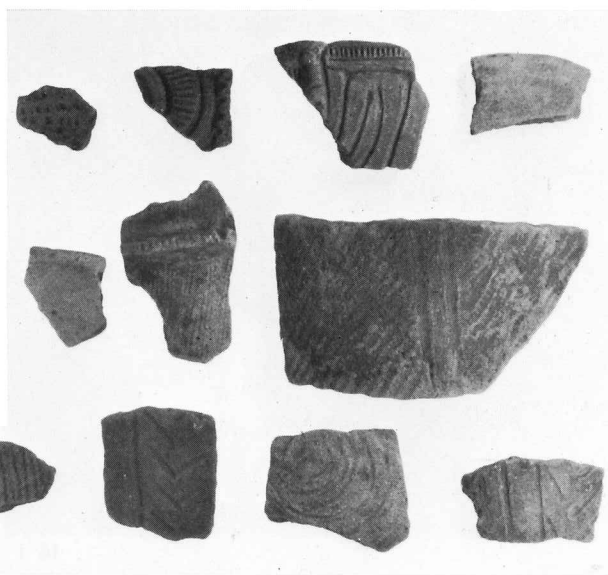
16-5



J 3 号住居址出土土器



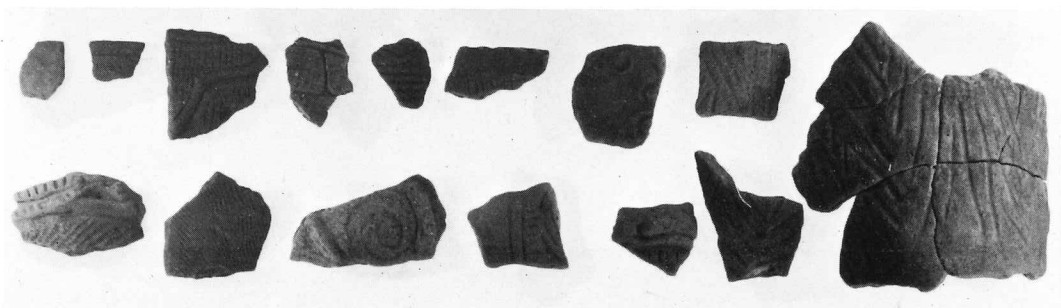
21-3



J 4 号住居址出土土器



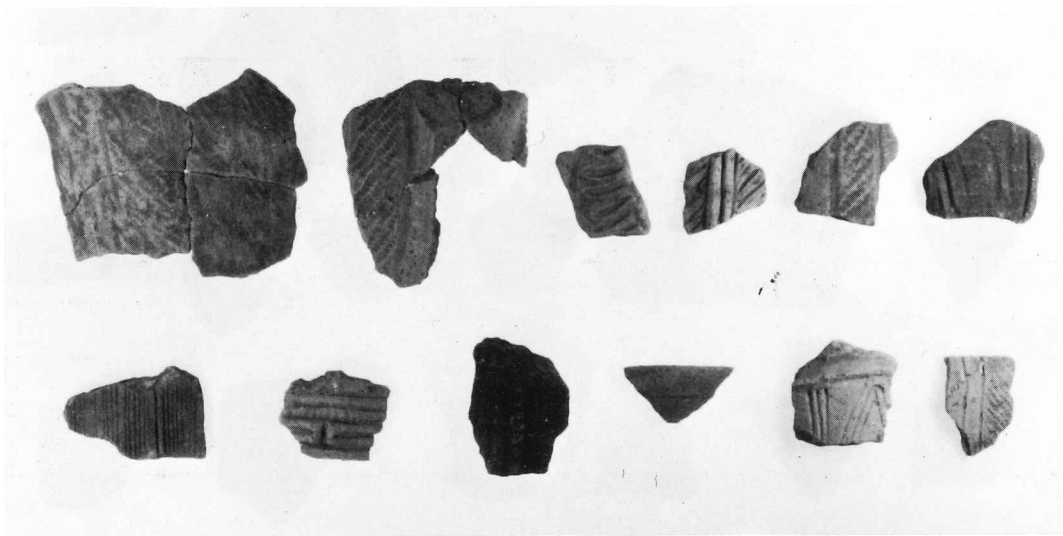
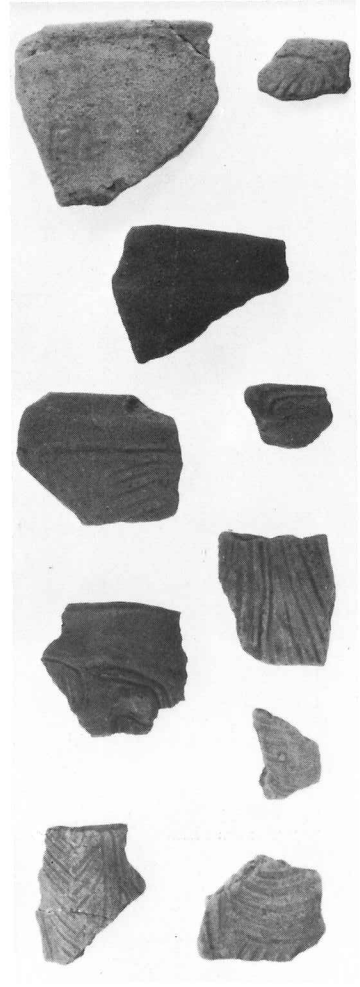
21-1



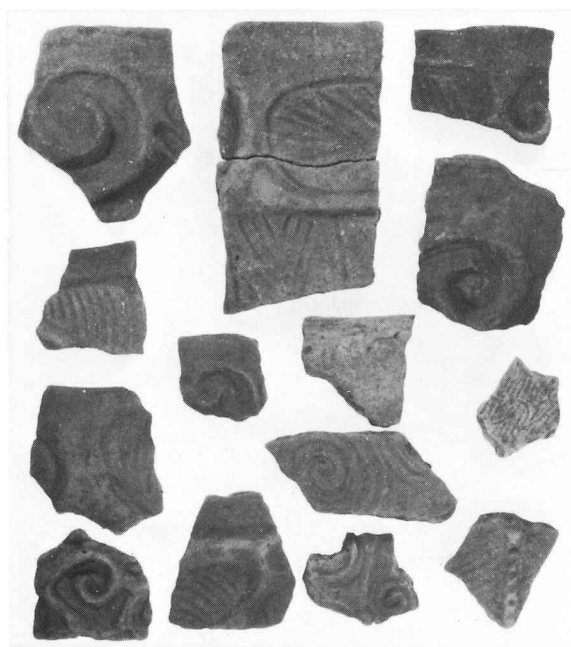
J 5 号住居址出土土器



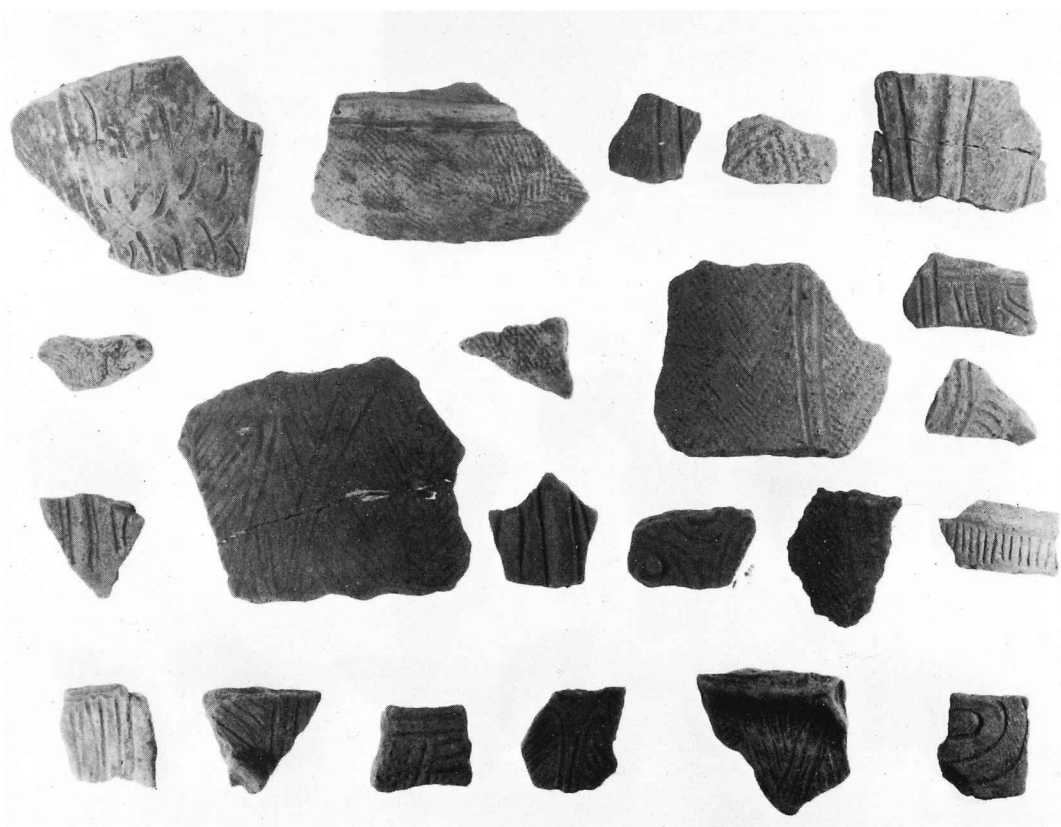
32-2



J 6 号住居址出土土器



37-4



J 7 号住居址出土土器



41-2



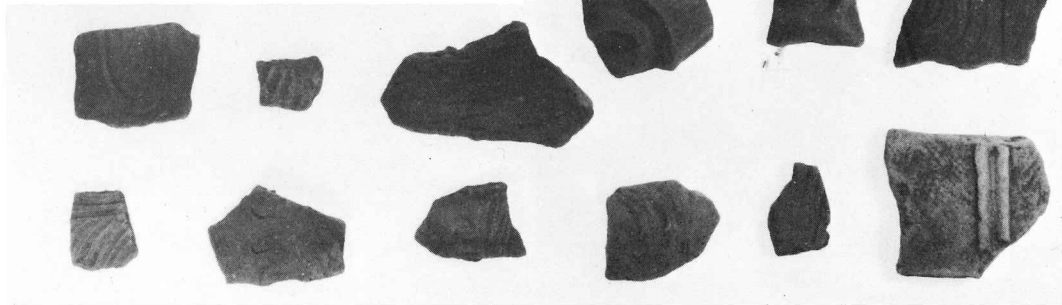
46-1



J 8 号住居址出土土器



J 9 号住居址出土土器





54-3



53-9

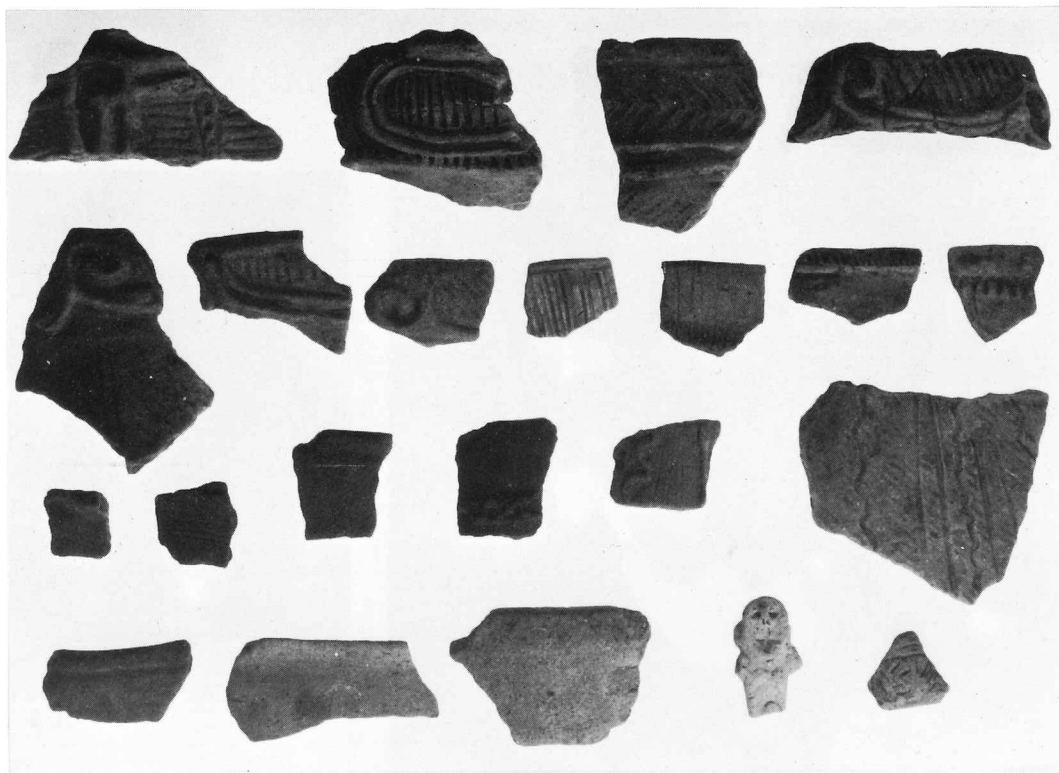


J10号住居址出土土器

52-1



52-7



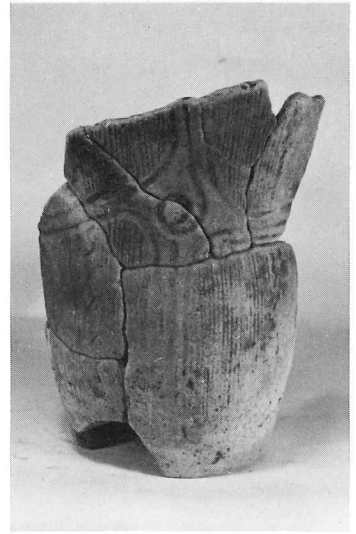
J 10号住居址出土土器



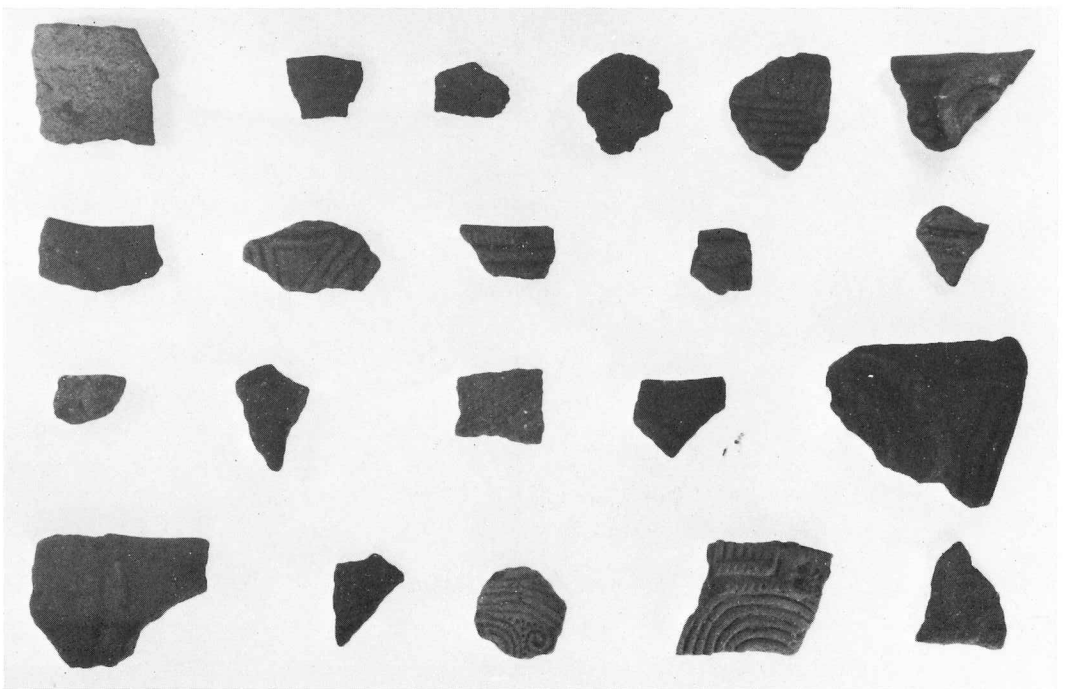
J 11号住居址出土土器



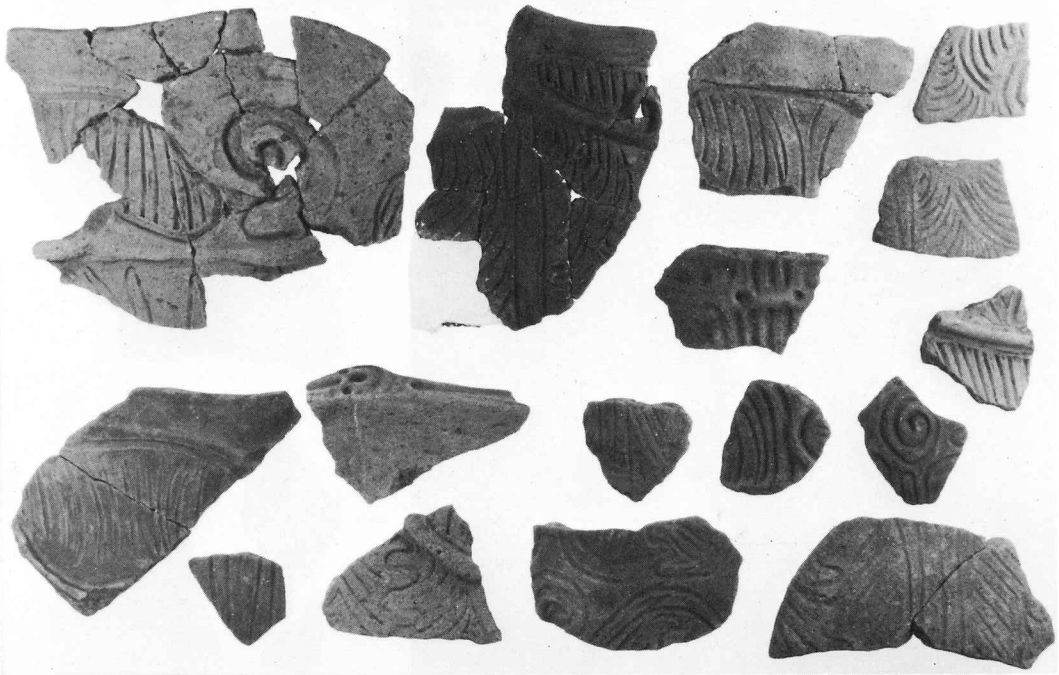
52-2



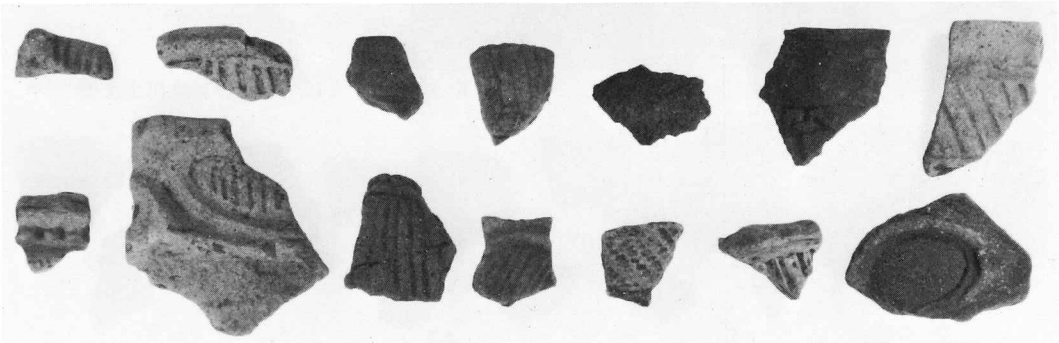
52-3



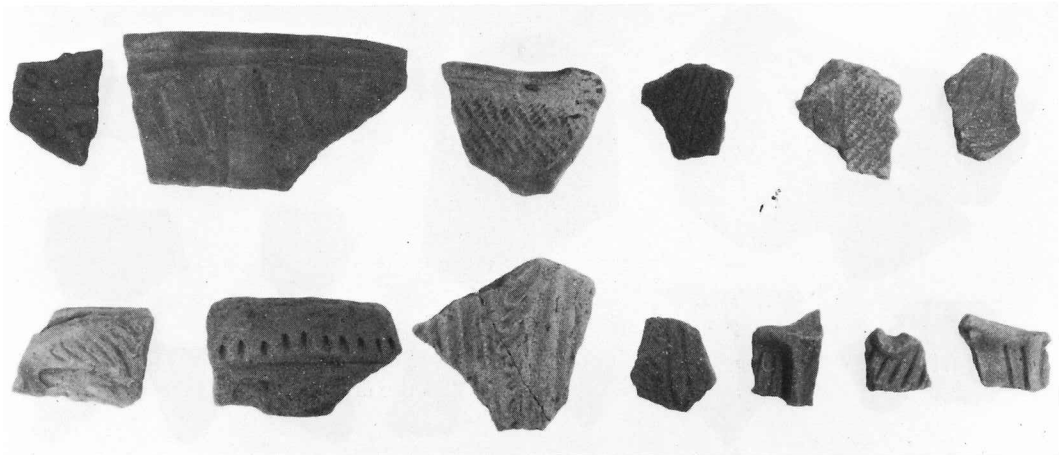
J10号住居址出土土器



J 11号住居址出土土器



J 12・13号住居址出土土器



J 14号住居址出土土器

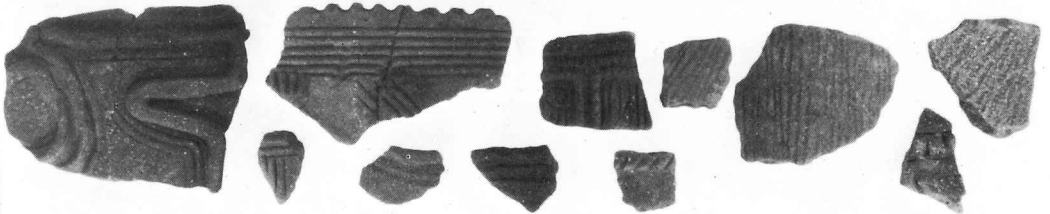
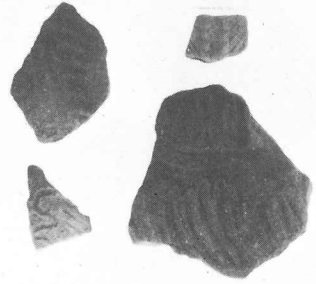


J 14号住居址出土土器

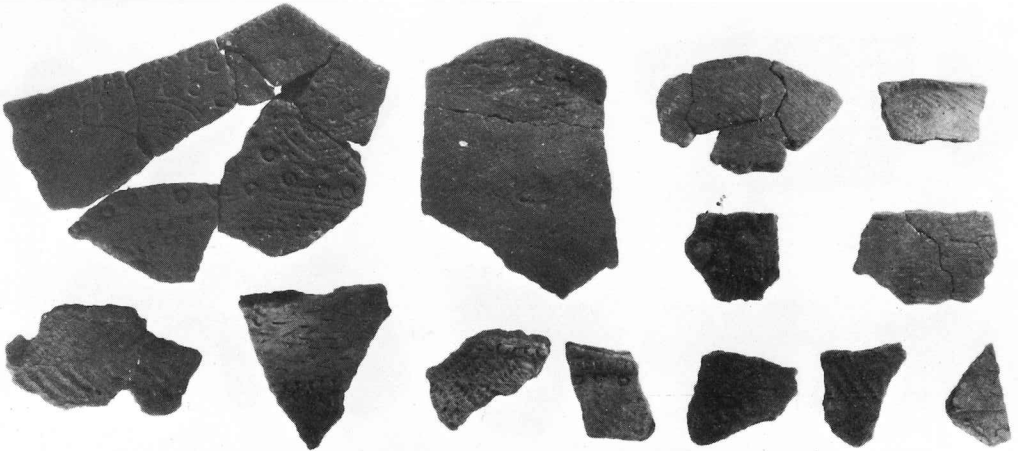
78-1



J 15・16号住居址出土土器



J 15号住居址出土土器

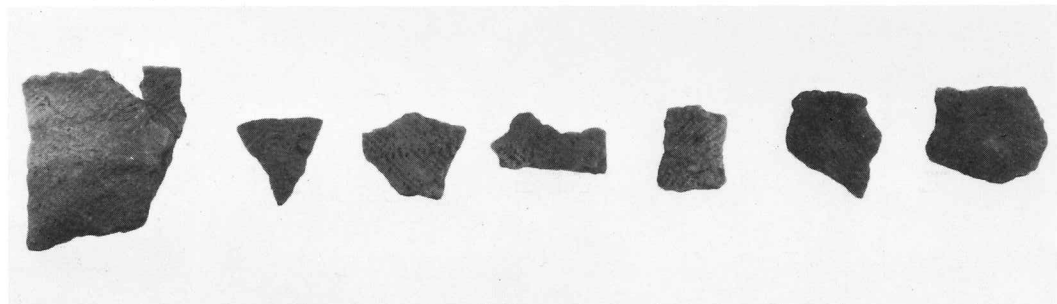


D 5号土壙出土土器

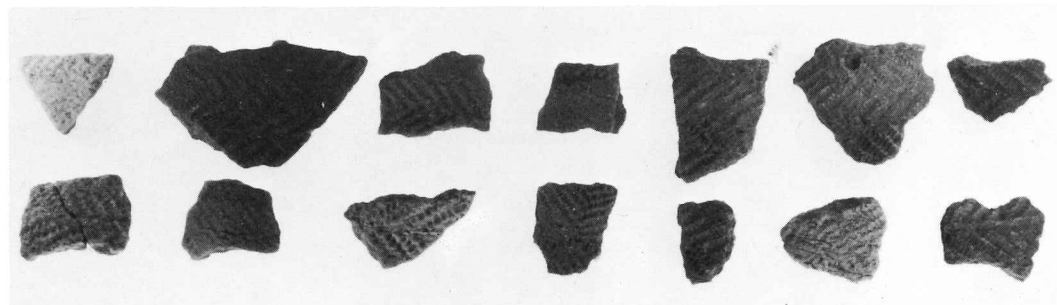


D 4 号土城出土土器

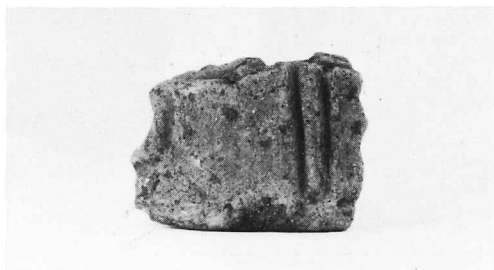
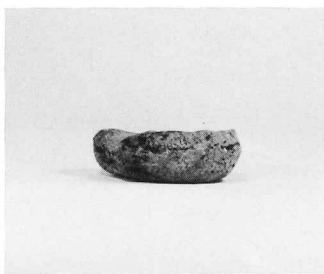
94-1



D 5 号土城出土土器



D 5 号土城出土土器



グリッド出土土器



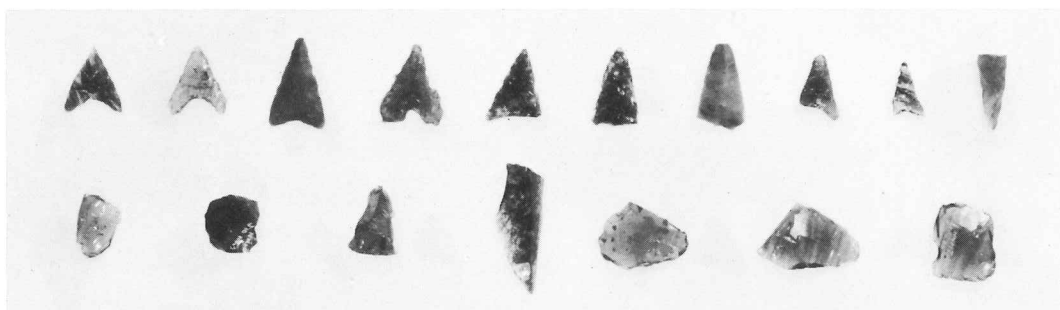
発掘調査スナップ



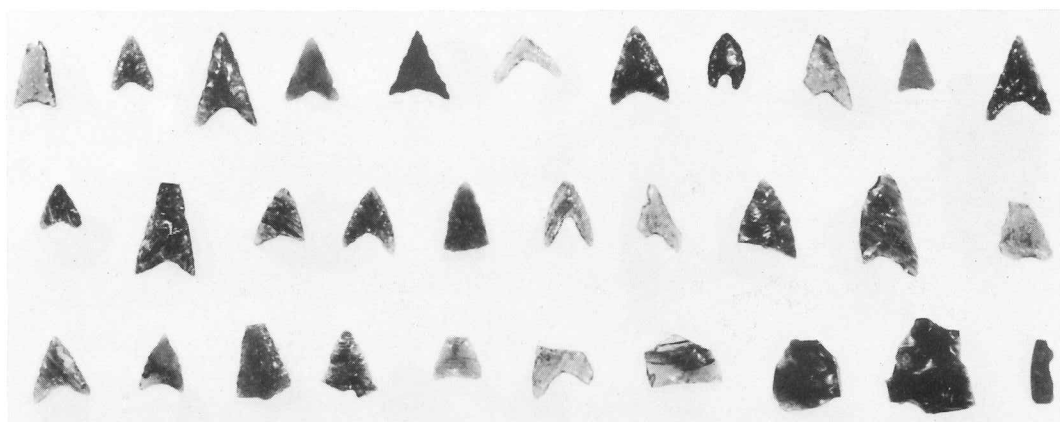
J 1 · 3~4 · 6~8 · 11~13 · 15 M · D 1 号出土石器



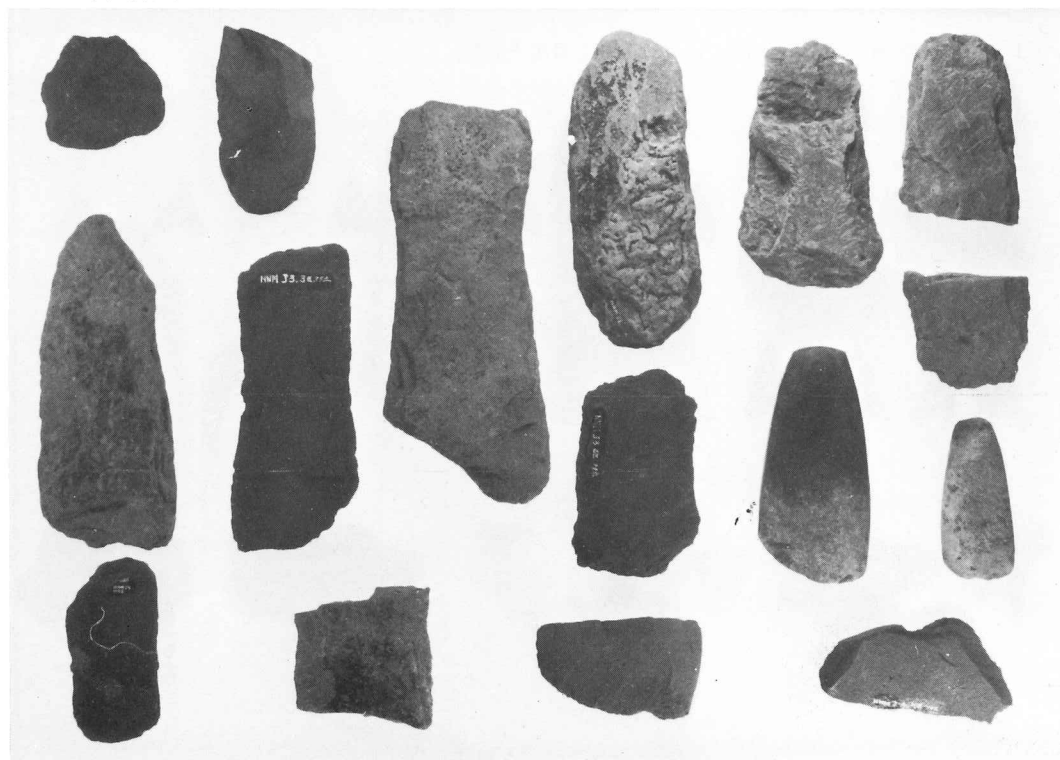
J 5 号住居址出土石器



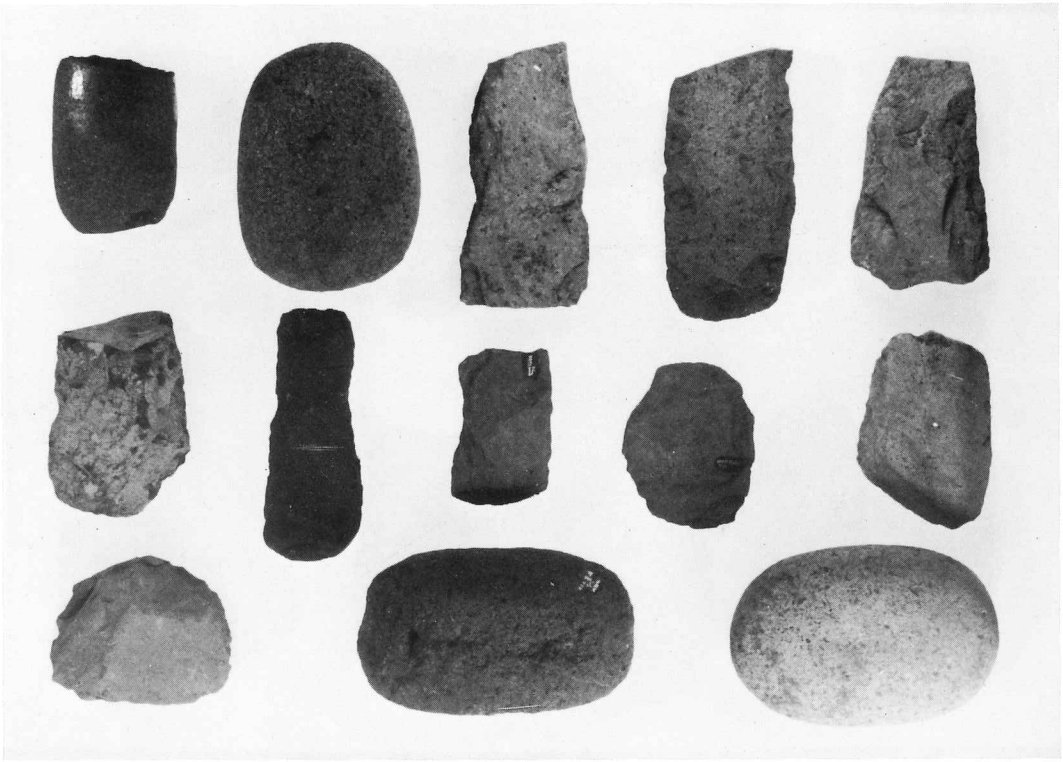
J 10号住居址出土石器



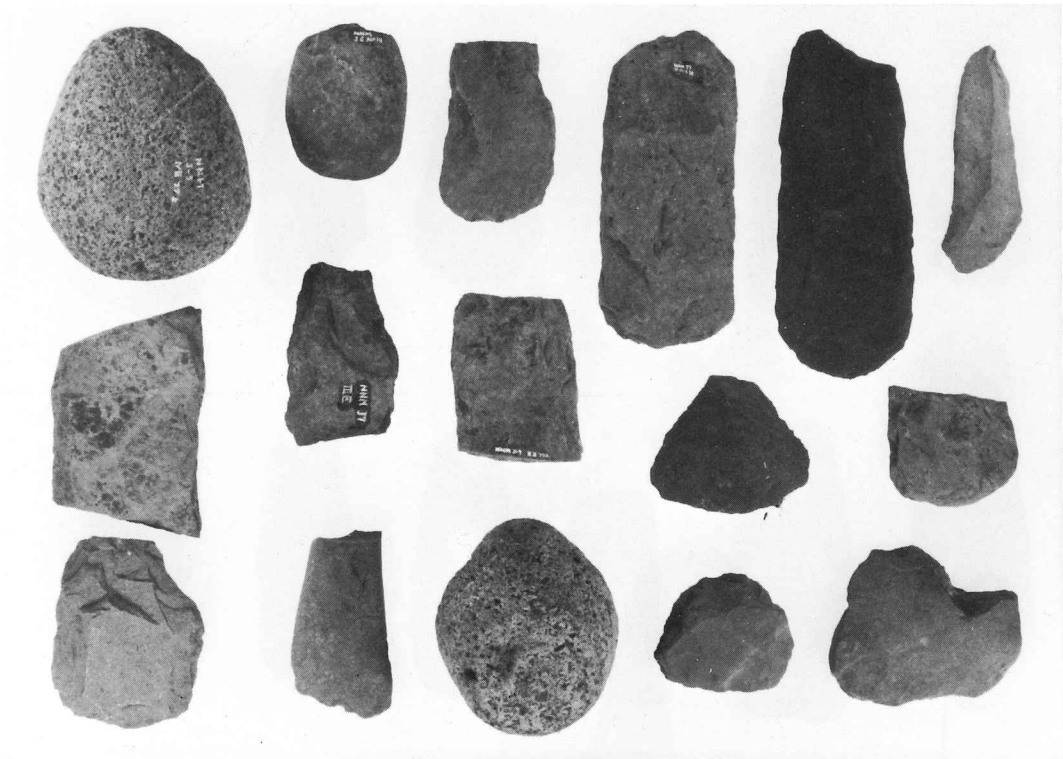
J 10号住居址出土石器



J 1 · 3 · 4 号住居址出土石器



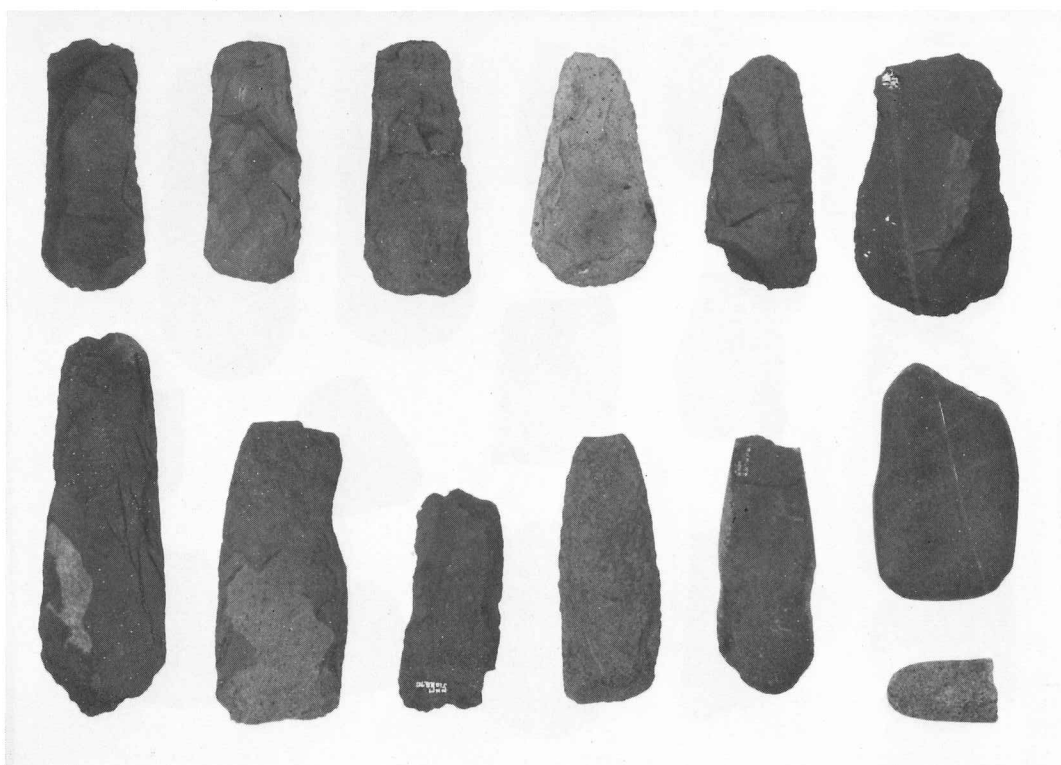
J 4 · 5 号住居址出土石器



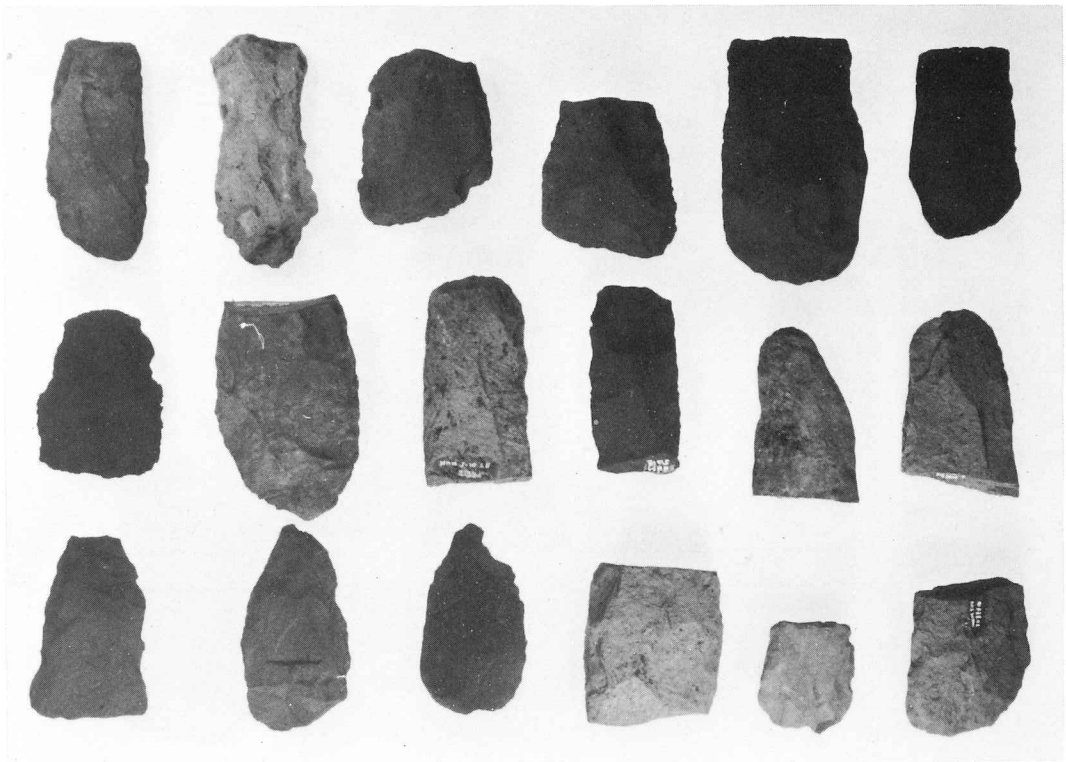
J 5 · 6 · 7 · 8 号住居址出土石器



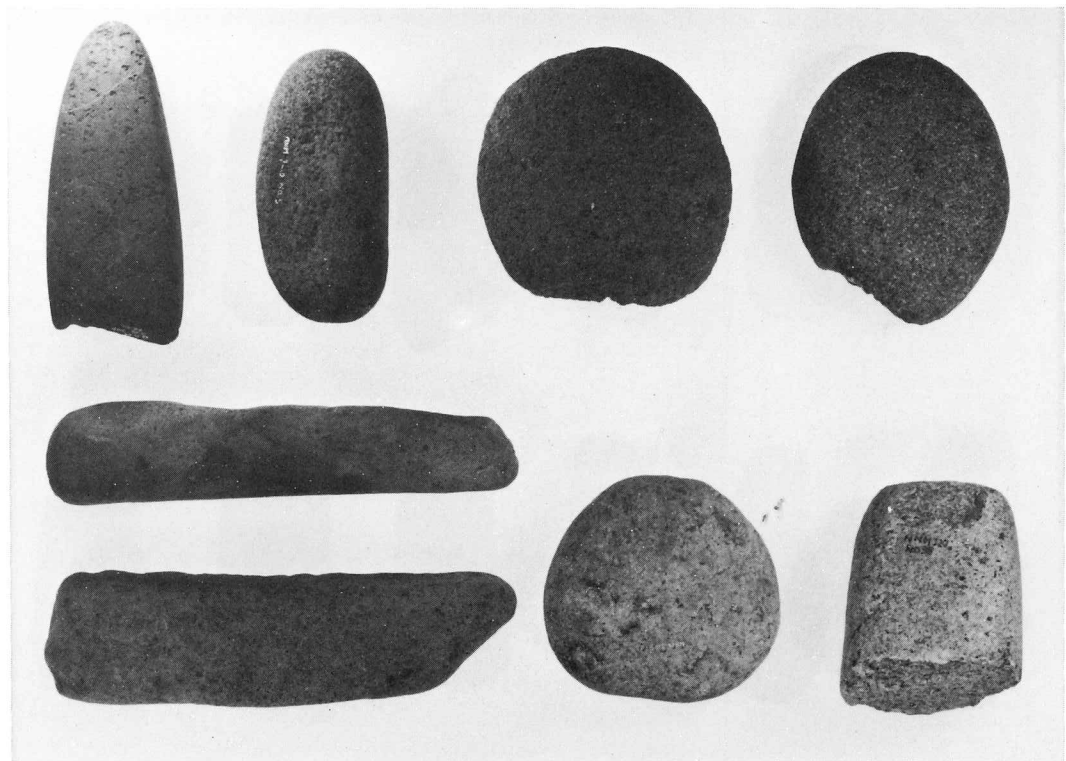
J 9 · 10号住居址出土石器



J 10号住居址出土石器



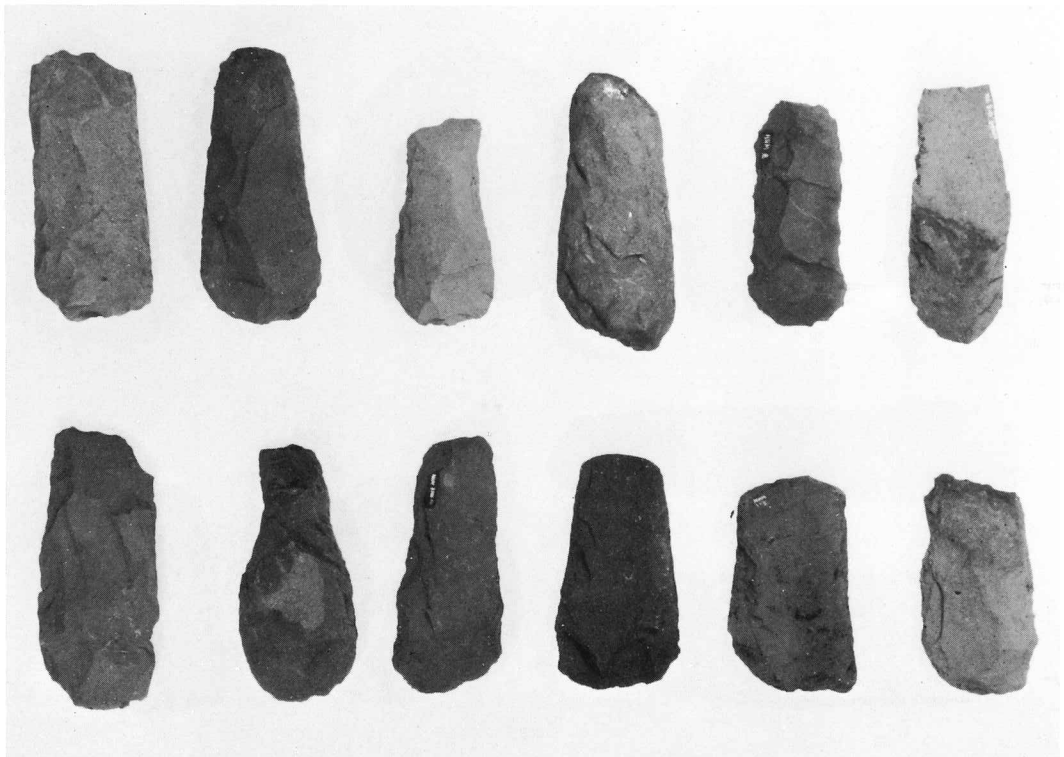
J 10号住居址出土石器



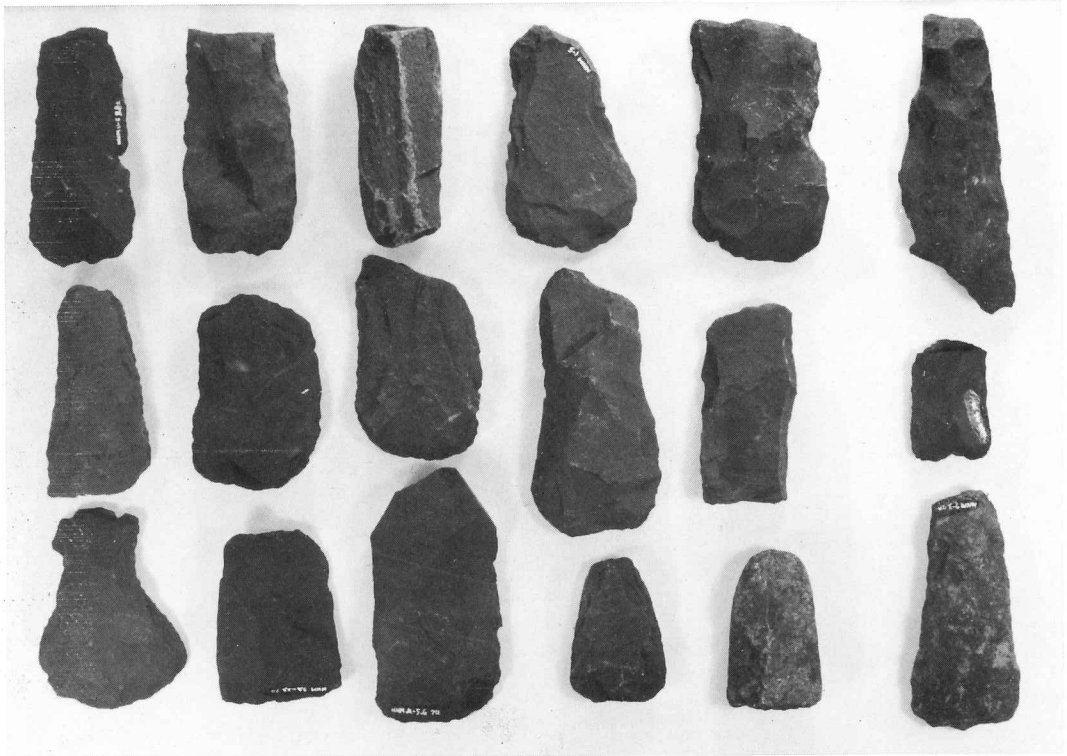
J 10号住居址出土石器



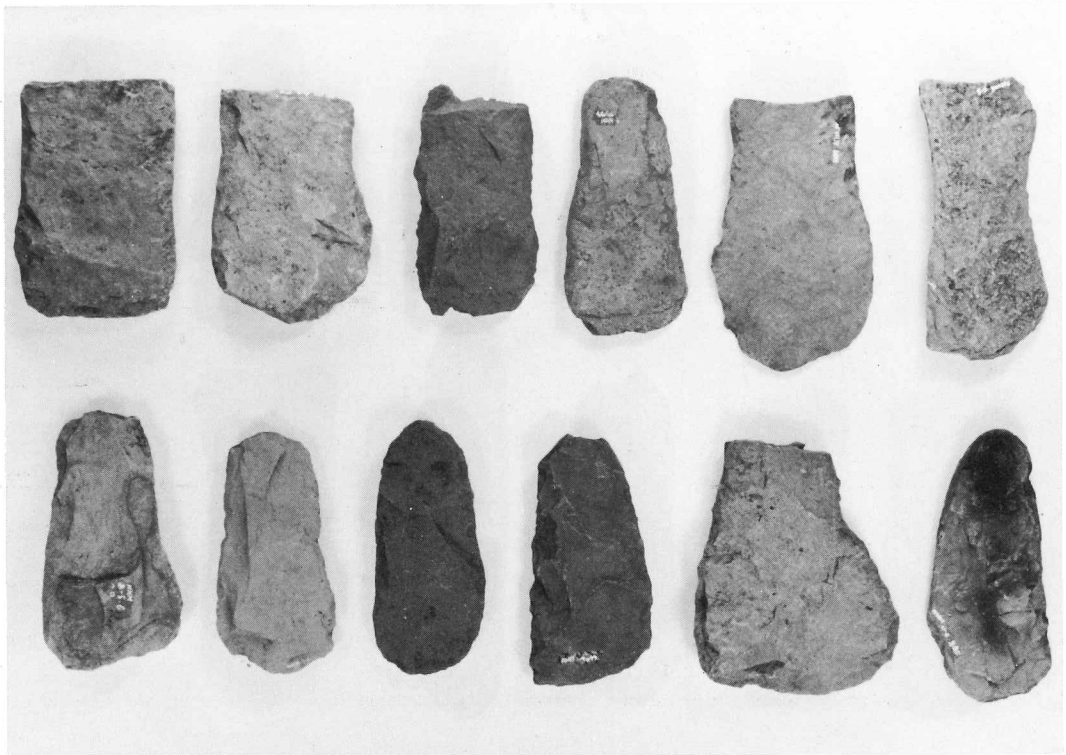
J11・12・13・15 M・D号出土石器



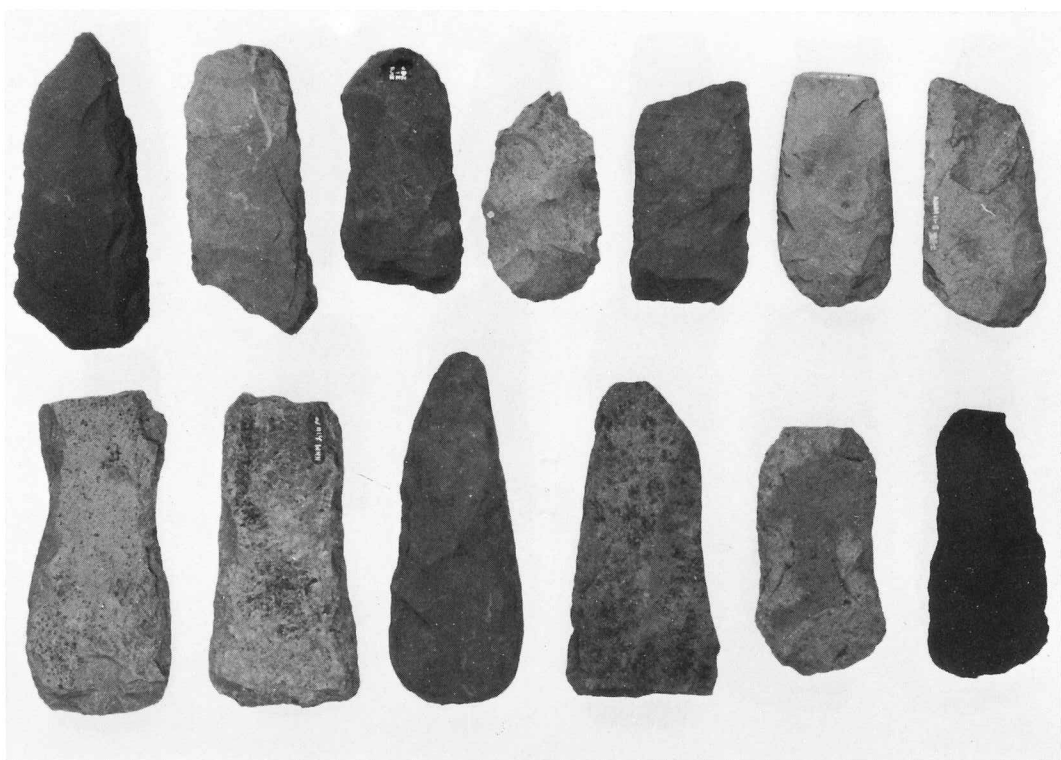
グリッド出土石器



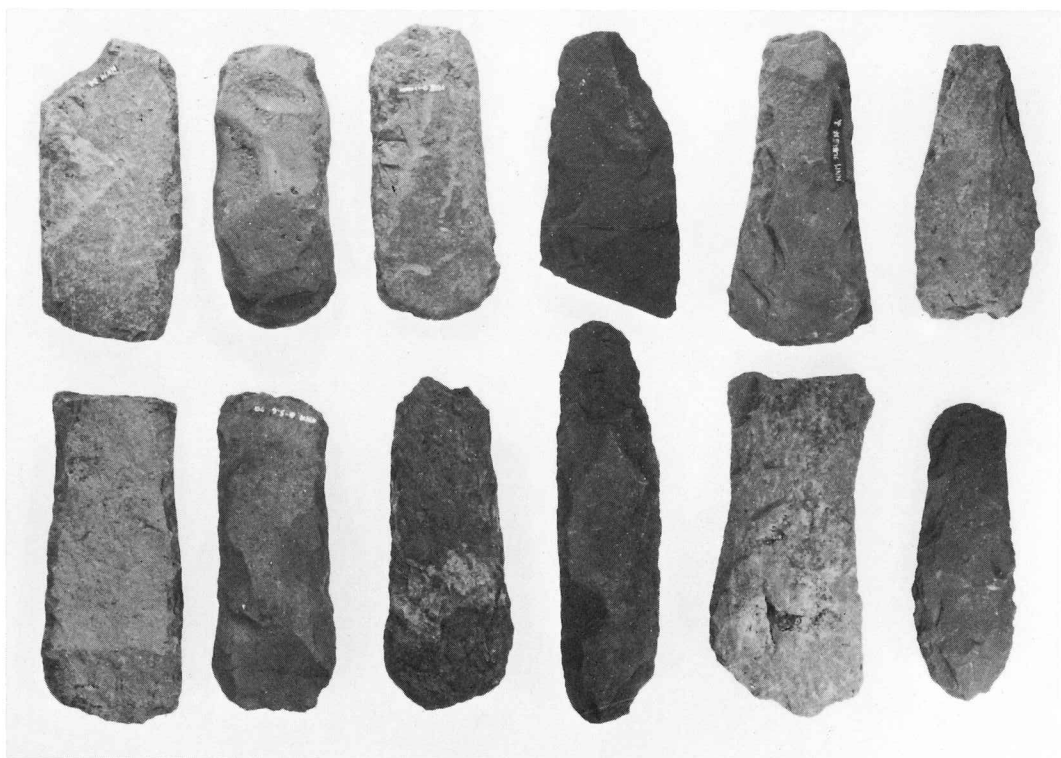
グリッド出土石器



グリッド出土石器



グリッド出土石器



グリッド出土石器

中村遺跡

長野県佐久市緊急発掘調査報告書

発行日 昭和58年3月27日

編集者 中村遺跡発掘調査団

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 株式会社 佐久印刷所